（大町市埋蔵文化財調査報告書第17集）

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

長畑

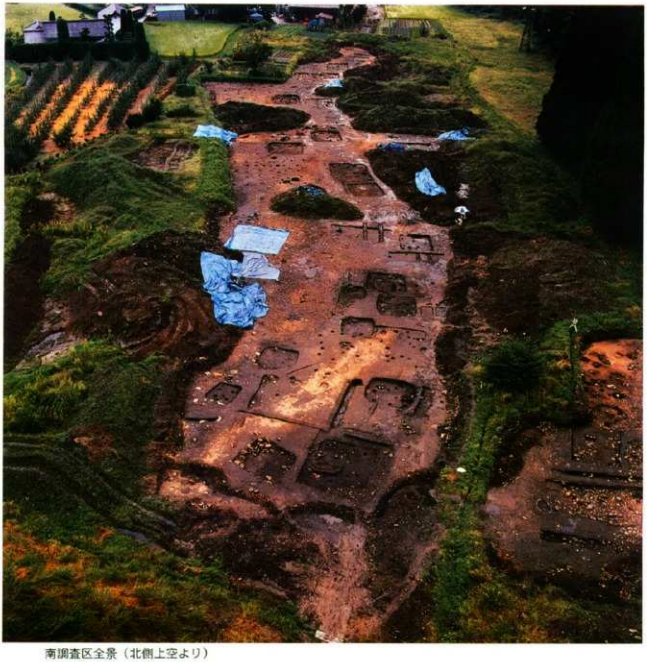
—縄文時代晩期末の集落・平安時代の製鉄・鍛冶集落の調査—

清水氏居館跡

—中世館跡の調査—

1991

大町市教育委員会



南調査区全景（北側上空より）

製鉄関係遺構 2　炉　第 1 面　断面

北調査区　縄文時代晩期集石群、柱穴群等全景

製鉄関係遺構2　炉　第2面

製鉄関係遺構2　炉　第2面前庭部（湯口?）断面

製鉄関係遺構2　炉　第2面　断面

製鉄関係遺構2　炉　第2面　るつぼ状遺構付近断面

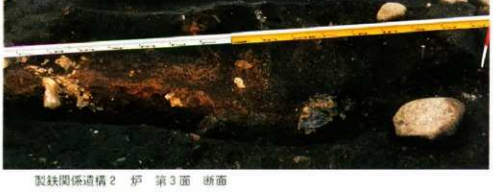
製鉄関係遺構2　炉　第2面　るつぼ状遺構断面（天井と思われる炉体が落ちる。）

長畑遺跡

製鉄関係遺構2　炉　第2面　るつぼ状遺構

製鉄関係遺構2　炉　第2面　るつぼ状遺構内部状況

製鉄関係遺構2　炉　第3面　検出状況



製鉄関係遺構2　炉　第3面　断面

製鉄関係遺構3　1号炉　検出状況（東より）

製鉄関係遺構3、1号炉　前庭部の断面

製鉄関係遺構3　1号炉　前庭部の断面

長畑遺跡

製鉄関係遺構３　１号炉　全景（南より）

製鉄関係遺構３　１号炉全景（西より）

製鉄関係遺構３　１号炉　鉱滓、羽口出土状況

清水氏居館跡

全景（東上空より）

1号住居跡（黄色部分はローム土層の貼床。東より）

清水氏居館跡

2 号住居跡礫検出状況（南より）

2 号住居跡礫除去後（赤黄色に見えるのは壁土崩落土。南より）

2 号住居跡壁土崩落土堆積状況（南より）

2 号住居跡炭化材出土状況

2 号住居跡北西隅　炭化材出土状況

2 号住居跡基礎　木組み

2号住居跡　北東隅　木組み

2号住居跡　南東隅　礎石上の基礎木組み

2号住居跡礎石検出状況（北より）

6号住居跡　花瓶出土状況（赤黄色のものは、壁土崩落土）

長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

長　畑

—縄文時代晩期末の集落・平安時代の製鉄・鍛冶集落の調査—

清水氏居館跡

—中世館跡の調査—

1991

大町市教育委員会

序

長畑遺跡・清水氏居館跡は、大町市南西に形成する山麓の末端、常盤清水地区に立地する。今回の調査は県営ほ場整備に先立つ緊急発掘調査である。常盤地区においては、具体的にその内容を知りうるような本格的な遺跡調査は実施されたことがなかった。

調査は事業予定地のほぼ全面を対象として行われ、予想をはるかに上回る数多くの遺構・遺物が発見された。なかでも注目を集めたのは、長畑遺跡では製鉄跡の発見、清水居館跡では居館の全体像がはっきりとしたことであり、当地方における製鉄集団の在り方、居館の在り方を探る上で極めて重要な新知見を与えることとなった。

本報告書は極力、発掘調査結果の事実記載につとめたものであるが、紙数等の制約から必ずしも意を尽くしきれなかった部分もあるのでご了承いただきたい。本書をひとつの研究ベースとして活用され、多くの方々によって研究が深められることを期待したい。

調査に関しては、この仕事に直接あたってくださった調査団長や先生方、さらに熱心に作業に身を投じてくださった作業員の皆さんの多大な御尽力によって当初の目的に達することができました。

この調査に当たり、調査団員の方々、作業員のみなさん、地主及び地元関係各位の多大な御尽力によって、このような成果を得られたことに重ねて感謝を申しあげ、ここに深甚なる敬意を表する次第であります。

平成３年３月

大町市教育委員会
教育長　矢口　格

例　　言

1．本書は、平成１・２年度に北安曇地方事務所長と、大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行われた、県営ほ場整備事業に伴う、緊急発掘調査「長畑遺跡・清水氏居館跡」の報告書である。

2．調査にあたっては、大町市教育委員会が組織した大町市埋蔵文化財調査団により実施された。

3．本調査は、多くの学識経験者、市民、関係機関諸氏の協力からなったものである。

4．調査結果については、調査団員で協議を重ねたが、時間的等の制約があり統一見解に至らなかった。基本的事項の統一はできる限り図ったが、表現方法等に多少の相違がある点は了解されたい。

5．現場測量整理作業と原稿執筆は関係者の協議により決定した。

- 遺構測量は、荒沢進・島田哲男・清水隆寿・新井和男・臼井潤・横沢和子・北沢和子・牛越真由美が行い、一部長畑遺跡においては新日本航業、清水氏居館跡では中央航業に委託して、写真測図を併用した。
- 遺跡の地形・地質等については、森義直が行った。
- 遺物整理作業は、島田・清水・臼井・横沢・北沢・牛越・金原隆子・中条幸美・小日向美香・富田みつ子・大和芳子が行い、遺物実測は島田・清水・多田井用章・設楽博己が行った。
- 原稿執筆については、第Ⅰ章が事務局で、第Ⅱ章第１節が森義直、第Ⅴ章が篠崎健一郎の他は島田が行った。
- 製鉄関係のスラグ等に関しては、篠崎益雄氏を通じ、国立歴史民俗博物館田口勇氏から、縄文時代晩期土器に関しては、国立歴史民俗博物館設楽博己氏から、中世陶磁器については、㈱長野県埋蔵文化財センターの市川隆之氏・原明芳氏に御教示いただいたので記して感謝したい。
- 遺構写真撮影は島田が主に、清水・臼井が一部行い、遺物写真撮影は臼井が主に行った。

6．方位は都市計画図（１：2,500）から求めた座標北を使用している。

7．本書の編集は、全員協議のもと事務局で行ない、篠崎健一郎が総括した。

8．本書関係の実測図・記録写真・遺物等は大町市教育委員会が保管している。なお、関係資料については、清水長畑遺跡を記号化し「ＳＮＢ」、清水清水氏居館跡を記号化し「ＳＳＫ」と注記した。

本文目次

巻頭図版　1～10

序

例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第1節　経過概要 …… 1

第2節　調査体制 …… 2

第3節　調査日誌 …… 3

第4節　調査方法 …… 8

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 11

第Ⅲ章　長畑遺跡 …… 17

第Ⅳ章　清水氏居館跡 …… 80

第Ⅴ章　結　語 …… 139

写真1～90

図　目　次

図1　長畑遺跡付近ほ場整備事業施行計画図（1：5000）……6
図2　清水氏居館跡付近ほ場整備事業施行計画図（1：5000）……7
図3　長畑遺跡発掘区（1：2500）……9
図4　清水氏居館跡発掘区（1：2500）……10
図5　長畑遺跡・清水氏居館跡土層柱状図……12
図6　常盤地区の遺跡（1：20000）……15
図7　縄文時代中期初頭土坑群（1：60）……19
図8　6・7号住居跡（1：60）……21
図9　土坑5（1：60）……21
図10　集石群（集石土坑群）、列石1・2、柱穴群3（1：80）……22
図11　土坑1・15・36・埋甕（土坑15のみ1：60、他は1：30）……24
図12　柱穴群1、土坑1・16・17（1：60）……25
図13　柱穴群2、土坑18、埋甕、建物跡7（1：60）……27
図14　2号住居跡（1：30）……28
図15　1・38号住居跡（上）14号住居跡（下）（1：60）……29
図16　3号住居跡（上）、4・8号住居跡（下）（1：60）……30
図17　5号住居跡（1：60・上は遺物出土状況。）……31
図18　5号住居跡詳細図（1：30）……32
図19　9・10・13号住居跡、製鉄関係遺構2（1：60）……33
図20　9号住居跡（1：60、上は炭水化物等出土状況）……35
図21　上：9号住居跡（1：30）、下:13号住居跡（1：60）……36
図22　11・12号住居跡（1：60）……37
図23　15・16号住居跡（1：60）……38
図24　17・18・19・20号住居跡（19号住居跡カマド1：30以外は、1：60）……39
図25　19・21・22号住居跡（1：60）……40
図26　23・24・25号住居跡、製鉄関係遺構3（3－2号炉）、炭焼き窯（1：60）……41
図27　26・27・29・40号住居跡（1：60）……43
図28　26・27号住居跡炭化材等出土状況（1：60）……42
図29　28・29号住居跡（1：60）……45
図30　29・30・39号住居跡、建物跡4、土坑51～62、柱穴群5（1：60）……47
図31　32号住居跡（上1：60、下1：30）……48
図32　31・33号住居跡（1：60）……49

図33　35号住居跡（上１：60、下１：30）……50
図34　34・36号住居跡（１：60）……51
図35　製鉄関係遺構１（上）・製鉄関係遺構２検出状況（下）（１：60）……52
図36　製鉄関係遺構２炉（１：30）炭焼き窯（１：60）……53
図37　製鉄関係遺構３（１：60）……54
図38　製鉄関係遺構３の炉（上は３－１号炉、下は３－２号炉）（１：30）……55
図39　建物跡１、建物跡３（１：60）……57
図40　建物跡２・６（柱穴群７）（１：60）……56
図41　建物跡５（柱穴群６）・土坑19（１：60）……59
図42　列石１（１：60）……60
図43　縄文時代晩期末の土器（１）・土坑１出土土器（１）（１：３）……64
図44　縄文時代晩期末の土器（２）・土坑１出土土器（２）（１：４）……62
図45　縄文時代晩期末の土器（３）・土坑１出土土器（３）（１：４）……63
図46　縄文時代晩期末の土器（４）（１：４）……64
図47　縄文時代晩期末の土器（５）（１：４）……65
図48　縄文時代晩期末の土器（６）（１：４）……66
図49　縄文時代晩期末の土器（７）（１：３）……67
図50　縄文時代晩期末の土器（８）（１：４）……68
図51　縄文時代晩期末の土器（１：３）……69
図52　縄文時代晩期末の土器（１：４）……70
図53　縄文時代土製円板（１：３）……71
図54　平安時代の土器（１）（１：４）……72
図55　平安時代の土器（２）（１：４）……73
図56　平安時代の土器（３）（１：４）……74
図57　平安時代の土器（４）（１：４）……75
図58　平安時代の土器（５）（１：４）……76
図59　平安時代の土器（６）（１：４）……77
図60　平安時代の土器（７）、中世の陶磁器（１：４）……78
図61　鉄製品（１：２）……79
図62　清水氏居館跡遺構図割付図（１：1200）……81
図63　遺構図１（１：100）……82
図64　遺構図２（１：100）……83
図65　遺構図３（１：100）……84
図66　遺構図４（１：100）……85
図67　遺構図５－１（１：100）……86

図68　遺構図５－３（１：100）……87
図69　遺構図６（１：100）……88
図70　遺構図７（１：100）……89
図71　遺構図８（１：100）……90
図72　遺構図９（１：100）……91
図73　遺構図10（１：100）……92
図74　遺構図11（１：100）……93
図75　遺構図12（１：100）……94
図76　遺構図13（１：100）……95
図77　遺構図14（１：100）……96
図78　遺構図15（１：100）……97
図79　遺構図16（１：100）……98
図80　遺構図17（１：100）……99
図81　遺構図18（１：100）……100
図82　遺構図19（１：100）……101
図83　遺構図20（１：100）……102
図84　遺構図21（１：100）……103
図85　遺構図22（１：100）……104
図86　遺構図23（１：100）……105
図87　遺構図24（１：100）……106
図88　遺構図25（１：100）……107
図89　遺構図26（１：100）……108
図90　遺構図27（１：100）……109
図91　遺構図28（１：100）……110
図92　遺構図29（１：100）……111
図93　遺構図30（１：100）……112
図94　遺構図31（１：100）……113
図95　遺構図32（１：100）……114
図96　遺構図33（１：100）……115
図97　遺構図34（１：100）……116
図98　遺構図35（１：100）……117
図99　遺構図36（１：100）……118
図100　主郭建物跡群、竪穴16～23、土坑等（１：60）……119
図101　東側外堀内礫石列（柱列15）（１：60）……120
図102　１号住居跡（上）・９号住居跡（下）（１：60）……121

図103　8号住居跡、竪穴12～14周辺（1：60）……123
図104　2号住居跡炭化材、礫検出状況（上）、炭化材検出状況（下）（1：60）…… 124
図105　2号住居礎石状石列（上 、6号住居跡（下）…… 125
図106　4・5号住居跡・建物跡5・竪穴6（1：60）……126
図107　7号住居跡、竪穴1・3（1：60）……128
図108　竪穴4・24、土坑5・25（火葬墓）、配石1・2・4（1：60）…… 129
図109　堀土層断面図（1）（1：60）……131
図110　堀土層断面図（2）（1：60）……130
図111　堀土層断面図（3）（1：60）……133
図112　金属製品（1：2）……134
図113　砥石（1：2）……135
図114　銭（1）（1：1）……137
図115　銭（2）（1：1）……138

写　真　目　次

巻頭図版１　長畑遺跡　　南調査区全景　　製鉄関係遺構２
巻頭図版２　長畑遺跡　　北調査区全景　　製鉄関係遺構２
巻頭図版３　長畑遺跡　　製鉄関係遺構２
巻頭図版４　長畑遺跡　　製鉄関係遺構２
巻頭図版５　長畑遺跡　　製鉄関係遺構３－２号炉
巻頭図版６　長畑遺跡　　製鉄関係遺構３－２号炉
巻頭図版７　清水氏居館跡　　全景　　１号住居跡
巻頭図版８　清水氏居館跡　　２号住居跡
巻頭図版９　清水氏居館跡　　２号住居跡
巻頭図版10　清水氏居館跡　　２号住居跡　　６号住居跡

長畑遺跡

写真１　１．遠景　　２．近景
写真２　南側調査区（Ⅱ区）全景
写真３　１．北調査区（Ⅰ区）全景　　２．南調査区（Ⅱ区）北側全景
写真４　１．南側調査区（Ⅱ区）中央北側全景　　２．南調査区（Ⅱ区）中央南側全景
写真５　１．縄文時代前期末～中期初頭土坑群　　２．縄文時代前期末～中期初頭土坑群
写真６　縄文時代前期末～中期初頭　　１．土坑26　　２．土坑46　　３．土坑31
４．土坑43　　５．縄文時代中期後半、37号住居跡
写真７　１．柱穴群４　　２．柱穴群４内土器出土状況　　３．土坑５　　４．土坑15
写真８　１．縄文時代晩期末集石群（土坑群）、列石、柱穴群３全景
２．集石群（土坑群）全景　　３．列石２
写真９　縄文時代晩期末集石群（土坑群）１．土坑70～73付近　　２．土坑40～42付近
写真10　縄文時代晩期末集石群（土坑群）１．土坑41・42・47付近　　２．土坑２集石
３．土坑２断面　　４．土坑42　　５．土坑40
写真11　縄文時代晩期末集石群（土坑群）１．集石群東側土器集中出土状況　　２．土坑47
３．土坑48　　４．土坑67・79・80上面集石　　５．土坑68
写真12　縄文時代晩期末集石群（土坑群）１．集石群東側土器出土状況
２．土器集中内出土滑石製管玉未製品　　３．集石群内出土浅鉢
４．集石群、列石２東側、柱穴群３
写真13　縄文時代晩期末１．土坑１検出状況　　２．土坑１　　３．土坑39
４．土坑36土器出土状況
写真14　縄文時代晩期末埋甕
写真15　縄文時代晩期末柱穴群土坑16・17

写真16　1．2柱穴群2（縄文時代晩期末）建物跡7（平安時代）　3．柱穴群3

写真17　1・2号住居跡　平安時代　2．1・38号住居跡、列石1　3．4・8号住居跡

写真18　平安時代　1．4・8号住居跡　2．5住居跡　3．5号住居

写真19　平安時代　5号住居跡　1．（南より。金床石等除去後）　2．金床石
3．金床石西側ピット　4．金床石南側ピット　5．4のピット内鉄滓出土状況
6．東壁南側ピット　7．遺物出土状況

写真20　平安時代　9号住居跡　1．検出状況　2．炭化材出土状況　3・4、カマド

写真21　平安時代　1．11・12号住居跡　2．10号住居跡カマド　3．12号住居跡カマド
4．11・12号住居跡上の土層

写真22　平安時代　13号住居跡　1．検出状況　2．全景　3．全景

写真23　平安時代　1～4、13号住居跡カマド　5．14号住居跡

写真24　平安時代　1～3、15号住居跡　1．全景　2．羽口出土状況
3．集石ピット　4．17号住居跡

写真25　平安時代　1．18・20号住居跡　2．21号住居跡　3．19・20号住居跡

写真26　平安時代　1．19号住居跡　2．19号住居跡カマド　3，23号住居跡カマド
4．23号住居跡

写真27　平安時代　1、2、25住居跡・炭焼き窯　3．24号住居跡カマド
4．25号住居跡カマド

写真28　平安時代　1．26号住居跡炭化材出土状況　2．27号住居跡
3．29号住居跡炭化材等出土状況

写真29　平安時代　1．29号住居跡　2．3、29号住居跡カマド　4．30号住居跡

写真30　平安時代　1．30号住居跡カマド　2．30号住居跡内北西遺物出土状況
3．32号住居跡　4．5．32号住居跡カマド

写真31　平安時代　1～3、33号住居跡　4．34号住居跡

写真32　平安時代　1～4、34号住居跡　5．34・35号住居跡

写真33　平安時代　1～3、35号住居跡　4．36号住居跡

写真34　平安時代・製鉄関係遺構1（炉）炉

写真35　平安時代　製鉄関係遺構2　1．炉、灰原検出状況　2．炉検出状況
3．灰原状況

写真36　平安時代　製鉄関係遺構2　1．2．排滓溝検出状況・断面　3．炉・第1次面
3．炉・第1次面

写真37　平安時代　製鉄関係遺構2・炉　1．第2次炉床面　2．第2次炉床面
3．第2次炉床面断面

写真38　平安時代　製鉄関係遺構2・炉　1．第2次炉床面断面　2．第3次炉床面
3．第3次炉床面　4．第3次炉床面断面

写真39　中世　製鉄関係遺構3　1．全景　2．3－2号炉検出状況

写真40　中世　製鉄関係遺構　3－2号炉　1．断面　2．排滓溝断面

3．排滓溝端部断面

写真41　中世　製鉄関係遺構３－２号炉　1．全景　2．全景　3．炉床断面

4．炉南側排滓溝スラグ・窯体出土状況

写真42　中世　製鉄関係遺構３－１号炉床全景

写真43　1．2．炭焼き窯　3．建物跡１

写真44　中世　1．建物跡１　2・3、建物跡２・６（柱穴群７）　4．建物跡３

写真45　中世　1．建物跡３　2．建物跡４、柱穴群５、土坑51～62

3．建物跡５（柱穴群６）

写真46　中世　1．建物跡３内出土常滑系甕出土状況　2．土坑33（火葬墓）

3．土坑55　4．土坑55断面　5．土坑56　6．土坑19　7．列石１

写真47　1．2．列石１（中世～近世のものと思われる。）　1．（東より）　2．（北より）

3．溝（西より。調査区南端にあり、平安時代か中世頃のものと思われる。）

写真48　1．縄文時代中期初頭の土器。　3．縄文時代晩期末の土器。

2．4．弥生時代の土器。平安時代の土器　5．４号住居跡　6．５号住居跡

7．8．10号住居跡　9～12、13号住居跡

写真49　平安時代の土器　1～６、13号住居跡（１は墨書土器で２がその文字）

7～９．26号住居跡　10．30号住居跡

写真50　平安時代の土器　1・2．30号住居跡　3．33号住居跡

4～7．35号住居跡（５は墨書土器、７はその文字「子」）

8～10．墨書土器墨書　8．28号住居跡　7．５号住居跡

8．29号住居跡「子」

写真51　縄文時代晩期末の石器　1．打製石斧（石鍬）　2．磨製石斧

清水氏居館跡

写真52　1・2　遺景

写真53　1．遺景　2．全景

写真54　全景

写真55　1．全景　2．主郭全景

写真56　1．主郭の南東部郭全景　2．主郭の西部郭および、南西部、外堀西側郭

写真57　主郭の南東部郭全景

写真58　1．調査区南東部全景　2．主郭の南西部全景

写真59　1．主郭の南東部郭　2．主郭の北東部、外堀の遺構

写真60　1．2．１号住居跡

写真61　1．８号住居跡　2．９号住居跡

写真62　1．2．4・５号住居跡

写真63　２号住居跡　1．検出状況　2．検出状況　3．埋没状況断面

写真64　２号住居跡礫・炭化材検出状況

写真65　2号住居跡　1．礫除去後　2．礫除去後　3．壁土崩落土堆積状況

写真66　2号住居跡　1．壁土崩落堆積状況　2．基礎木組み炭化材状況
3．床面出土の炭化米

写真67　2号住居跡基礎木組み炭化材出土状況

写真68　2号住居跡炭化材除去後

写真69　2号住居跡礎石状列石上の炭化材出土状況

写真70　2号住居跡礎石状列石検出状況

写真71　2号住居跡礎石状列石検出状況

写真72　6号住居跡

写真73　6号住居跡

写真74　主郭　1．礎石建物跡　2．礎石建物跡・掘立柱建物等の主郭建物跡群

写真75　主郭　1．竪穴17～20、29等　2．7号住居跡

写真76　1．主郭東側の建物跡7　2．建物跡7　3．竪穴12～14、8号住居跡周辺

写真77　1．建物跡3・4　2．建物跡6

写真78　1．建物跡9・10、柱穴列3～5・15　2．建物跡12・13、溝13　3．建物跡13

写真79　建物跡16

写真80　建物跡5・竪穴6

写真81　建物跡18

写真82　竪穴12～14周辺

写真83　1．主郭全景　2．配石1・2　3．堀土層断面1　4．堀土層断面2

写真84　1．堀土層断面2の掘検出状況　2．南側外堀西端　3．堀土層断面3

写真85　1．堀土層断面5南側堀検出状況　2．1で出土した内耳鍋状態
3．堀土層断面6南側列石2

写真86　1．堀土層断面7　2．堀土層断面10　3．堀土層断面11　4．堀土層断面12
5．東側外堀内礎石列

写真87　主郭西側内堀北端屈曲部分

写真88　1．写真85の2の内耳鍋　2．6号住居跡出土石鉢　3・4．出土銭

写真89　1～3．出土銭

写真90　1・3・7．清水氏居館跡作業風景　2・4．長畑遺跡での気球による写真測図
6．清水氏居館跡現地説明会　7．長畑遺跡現地説明会

第１章　調査の経過

第１節　経過概要

１．調査に至るまでの経過

大町市大字常盤清水地区を中心に、昭和63年度から３ヶ年をかけ、常盤西県営は場整備事業が実施されることとなった。計画地内にある数個所の遺跡の保護については、昭和６２年度から数次にわたり協議を実施してきたが、このうち長畑遺跡及び清水氏居館跡のある地区については、平成元年度に実施されることとなったため、昭和６３年9月1日、最終保護協議を実施し、平成元年・２年の両年度に、大町市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することを確認した。工程配分は、長畑遺跡については、平成元年度に発掘及び整理作業を、平成２年度に整理及び報告書作成作業を実施する、清水氏居館跡については、平成元年度中に発掘から報告書刊行まで終了することとした。

市教委は、平成元年度事業分の委託契約を平成元年５月15日に北安曇地方事務所と結び、文化庁の国庫補助内示を５月25日に受け取り（４月３日付け）、同日から調査準備を始めた。２遺跡のうち、まず長畑遺跡から調査することとし、６月６日から発掘作業を開始した。

２．調査計画の変更とその後の経過

長畑遺跡の発掘作業は９月30日に終了した。この間、雨天等による中止を除くと71日間の発掘作業を実施した。また、清水氏居館跡については、９月18日から11月16日まで、47日間の発掘作業を実施している。

発掘面積は、長畑遺跡が、Ⅰ・Ⅱ区合わせて約8,000㎡、清水氏居館跡が約7,000㎡に及んだ。

清水氏居館跡からは、当初から中世の居館跡に関連した遺構や遺物が出土することが予想されていたが、約500ヶ所にものぼる柱穴をはじめ、それを取り巻く内堀（約40ｍ四方）、外堀（約100ｍ四方）などが出土し、清水石見守の居館跡の存在を裏付ける貴重な発見となった。

この遺跡については、平成元年度中に報告書の刊行まで終了する予定であったが、上記のような出土状況により、整理に時間がかかることが予想されたため、開発主体である北安曇地方事務所と協議し、報告書作成作業を平成２年度に送り、長畑遺跡分と一括して作成することとした。

この変更により、元年度事業額を次のように減額変更した。

［変更前］		［変更後］	
調査総額（100%）	20,330,000円	調査総額（100%）	19,366,408円
開発側負担額（72.5%）	14,739,000円	開発側負担額（72.5%）	14,033,000円
保護側負担額（27.5%）	5,591,000円	保護側負担額（27.5%）	5,333,408円

平成２年度は、専ら整理作業と報告書作成作業に集中した。

このうち、長畑遺跡から出土した製鉄関連遺物の分析鑑定については、平成２年度当初は製鉄メーカーに依頼する予定であったが、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館の情報資料研究部において研究資料に取り上げていただけることとなったため、経費が不要となり、２年度事業額を次のように減額変更した。

［変更前］		［変更後］	
調査総額（100%）	6,121,364円	調査総額（100%）	5,082,000円
開発側負担額（72.5%）	4,431,000円	開発側負担額（72.5%）	3,684,000円

保護側負担額（27.5%）　1,690,364円　　保護側負担額（27.5%）　1,398,000円

なお、平成2年度事業分の委託契約は平成2年5月15日に交わし、国庫補助内示は5月28日に受け取っている（4月4日付け）。

第2節　調査体制

1．調査体制

(1) 大町市教育委員会（文化財担当）

ア．平成元年度

教育長　矢口　格　／　社会教育課長　降幡　忠　／　文化財係長兼課長補佐　降旗正光
同係主事　新井和男・島田哲男　／　同係嘱託職員　臼井　潤
同係臨時職員　大和芳子・清水隆寿・横沢和子

イ．平成2年度

教育長　矢口　格　／　社会教育課長　降幡　忠　／　文化財係長兼課長補佐　降旗正光
同係主事　新井和男・島田哲男　／　同係主事補　清水隆寿　／　同係嘱託職員　臼井　潤
同係臨時職員　金原隆子・中條幸美・富田みつ子

(2) 大町市埋蔵文化財調査団（市教委が組織）

ア．平成元年度

団長　篠崎健一郎　／　副団長　原田　旭　／　調査主任　島田哲男
調査員　荒井和比古・荒沢　進・臼井　潤・清水隆寿・関　賢司・幅　具義・森　義直
調査補助員　伊藤真治

イ．平成2年度

団長　篠崎健一郎　／　副団長　原田　旭　／　調査主任　島田哲男
調査員　荒井和比古・荒沢　進・臼井　潤・清水隆寿・関　賢司・幅　具義・森　義直

(3) 発掘作業員・整理作業員

ア．平成元年度

相沢澄男・青木富士太・飯島播幸・稲沢光子・牛越順一・牛越真由美・薄井志げ子・遠藤充吉・勝野真喜子・上條光則・北沢栄子・北沢和子・北沢　茂・金原重隆・国村ゆかり・小林幹夫・下川悦治・関宗治郎・竹村利忠・中村志津代・西澤百合子・服部力夫・原山昭信・降旗　章・降旗くに子・降旗芳人・峯村道雄・横沢　工・横沢力門・吉原安美

イ．平成2年度

青木富士太・飯島播幸・伊藤真治・小日向美香・北沢栄子・北沢和子・北沢　茂・金原重隆・服部力夫・降旗　章・降旗くに子・降旗芳人・峯村道雄・横沢和子・横沢力門・吉原安美

2．調査協力者

調査にあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。以下、ご芳名を記し、御礼に替えさせていただきます。（敬称略）

(1)　指導者・協力者

設楽博己／樋口昇一／武藤雄六／百瀬長秀／市川隆之／石上周蔵／市村勝己／野村一寿／竹内　稔
原　明芳／神沢昌二郎／直井雅尚／竹原　学／山田真一／山下泰永／小林康男／笹沢　浩／小林秀夫／
森島　稔／岩崎卓也／春成秀爾／神村　透／土屋　積／青木和明／三上徹也／宮下健司／矢口忠良／
矢島宏雄／佐藤信之／臼田武正／高村博文／堤　隆／青沼博之／桐原　健／平林　彰／百瀬新治／
山岸洋一／山田瑞穂／大沢　哲／会田　進／岩崎孝治／平出一治／高見俊樹／五味一郎／赤羽義洋／
小池　孝／小平和夫／福沢幸一／宮城孝之／末木　健／前田清彦／石川日出志／寺崎裕助／北村　亮／
泉　拓良／増子康真／三好博喜／秋山道生／橋本裕行／飯塚　誠／後藤信祐／小杉　康／市沢英利／
家根祥多／高橋龍三郎／中沢道彦／木村隆一／田口　勇／斉藤　努／甲元眞之／田多井用章／岡田正彦／
羽場睦美／篠崎益雄／新津　健／関　清

(2)　地権者

ア．長畑遺跡

菅沢郁雄・菅沢　覚・菅沢鎮人・菅沢次郎・菅沢徹夫・菅沢栄夫・菅沢広人・富樫興門・柳沢　明

イ．清水氏居館跡

五十川正彦・勝野　敬・勝野辰三郎・勝野　一・勝野善文・川上　勇・川上一則・川上治里・
川上徳男・降旗　茂

第3節　調査日誌（発掘作業のみ）

長畑遺跡

6月6日(木)　曇時々晴　重機搬入。
6月7日(金)　曇　委託の都合により休み。
6月8日(木)　晴時々曇　重機によるトレンチ掘削、表土除去。
6月9日(金)　晴時々曇　重機による表土除去。
6月10日(土)　雨一時曇　重機による表土除去。
6月11日(日)　曇　休み。
6月12日(月)　晴時々曇　重機による表土除去。プレハブ・トレイ設置。一部遺構検出。
6月13日(火)　晴時々曇　重機による表土除去。本日から作業員入る。開始式。機材搬入。人手による表土精査開始。遺構検出。
6月14日(水)　晴時々曇　重機による表土除去。残土除去。遺構検出。
6月15日(木)　雨のち曇　中止。
6月16日(金)　雨　中止。
6月17日(土)　曇時々晴　休み。
6月18日(日)　曇　休み。
6月19日(月)　雨のち曇　中止。
6月20日(火)　曇　遺構検出。
6月21日(水)　遺構検出。測量基準トラバース設置。
6月22日(木)　曇　遺構検出。
6月23日(金)　曇のち雨　遺構検出。午後雨により中止。
6月24日(土)　雨のち曇　中止。
6月25日(日)　休み。
6月26日(月)　曇時々晴　遺構検出。
6月27日(火)　曇一時雨　遺構検出。
6月28日(水)　雨　中止。
6月29日(木)　曇時々晴　遺構検出。
6月30日(金)　曇時々晴　遺構検出。
7月1日(土)　晴のち曇　遺構検出。
7月2日(日)　曇　休み。
7月3日(月)　雨のち曇　中止。
7月4日(火)　曇　遺構検出。
7月5日(水)　晴　遺構検出。
7月6日(木)　晴　遺構検出。
7月7日(金)　晴　遺構検出。
7月8日(土)　晴　休み。
7月9日(日)　雨　休み。
7月10日(月)　曇のち晴　1住（周辺縄文晩期掘含む）断面図作成。仮称Ⅱ区土層実測。
7月11日(火)　曇のち晴　1住（縄文晩期掘含む）掘り下げ。5・6・9住掘り下げ。遺構検出。
7月12日(水)　雨　中止。
7月13日(木)　雨　中止。
7月14日(金)　晴　1住精査。2・4～6・9～11住掘り下げ。遺構検出。
7月15日(土)　晴　1住精査。2・4～6・9～11住掘り下げ。遺構検出。
7月16日(日)　雨　休み。
7月17日(月)　曇時々晴　2・4～6・9～11住掘り下げ。13住検出。掘り下げ。遺構検出。
7月18日(火)　晴　9～11・13住掘り下げ。柱穴掘り下げ。遺構検出。5住精査。

7月19日(木)　晴　5・9～11住精査。13住掘り下げ。一部精査。柱穴掘り下げ。
7月20日(木)　晴　5・13住掘り下げ。柱穴掘り下げ。縄文期（柱穴下層）検出。
7月21日(金)　晴　5・9・13住精査。製鉄跡2精査。縄文期（柱穴下層）検出。柱穴掘り下げ。
7月22日(土)　晴　来週から仮称Ⅱ区の南側へ重機が入るので、埋もれてしまう部分について補足的実測。
7月23日(日)　晴　休み。
7月24日(月)　晴　2・4・5・9住精査。中世と思われる柱穴下層（縄文部分）の掘り下げ。仮称Ⅱ区南側重機による表土除去開始。
7月25日(火)　晴一時雨　土壙1平面実測、遺物取り上げ、掘り下げ、2住検出、精査。14住検出。縄文集石土壙検出終了。仮称Ⅱ区重機による表土除去。残土除去、遺構検出。
7月26日(水)　晴のち曇　集石土壙15検出。縄文中期遺構検出。2住セクション作成、写真撮影、平面実測。縄文柱穴群平面実測、エレベーション作成、写真撮影。仮称Ⅱ区重機による表土除去。残土除去。遺構検出。
7月27日(木)　晴のち曇　2住平面実測、炭化物取り上げ、柱穴検出。縄文晩期柱穴群平面実測、エレベーション作成。縄文中期遺構検出。5住の柱穴・土壙精査。9住カマド断面図作成。仮称Ⅱ区重機による表土除去。残土除去、遺構検出
7月28日(金)　晴　2住柱穴実測、写真撮影。3住カマド実測、半裁、断面図作成、写真撮影。4・8住精査。5住南半分の検出。縄文晩期柱穴群平面実測、エレベーション作成。仮称Ⅱ区重機による表土除去。残土除去、遺構検出。
7月29日(土)　晴　休み。
7月30日(日)　晴　休み。
7月31日(月)　晴　仮称Ⅱ区重機による表土除去。残土除去。遺構検出。
8月1日(火)　雨　仮称Ⅱ区重機による表土除去。重機本日で終了。
8月2日(水)　晴　残土除去。遺構検出。
8月3日(木)　晴　残土除去。遺構検出。
8月4日(金)　晴　13住の一部検出。掘り下げ。他の遺構検出。
8月5日(土)　晴　休み。
8月6日(日)　曇のち雨　休み。
8月7日(月)　晴　15～18住　掘り下げ、他の遺構検出。
8月8日(火)　晴　土坑群等検出。17～18住掘り下げ。19～23住検出、掘り下げ。
8月9日(木)　晴　15～23住　掘り下げ・精査。土坑ピット等検出。
8月10日(木)　晴　製鉄跡3等検出。15～23住掘り下げ・精査。
8月11日(金)　晴　製鉄跡3等検出。15～23住掘り下げ・精査、一部実測。24、25住一部掘り下げ。26～29住検出、一部掘り下げ。
8月12日(土)　晴　盆休み。
8月13日(日)　晴　盆休み。
8月14日(月)　晴　盆休み。
8月15日(火)　曇一時雨　盆休み。
8月16日(木)　曇一時雨　盆休み。
8月17日(木)　晴　4・8住柱穴及びカマド半裁、断面実測、、写真撮影、エレベーション作成。製鉄跡1断面実測、写真撮影。縄文晩期包含層精検出。
8月18日(金)　晴　製鉄跡1掘り下げ、平面実測。14住平面実測、エレベーション作成、カマド半裁、断面実測、写真撮影。縄文晩期包含層検出。
8月19日(土)　晴　埋甕1平面実測。1住精査、セクション作成、断面写真撮影。縄文晩期包含層検出。山椿友の会見学。
8月20日(日)　晴　休み。
8月21日(月)　晴　埋甕1平面実測。1住精査、写真撮影。縄文晩期包含層検出。
8月22日(火)　晴　埋甕1セクション作成、断面写真撮影。縄文晩期包含層検出、遺物取り上げ。1住平面実測。
8月23日(木)　曇一時晴　1住柱穴検出、平面実測、エレベーション作成、カマド半裁、断面写真撮影、断面図作成。
8月24日(木)　晴　16住平面実測、エレベーション作成、柱穴検出、カマド半裁、断面図作成。22住平面実測。
8月25日(金)　雨のち晴　雨のため作業員は休み。19住平面実測、カマド詳細平面実測。
8月26日(土)　晴　7・28住実測。19・22住カマド半裁。
8月27日(日)　雨　要地飯明会の予定であったが、雨のため中止とする。
8月28日(月)　曇　28住カマド実測。32住実測。30住周辺柱穴検出、掘り下げ。製鉄跡2精査。北端集石群精査。
8月29日(火)　晴のち曇　32住カマド実測。31・38住実測。
8月30日(木)　曇時々雨　32・33住精査。38住実測。北端集石精査。午後雨により中止。
8月31日(木)　晴時々曇　38住実測・遺物跡2実測。北端集石・製鉄跡2精査。製鉄跡3掘り下げ。
9月1日(金)　曇時々晴　遺物跡2・36住精査。北端集石精査。製鉄跡2・3精査。
9月2日(土)　曇りのち雨　雨模様のため作業員は休みとする。36住実測。午後現地説明会（約60名参加）。
9月3日(日)　曇　休み。
9月4日(月)　曇　36住・遺物跡1実測。北端集石精査。
9月5日(火)　曇のち雨　遺物跡1実測。19住カマド補足実測。
9月6日(木)　曇時々雨　雨模様のため作業員は休みとする。土坑15実測。
9月7日(木)　曇　土坑15実即、写真撮影。縄文土器群精査、一部掘り下げ。北端集石群精査。
9月8日(金)　晴　土坑15・33実測。北端集石群精査。
9月9日(土)　曇　北端集石群精査。縄文土器群精査。製鉄跡2・3精査。
9月10日(日)　曇　休み。
9月11日(月)　曇時々晴　北端集石群精査。13住カマド精査。製鉄跡2・3精査。
9月12日(火)　曇時々晴　北端集石群精査。製鉄跡2・3精査。
9月13日(木)　曇　北端集石群精査。連休過ぎに予定している空測に備えての準備（各遺構精査、清掃）
9月14日(木)　曇時々雨　中止。
9月15日(金)　曇　休み。
9月16日(土)　曇　休み。
9月17日(日)　曇一時晴　製鉄跡2実測。
9月18日(月)　曇一時晴　写真測量。風が強いため全ての作業が終了できなかった（バルーン使用）。測量作業にあわせ、各遺構の精査、清掃。
9月19日(火)　曇のち雨　写真測量の準備をしたが、風が強くなり中止とする。写測準備も午前で中止。
9月20日(木)　曇時々晴　写真測量を実施したが、風が強く、全ての作業が終了できなかった。測量作業にあわせ、各遺構の精査、清掃。
9月21日(木)　曇時々晴　北端集石群は空測が済んだため、石を取り外し、下部の土層検出。
9月22日(金)　雨　小雨が降るが無風。空測の残りの作業決行。作業員は休みとする。

9月23日(土)　晴　休み。
9月24日(日)　晴　休み。
9月25日(月)　曇一時晴　北端築石群の石取り外し、断面図作成。縄文土坑の一部断面図作成。製鉄跡2・3精査、写真撮影。各住居の遺物取り上げ。
9月26日(火)　曇　製鉄跡3下層に炭焼き窯検出。各築石土坑の断面図作成。機材のほとんどを荷水氏居館跡へ運搬。
9月27日(水)　曇一時晴　清水氏居館跡の発掘作業を開始するため、本日は休みとする。
9月28日(木)　曇　炭焼き窯掘り下げ、炭化材精査、実測、写真撮影。
9月29日(金)　曇　炭焼き窯精査、写真撮影。実測。
9月30日(土)　曇時々晴　炭焼き窯実測。本日で発掘作業終了。

清水氏居館跡

9月18日(月)　晴のち曇　重機による表土除去開始。
9月19日(火)　曇のち雨　重機による表土除去。
9月20日(水)　曇時々晴　昨日の雨によりぬかるため表土剥ぎ中止。
9月21日(木)　晴時々曇　重機による表土除去。
9月22日(金)　雨　中止。
9月23日(土)　晴　重機による表土除去。
9月24日(日)　晴　重機による表土除去。
9月25日(月)　曇一時晴　重機による表土除去。
9月26日(火)　迷　業者の都合により休み。
9月27日(水)　曇一時晴　重機による表土除去。本日より人手による残土整理及び遺構検出開始。
9月28日(木)　曇　重機による表土除去。前方雨が降っていたため、作業員は休みとした。一部残土整理、遺構検出。
9月29日(金)　曇　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。
9月30日(土)　曇時々晴　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。外掘・内掘の一部が判る。米遥より、重機による表土除去は、できる限り掘の配置に合わせて行なうこととする。
10月1日(日)　晴　休み。
10月2日(月)　曇　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。
10月3日(火)　曇のち雨　残土整理、遺構検出。
10月4日(水)　曇一時晴　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。
10月5日(木)　曇　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。外掘・内掘のラインが大分見えてくる。
10月6日(金)　曇一時晴　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。
10月7日(土)　曇　重機による表土除去。残土整理、遺構検出。柱穴・竪穴が大分見えてくる。焼土が点々と数ケ所に見える。
10月8日(日)　休み。
10月9日(月)　曇　重機による表土除去。作業員は休み。
10月10日(火)　曇　休み。
10月11日(水)　曇のち雨　重機による表土除去。作業員は休み。
10月12日(木)　晴　重機による表土除去。ほぼ掘の全容が見えた。北側調査区トレンチ掘削。トレンチからは焼土が1ケ所見つかり、その部分を拡張することとする。
10月13日(金)　晴　重機によりトレンチ拡張、表土除去。北側調査区をⅡ区とする。遺構検出。本日で重機稼動終了。
10月14日(土)　晴　遺構検出。柱穴・竪穴の配置が大分見えてくる。
10月15日(日)　晴　休み。
10月16日(月)　曇一時晴　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。
10月17日(火)　曇　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。
10月18日(水)　曇　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。
10月19日(木)　曇のち雨　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。午後雨により中止。
10月20日(金)　曇　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。
10月21日(土)　曇　遺構検出。柱穴・竪穴・掘掘り下げ。
10月22日(日)　曇　休み。
10月23日(月)　曇　遺構検出。柱穴・竪穴・掘・住居跡掘り下げ。
10月24日(火)　晴　遺構検出。柱穴・竪穴・掘・住居跡掘り下げ。
10月25日(水)　晴　遺構検出。柱穴・竪穴・掘・住居跡掘り下げ、一部精査。
10月26日(木)　晴　柱穴・竪穴・掘・住居跡掘り下げ、精査。
10月27日(金)　晴のち雨　柱穴・竪穴・住居跡掘り下げ、精査。
10月28日(土)　晴　柱穴・竪穴掘り下げ。竪穴・住居跡精査。午後現地説明会。
10月29日(日)　晴　休み。
10月30日(月)　晴　柱穴掘り下げ。竪穴・7住・8住ほか掘り下げ、精査。明日から作業員は古町遺跡の発掘調査と分かれることとする。
10月31日(火)　曇　竪穴・柱穴掘り下げ、精査。7住ほか精査。
11月1日(水)　曇　柱穴掘り下げ、精査。竪穴・8住ほか精査。
11月2日(木)　曇　柱穴掘り下げ、精査。竪穴精査。
11月3日(金)　晴　休み。
11月4日(土)　晴　休み。
11月5日(日)　晴時々曇　休み。
11月6日(月)　晴のち曇　空測準備（各遺構の精査、荷揚、ライン引き）。
11月7日(火)　曇　空測の予定日であったが、天候悪化のため中止。空測準備（各遺構の精査、荷揚、ライン引き）。内掘の掘り残し部分を掘る。
11月8日(水)　曇一時晴　午前空測準備（各遺構の精査、清掃）。午後空測。空測後竪穴・2住・6住ほか精査。
11月9日(木)　曇のち雨　2・6住の礫除去、精査。一部精査。竪穴礫除去。午後雨により中止。
11月10日(金)　曇　2・6住の礫除去、一部精査、写真撮影、断面図作成。竪穴礫除去、精査。実測遺礫除去。
11月11日(土)　曇　2・6住精査、断面図作成。2住の炭化材検出、写真撮影。この他各遺構の補足的測量、精査。
11月12日(日)　曇一時晴　休み。
11月13日(月)　曇一時雨　2・6住精査、実測、一部炭化材取り上げ。各遺構の補足的測量。機材の一部を片付け、古町遺跡及び古城遺跡に運ぶ。
11月14日(火)　曇　2・6住精査、実測。6住は深く危険であるため埋めもどす。1・8住貼り床調査。機材の一部片付け。
11月15日(水)　曇　2住精査、列石検出。1・6住貼り床下調査。機材の一部を片付け、古町遺跡及び古城遺跡に運ぶ。
11月16日(木)　曇　2住列石精査、実測。残りの機材を古町遺跡及び古城遺跡に運搬。本日で発掘作業終了。

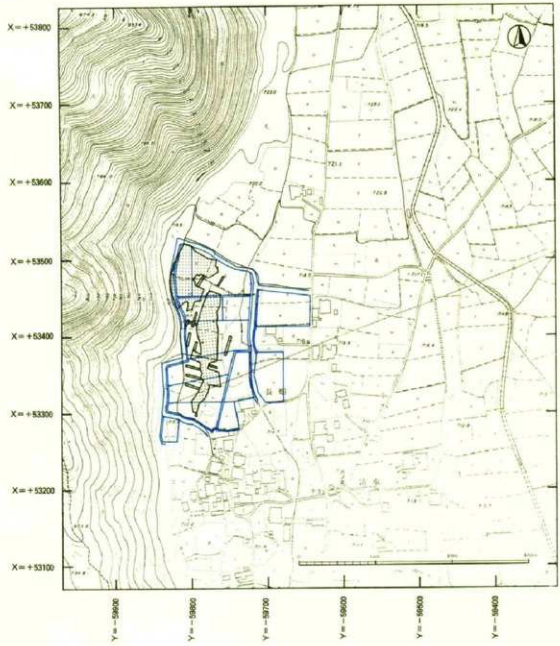


図1　長畑遺跡付近ほ場整備事業施行計画図（1:5000）

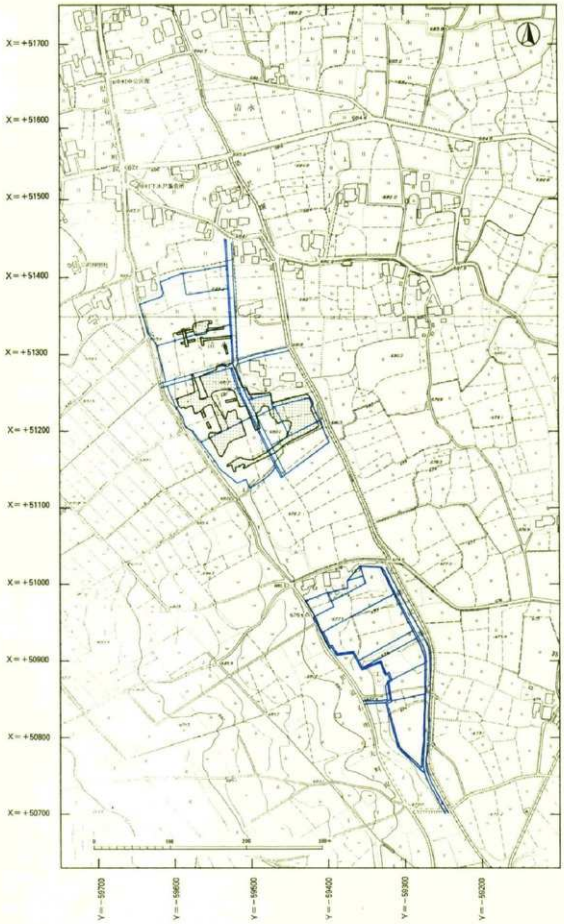


図2　清水氏居館跡付近ほ場整備事業施行計画図（1:5000）

第４節　調査方法

長畑遺跡では1988年に、清水居館跡では1987年の試掘調査結果をもとに調査区を決定した。

長畑遺跡の調査区は北側調査区をⅠ区、南側調査区をⅡ区とし、清水氏居館跡では、居館本体の調査区をⅠ区、北側の調査区をⅡ区とし、内堀に囲まれた主郭部分をA郭調区、その南東側調査区をB郭調査区、主郭西側調査区をC郭調査区、主郭南西側調査区をD郭調査区、西側外堀外西側の建物跡群調査区をE郭調査区、主郭北西側外堀外北側調査区をF郭調査区とした。

清水氏居館跡においては、当初内堀と小字名がついている部分（F郭調査区）が中心となっていると考えたのであるが、予想を上回る規模の居館であり、現在三島と小字が付いている主郭調査区部分が旧来は内堀という地名で、地名が変更になっていることがわかり、当初の調査範囲より拡大し、排土置場の都合上、堀に沿ってトレンチを掘りそれを広げられるだけ拡大するといった調査方法となってしまった。約$\frac{2}{5}$の範囲は調査できなかったが、ほ場整備工事においては、遺構面をあまり削らないような配慮がなされ、遺構面はほとんど保存された。また、下層にある黒褐色土層中より、縄文時代中～後期の土器が出土したがその面は確認するだけにとどまっており、工事掘削深度が及ばないため保存されている。

両遺跡とも表土除去作業は重機を用いて除去し、その後の検出作業以降は人力でおこなった。また、両遺跡とも不明な部分においては、トレンチを入れ、遺構確認し、遺構・遺物がある場合はそれを拡げる方法をとった。

両遺跡とも、検出時の遺物は、任意に検出順番で番号を付けて取り上げ、後にグリットに直して、降り分けた。

遺跡記号は、常盤地区清水長畑遺跡を略号化し「SNB」、清水清水氏居館を略号化し「SSK」とした。

測量は、座標方眼を設定し使用した。座標・標高は、（有）山光測舎に委託し、大町市常盤にある四等三角点より移設し、長畑遺跡では基準点T－１（X＝＋53478、107、Y＝－59729、902、標高719、445ｍ）清水氏居館跡では基準点T－１（X＝＋51292、246、Y＝－59529、787、標高681、729ｍ）を決定し、各点に移設し使用した。

測量作業は、基準点の杭に基づいた簡易遣り方測量と、写真測図を併用した。写真測図は、長畑遺跡では、㈱新日本航業に委託し気球を使用し、清水氏居館跡では㈱中央航業に委託しヘリコプターを使用する方法で実施した。

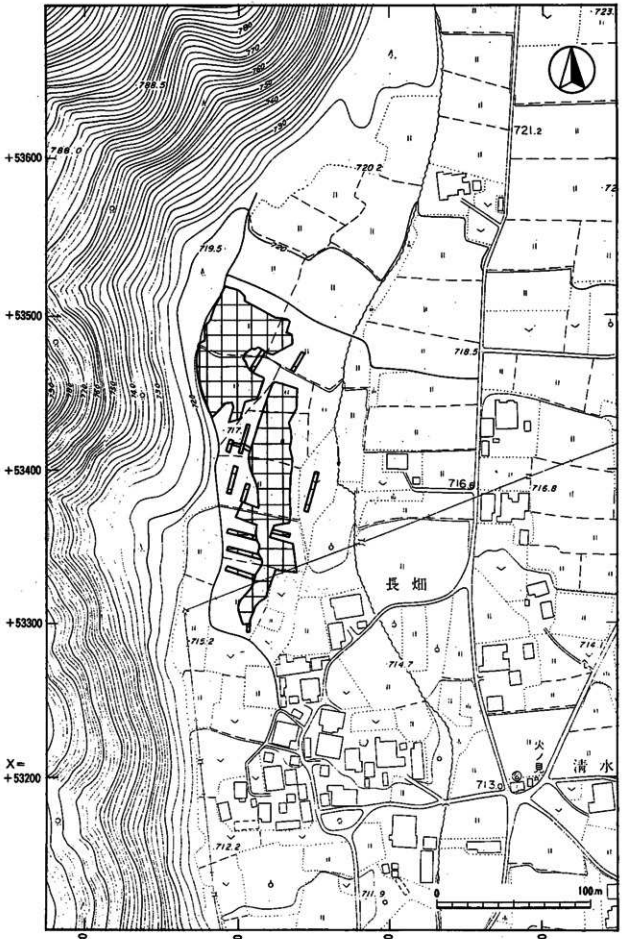


図3　長畑遺跡発掘区（1:2500）

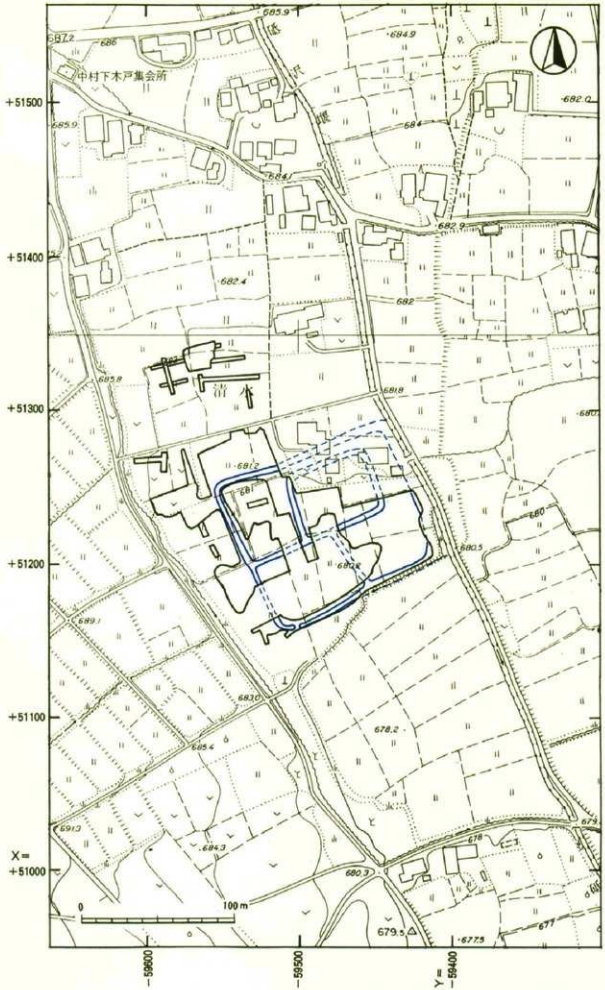


図4　清水氏居館発掘区（1:2500）＜青線は堀跡を示す。堀は、現水田の区画にかなり近似している。＞

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1．長畑～清水氏居館跡周辺の地形・地質の概観

本遺跡付近はフォッサマグナの西縁部で、松本盆地の北西大町市常盤地区にあり、西は飛騨山脈の西部山地と接し、盆地と西部山地との境界、即ち糸魚川～静岡線の大断層帯のすぐ東側に位置している。したがって西部山地は急斜面をなして盆地と接しておおり、大断層崖の地形をよく残している。

この松本盆地北部は、第四紀の島弧変動による造盆地運動で陥没し、西部山地から高瀬川水系により運ばれた多量の砂礫が、200m～300mの厚さに堆積して盆地堆積物の主体となり、この上に西部山地から東流する乳川を始め沢や河川による堆積物が乗り、更に山麓側一帯は崖錐がかぶって盆地西北部の現地形を形成している。

地質は西部山地が主として花こう岩と酸性火成岩よりなり、それに中古生層の硬砂岩、粘板岩、チャートなどが分布しているため、侵食の主河川である高瀬川により侵食運搬された堆積物も、西部山地の地質を反映したものとなっており花こう岩の砂礫とその風化物が主体となっている。これを覆う乳川の神明原扇状地は、乳川の上流が花こう岩地帯であるために花こう岩の砂礫よりなり、特にその風化物はこの地方で小海戸ホウロクと呼ばれ、花こう岩中の石英が大きな結晶であるため、その風化によって生じた砂も粗粒であり花こう岩中の角せん石や黒雲母の風化物中のFeやMgの酸化物、それに長石の風化したカオリンなどが石英粒に付着し、極めて崩壊し易い黄～黄褐色の粗砂層となって神明原扇状地上部を形成している。なおこの扇状地の中腹から扇頂にかけてはローム層に覆われている。

神明原扇状地より北の大崎や長畑一帯の西部山地には、中古生層が分布しているため、山麓の崖錐は硬砂岩や粘板岩の角礫とその風化物が盆地堆積物を山麓線に沿って狭く覆っている。

2．長畑発掘地点付近の地形・地質

長畑遺跡は大町市南西部長畑地積の海抜717m付近にあり、前記糸魚川～静岡線の大断崖と直接接している。したがって西部山地の断層崖が屏風の如く西側に立ちはだかり、断層崖の崖錐が遺跡の西部に押し出している。この崖錐には何ヶ所も湧水が見られ、後世まで生活用水に使用されていた。

遺跡の基底の主体をなす堆積物は、盆地の主堆積物である高瀬川水系の花こう岩を主とする火成岩の砂礫であるが、遺跡と接する西部山地は中古生層の硬砂岩と粘板岩で、この崖錐が遺跡の西部に押し出しこれ等の岩石の大小の角礫や風化土が高瀬川水系の堆積物を西側で一帯状に覆っている。

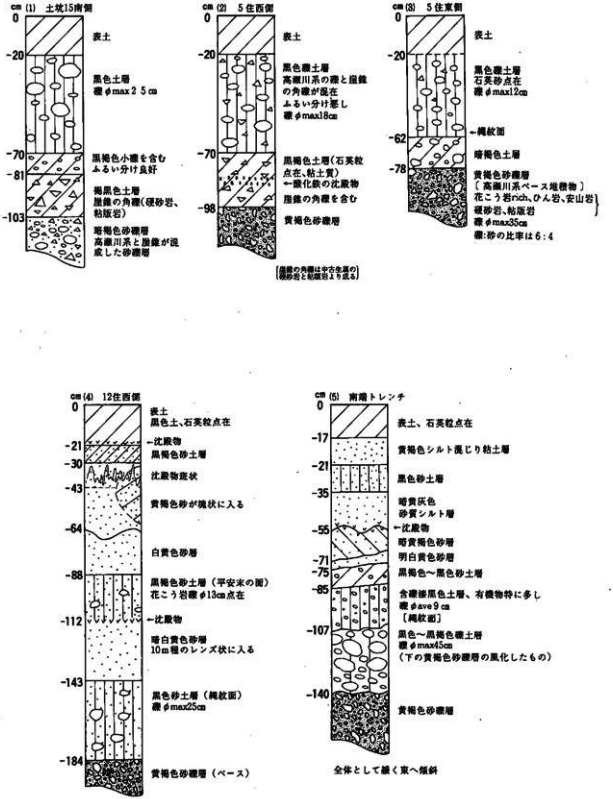
更に、これ等の面は高瀬川の支流で南流した古和田川の流路の首振りにより洗われ、緩い起伏の巨礫地帯を削り凹部を黄褐色の砂土層が埋め遺跡のベースとなっている。その後、古和田川は流路を次第に東へかえ遺跡の東約400mの所を現和田川として南流している。

ベース面上の堆積物について

黄褐色砂礫層の上を縄文以後の堆積物が原地形の起伏により厚薄の変化はあるが、平均して約120cmの厚さで堆積している。これ等の土層は柱状図に見る如く、腐植の特に厚い層や砂質、粘土質等植生の変化や洪水等西山の崖錐の風化物と、北からの風化物が洪水や小河川により運ばれたものであり遺跡面全体としては、緩く東南方向へ傾斜している。

土層の色は主として腐植酸の多少により決まるものであり、各時代に於ける植生及び地表面の安定期間の長短、それに運ばれた供給物中の二次的三次的に含有する有機物や風化物の三者の組合せにより決まってくものである。

長畑遺跡


cm (1)　土坑15南側
0
-20
-70
-81
-103
表土
黒色土層
礫 φmax2 5 cm
黒褐色小礫を含む
ふるい分け良好
褐黒色土層
腐植の角礫(硬砂岩、
粘板岩)
暗褐色砂礫層
高瀬川系と腐植が混
成した砂礫層
cm (2)　5住西側
0
-20
-70
-98
表土
黒色礫土層
高瀬川系の礫と腐植
の角礫が混在
ふるい分け悪し
礫 φmax18cm
黒褐色土層(石英粒
点在、粘土質)
←還元鉄の沈殿物
腐植の角礫を含む
黄褐色砂礫層
(腐植の角礫は中古を混む)
(硬砂岩と粘板岩2:1混る)
cm (3)　5住東側
0
-20
-62
-78
表土
黒色礫土層
石英粒点在
礫 φmax12cm
←縄紋面
暗褐色土層
黄褐色砂礫層
〔高瀬川系ベース堆積物〕
花こう岩rich、ひん岩、安山岩
硬砂岩、粘版岩
礫 φmax35cm
礫:砂の比率は6:4
cm (4)　12住西側
0
-21
-30
-43
-64
-88
-112
-143
-184
表土
黒色土、石英粒点在
←沈殿物
黒褐色砂土層
沈殿物斑状
黄褐色砂が流状に入る
白黄色砂層
黒褐色砂土層（平安末の面）
花こう岩礫 φ13cm点在
←沈殿物
暗白黄色砂層
10m幅のレンズ状に入る
黒色砂土層（縄紋面）
礫 φmax25cm
黄褐色砂礫層（ベース）
cm (5)　南端トレンチ
0
-17
-21
-35
-55
-71
-75
-85
-107
-140
表土、石英粒点在
黄褐色シルト混じり粘土層
黒色砂土層
暗黄灰色
砂質シルト層
←沈殿物
暗黄褐色砂層
明白黄色砂層
黒褐色～黒色砂土層
含礫腐黒色土層、有機物特に多し
礫 φave 9 cm
【縄紋面】
黒色～黒褐色礫土層
礫 φmax45cm
(下の黄褐色砂礫層の風化したもの)
黄褐色砂礫層
全体として緩く東へ傾斜

清水氏居館跡

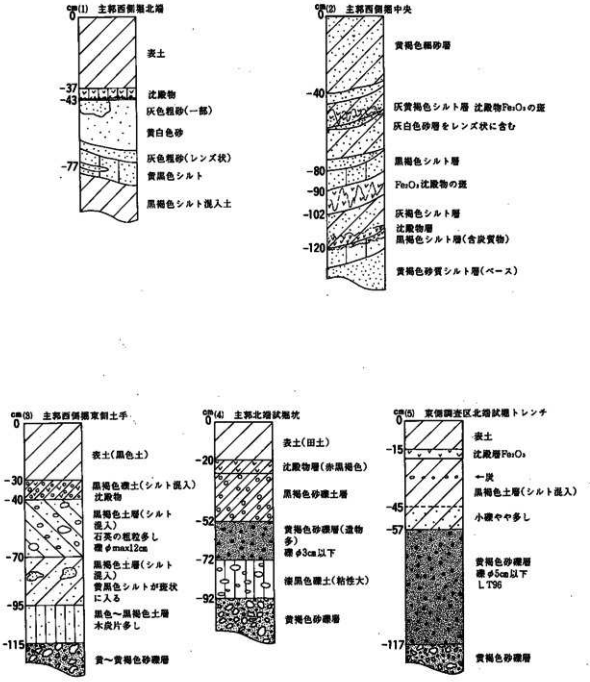


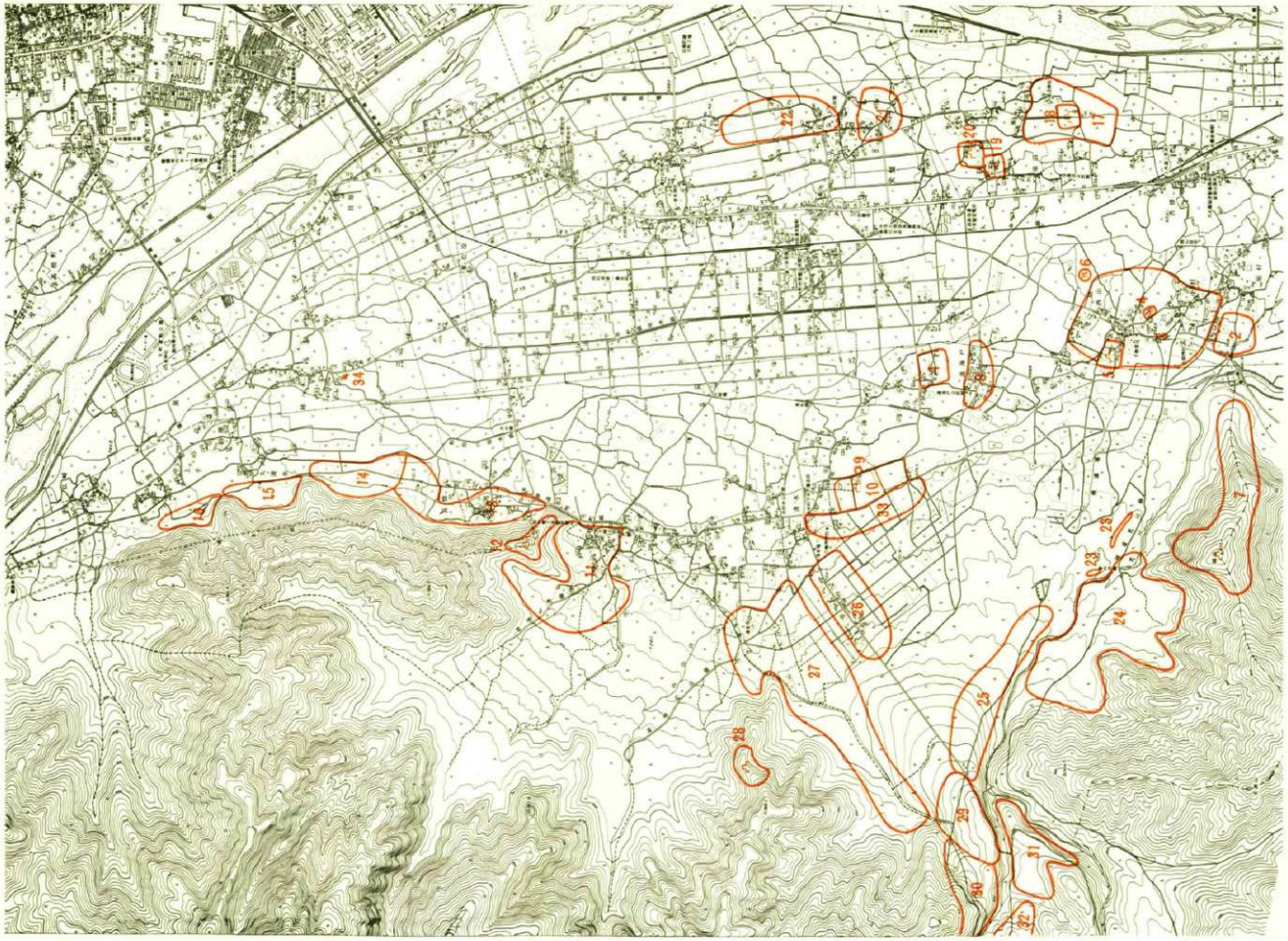
図5　長畑遺跡・清水氏居館跡土層柱状図

3．清水居館跡付近の地形・地質

清水居館跡は大町市の南西端に近い海抜680m～681mにあり、高瀬川による盆地堆積物を西部山地から東流する乳川によって形成された神明原扇状地が覆い、その扇端部に位置し東に向かって緩く傾斜している。更に遺跡付近は、この扇端に沿って南流した高瀬川の支流である古和田川によって一時洗われており、発掘地点の西端には古和田川の流路の一部と推定される凹地が残っている。この古和田川はその後流路を東に数百米振り現在の和田川となっている。

発掘地点のベースをなす黄褐色砂礫層は、高瀬川水系の盆地堆積物と乳川の神明原扇状地堆積物の扇端部の堆積物が、古和田川により混成し篩い分けられて形成されたシルト質を多く含む砂層又は土層となっている。古和田川が流路を東に振って後も、この崩壊し易い土層は小河川や沢、それに豪雨による地表水などにより運ばれ、二次的三次的堆積物となって中世の遺構を厚く覆っている。土層柱状図に見る如く、近距離であっても激しく変化しているのは、土層がレンズ状にあるいは塊状に変化しながら堆積したためである。したがって堀の埋没も居館廃絶後あまり年月を要しなかったものと推定される。なお溶脱物沈澱層が三層あることから、この地点での地表の安定期は少なくとも3回はあったと推定される。

礫質は概観を土色については長畑の項を参照されたい。



1　小海戸遺跡
2　硯岩遺跡
3　西山遺跡
4　松庵寺跡
5　西山居館跡
6　五社神社跡
7　西山城跡
8　道海戸遺跡
9　清水郷倉跡
10　清水氏居館跡
11　大崎遺跡
12　長畑城跡
13　長畑遺跡
14　がにあらし遺跡
15　西の原遺跡
16　奥清水遺跡
17　中屋遺跡
18　須沼氏居館跡(Ⅰ)
19　常光寺跡
20　須沼氏居館跡(Ⅱ)
21　下一本木遺跡
22　北村遺跡
23　乳川石堤
24　菅ノ沢遺跡
25　山の神遺跡
26　神明原遺跡
27　寺海戸遺跡
28　清水城跡
29　肩平遺跡
30　まねき遺跡
31　桐山遺跡
32　窪平遺跡
33　イボ岩遺跡
34　伝・経塚

図6　常盤地区の遺跡（1:20000）

第Ⅲ章　長畑遺跡

1．遺構・遺物

長畑遺においては、縄文時代前期後半、前期末～中期初頭、中期後半、後期前半、晩期後半、晩期末、弥生時代後半、平安時代、中世（鎌倉～室町時代）、中世～近世の遺構・遺物が検出された。検出遺構は次のとおりである。

縄文時代前期後半―北調査区南側東端・南調査区の黒色・黒褐色土の河川跡

縄文時代前期末～中期初頭―柱穴群１基（柱穴群４）、土坑30基（土坑３・４・６～14。20～35。37・43・46）。

縄文時代中期後半（曽根Ⅲ式期）―住居跡３軒（６・７・37号住居跡）。

縄文時代後期前半（堀ノ内期）―土坑４基（土坑５・52・63・65）。

縄文時代晩期後半（佐野Ⅱ式期）―土坑１基（土坑15）。

縄文時代晩期末（水式期）―柱穴群３ケ所（柱穴群１～３。これら柱穴群は住居に関係していたものと考えられる）。集石群（土坑群）１ケ所、列石１基（列石２）、土坑35基（土坑１・２・17～18・38～42・44・45・47・48・66～85）＜集石群（土坑群）の周囲に柱穴群がある、集落形態と思われる。土坑１は多量の土器が出土し、この遺跡の晩期末の指表となると思われ、この一括土器の中に夜臼系と思われる壺が存在する。＞、南調査区、黒褐色・黒色の河川跡の一部と砂層の河川跡。

弥生時代後半（箱清水期）―住居跡１軒（２号住居跡（小形の住居跡である））

平安時代（９世紀後半～12世紀）―住居跡36軒＜９世紀後半（光ケ丘１号窯式期）６軒（８・９・16・28・29・35号住居跡）。10世紀前半（大原窯式期。一部光ケ丘、虎渓山窯式を含む）８軒（４・10・13・19・20・25・32・38号住居跡）。10世紀後半（虎渓山窯式期。一部大原、丸石２号窯式を含む）４軒（18・22・26・33号住居跡）。11世紀前半（丸石２号窯式期。一部虎渓山窯式を含む。）７軒（３・５・12・17・21・24・30号住居跡。）11世紀後半～12世紀初頭（丸石２号窯式・大原10号窯式・山茶坂・西坂１号窯式を含む）７軒（１・11・15・23・27・34・36号住居跡）。不明４軒（20・31・39・40号住居跡）、建物跡１棟（建物跡７、９世紀後半、ピット103から土器出土）、炭焼き窯１基（切り合い関係から平安時代末頃と思われる）、製鉄関連遺構（炉）２基（製錬炉と思われる）。＜住居跡のうち５・15・34号住居跡は、金床石、金肌、羽口等の出土があり、確実に鍛冶関係の住居であると推定される。＞　碗

中世（鎌倉～室町時代）―建物跡６棟（建物跡１～６）、柱穴群３ケ所（柱穴群５～７）、土坑14基（土坑19・49・50・53～62・64）、土坑（火葬墓）２基（土坑33・51）、製鉄関係遺構１基（製鉄関係遺構３）＜竪穴式住居状の掘り込みが一部に見られ、炉（製鉄炉と思われる）は２基あり、柱穴などの存在から簡単な上屋があった可能性がある。＞

特に注目されるのは、製鉄関係遺構と鍛冶関係住居の両者が存在することで、この存在から本遺跡の平安時代～中世における集落は、鉄加工集団であった可能性が高いと推定される。今回は、簡単な説明にとどめるが、今後本資料の研究を進め、別に機会を見て、詳細を後に発表したいと思う。

2．出土鉄滓について

多量に出土したスラグ、鉄滓について、篠崎益雄氏を通して、国立歴史民俗博物館の田口勇氏・斎藤努氏に分析していただいた結果、原料は砂鉄であるらしいことが伴明した。篠崎氏を通して、次のような分析結果のまとめが得られたので、一部抜粋する。（鉄滓分析を依頼してくださり、結果を知らせてくださった篠崎益雄氏、分析してくださった田口勇・斎藤努両氏には、記して感謝申し上げる。）

『当博物館においては鉄関係の歴史資料についての広範な研究を実施しており、かつ長野県については比較的資料が少なかったので、この提出資料中の鉄滓をまず研究的に分析することとした。分析は当博物館で鉄滓を分析している方法に従い、X線CTスキャナー（CTH881）およびX線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡による方法とした。X線CTスキャナーおよびX線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡による鉄滓の分析研究の詳細については、当博物館発行の広報誌「歴博」（42.1990年8月）を参照されたい。

1．製鉄関係遺構1出土鉄滓の分析結果について

円錐台状（底面径:50m）の試料である。X線CTの観察結果と同スペクトルによれば、多孔性で、中央に大きな空洞（ピークの切れがよいので、炉壁などの存在ではなく、また金属鉄も共存しない。）が存在している。また同スペクトルの上限値は1300であり、典型的な鍛冶滓であることを示している。

X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡による分析結果によれば、一面に細かい酸化鉄（FeO）の結晶が存在しており、急冷型の鍛冶滓の特徴を示す。チタン（Ti）の存在も確認され、製鉄原料は砂鉄と断定される。

以上のように試料は原料を砂鉄とする典型的な急冷型鍛冶滓である。

2．5号住居跡出土鉄滓の分析結果について

偏平塊状（底面長径:30㎜）の試料である。X線CTの観察結果と同じスペクトルによれば、多孔性であるが、均一である。二つのピークの切れがよいので、炉壁、金属鉄などの共存はない。また、同じスペクトルの上限値は1500であり、典型的な鍛冶滓であることを示している。

X線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡による分析結果によれば、一面に大きな酸化鉄（FeO）の結晶が存在しており、徐冷型の鍛冶滓の特徴を示す。チタン（Ti）の存在も確認され、製鉄原料は砂鉄と断定される。なお、酸化鉄形状はいわゆる椀形滓の形状でもあり、長野県などの遺跡からよく出土される。

以上のようにこの試料を砂鉄とする典型的な徐冷型鍛冶滓である。』

以上のような結果から、おそらく高瀬川の砂鉄を原料として利用し、長畑遺跡においては、製鉄がなされたと推定される。しかし、まだ多量の資料があるので今後研究を進め、別に機会を見て後に発表したいと思う。

長畑遺跡遺構平面図

縮尺 1/20

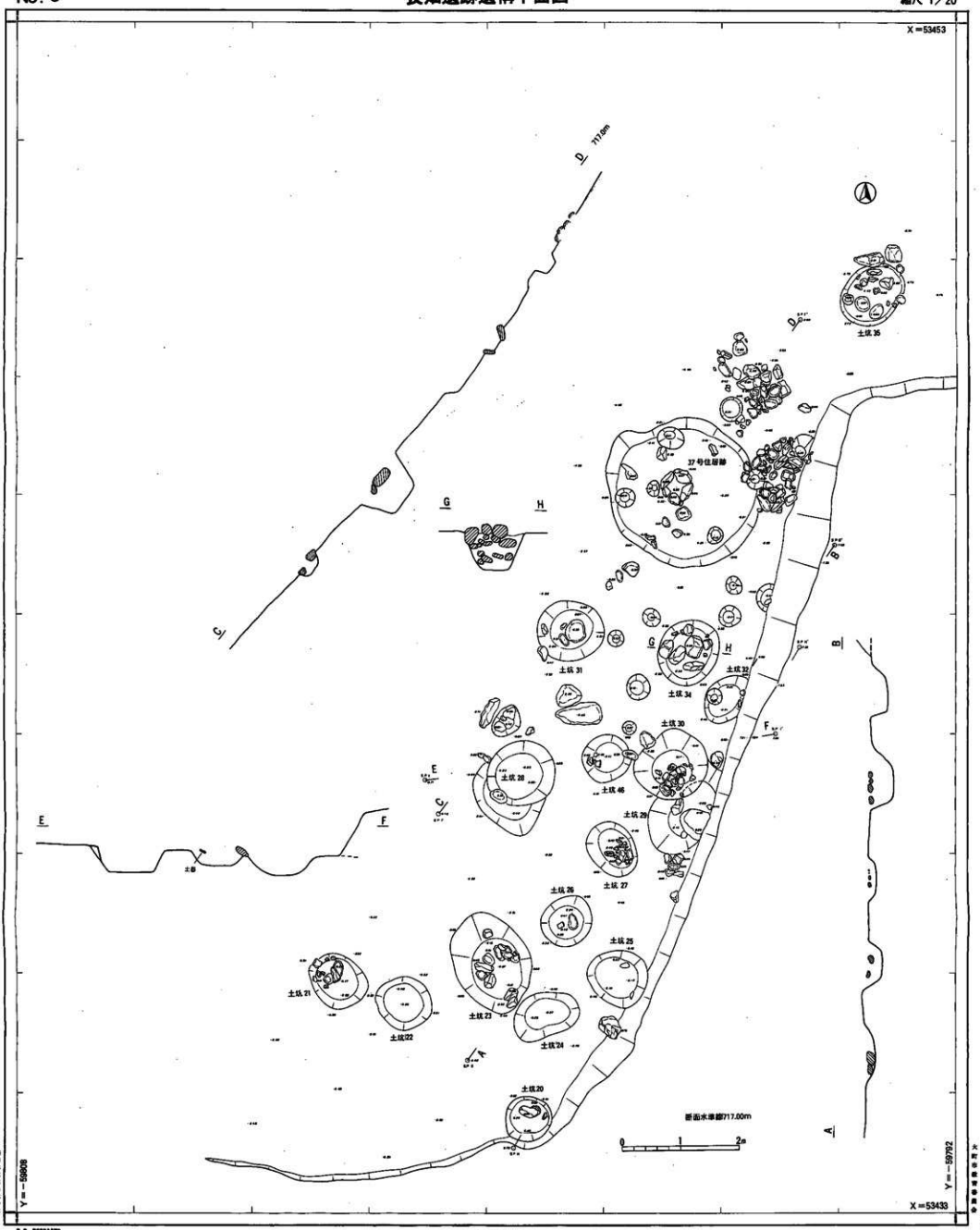


図7　縄文時代中期初頭土坑群（1:60）＜37住は中期後半（曽利Ⅲ式期）＞

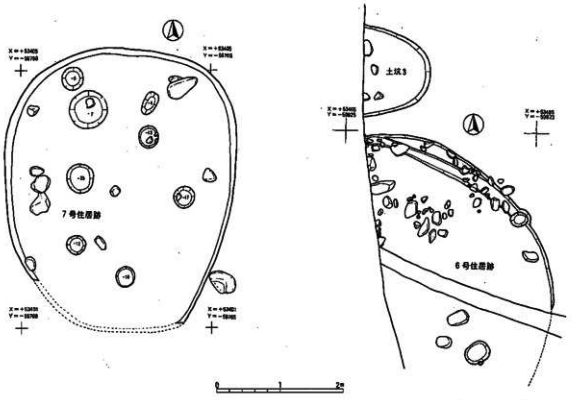


図8　6・7号住居跡（1:60）＜6・7住ともに縄文時代中期後半（曽利Ⅲ式期）＞

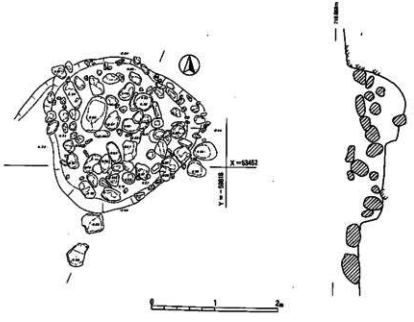


図9　土坑5（1:60）＜縄文時代後期前半（堀ノ内式期）＞

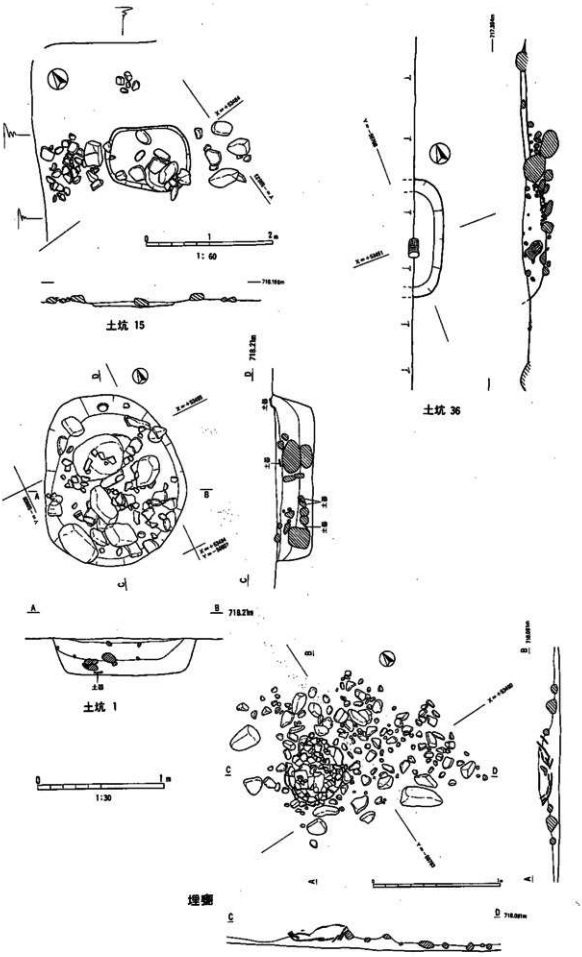


図11　土坑１・15・36・埋甕（土坑15のみ１:60、他は１:30）＜土坑15が縄文時代晩期後半（佐野Ⅱ式期）の他は、晩期末（水式期）＞

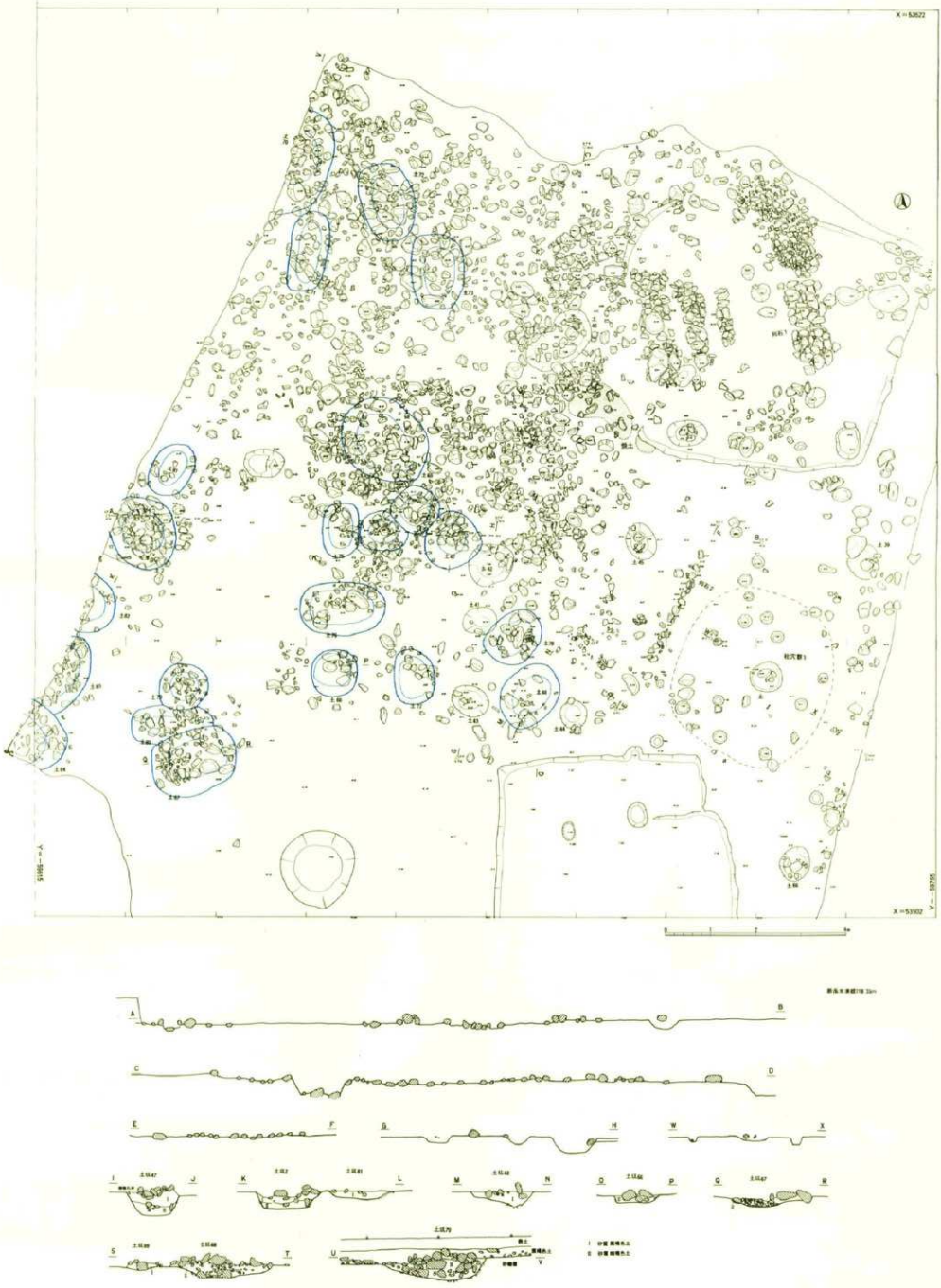


図10　集石郡（集石土坑群）、列石1:2　柱穴群3（1:80）＜縄文時代晩期末。土坑43は中期初頭。列石1は中世～近世＞

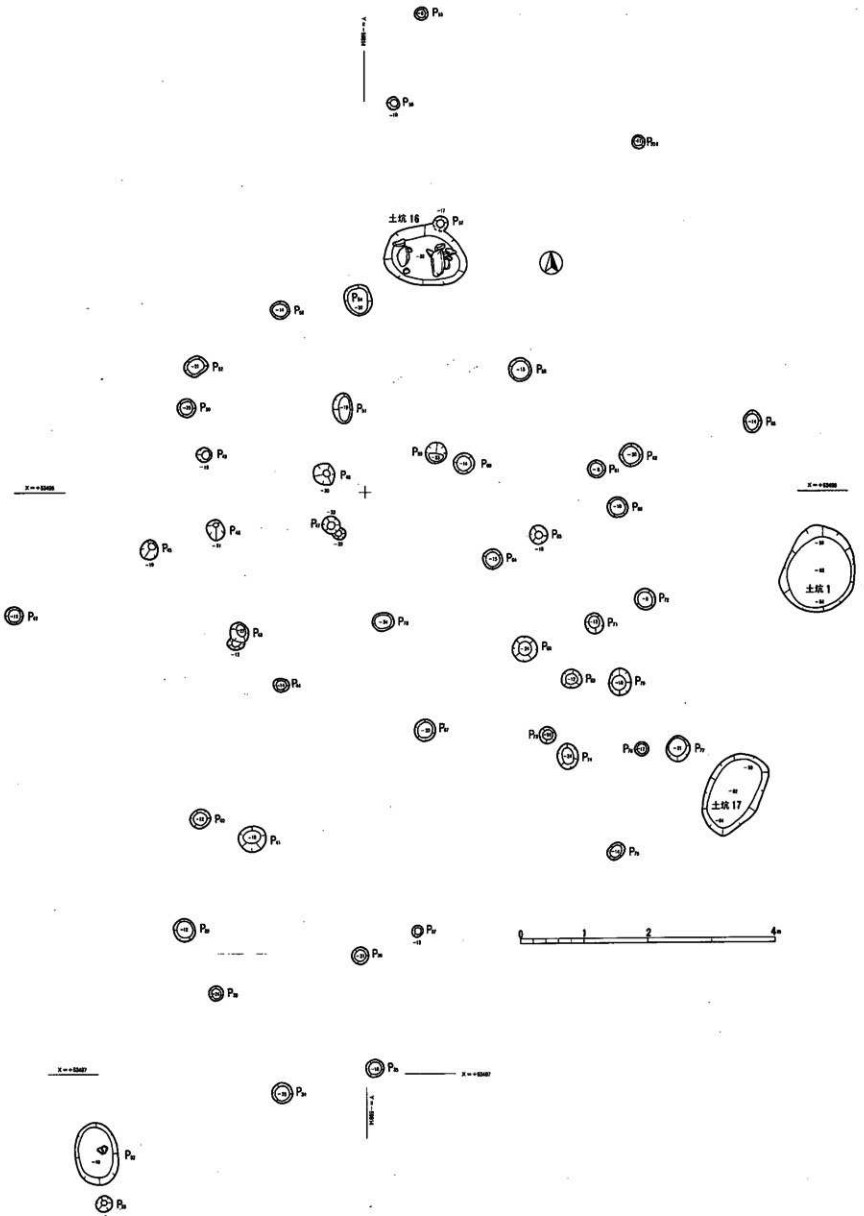


図12　柱穴群1、土坑1・16・17（1:60）＜土坑16が縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭のほかは、縄文時代晩期末（水式期）＞

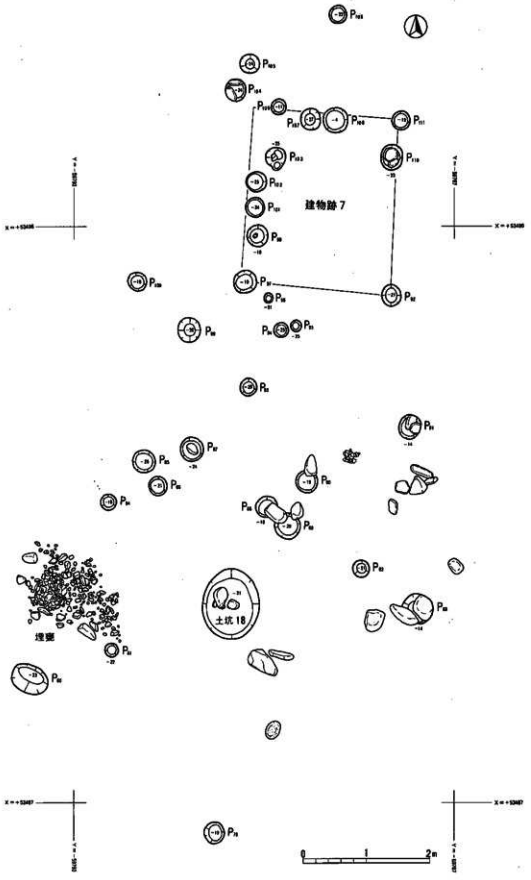


図13　柱穴群２、土坑18、埋甕、建物跡７（１:60）＜建物跡７及び周辺ピットが平安時代（９C後半）の他は、縄文時代晩期末（氷式期）＞

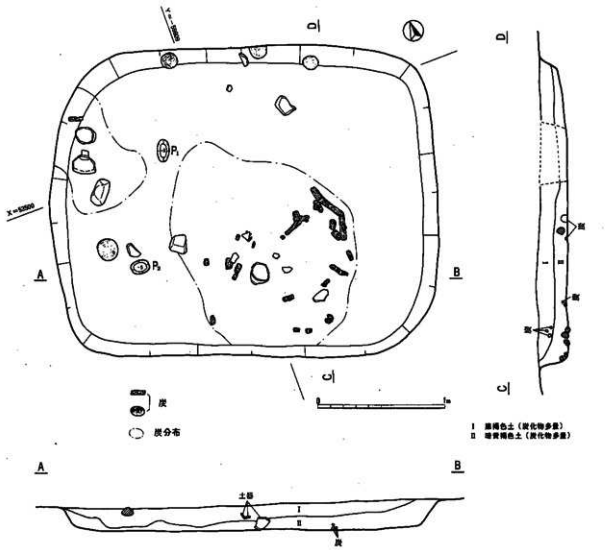
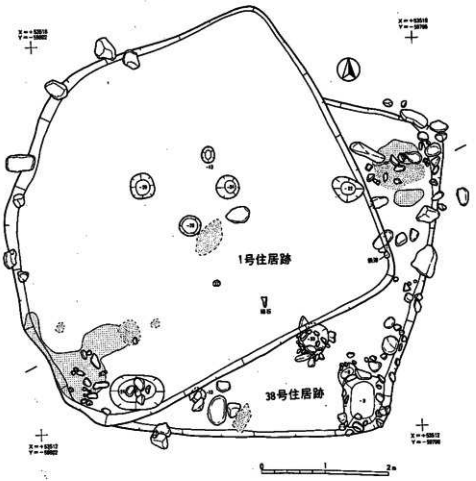


図14　2号住居跡（1:30）＜弥生時代後半（箱清水期）。柱穴、炉は検出できなかったものの、平面形は、この時代の一般的な形である。しかし一般的な住居よりは小型であり、異なるものと思われる。炭が多く見られ焼失家屋である。＞



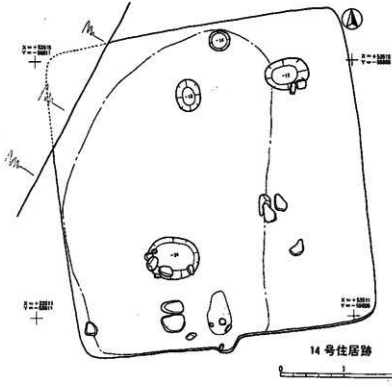
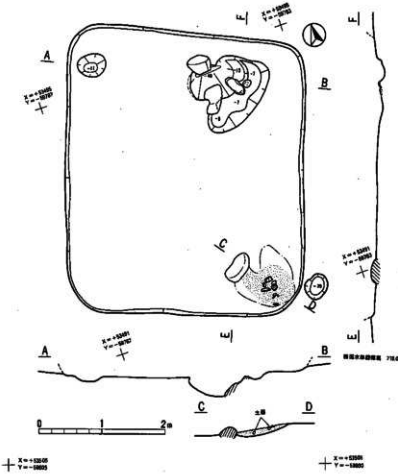


図15　1:38号住居跡（上）、14号住居跡（下）（1:60）＜1住は38住を掘り込み、1住内～上層には列石1が構築されている。1住のカマドは南壁中央にある。＞



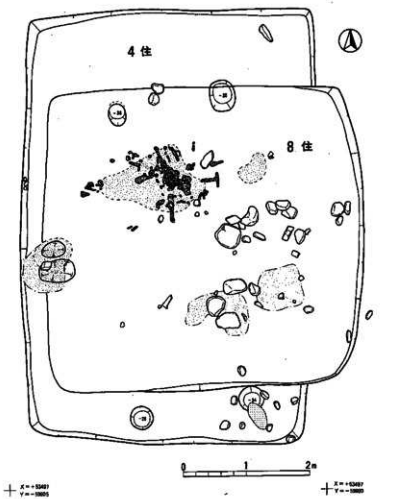


図16　3号住居跡（上）、4・8号住居跡（下）（1:60）＜8住は4住を切る。4住は焼失家屋である。＞

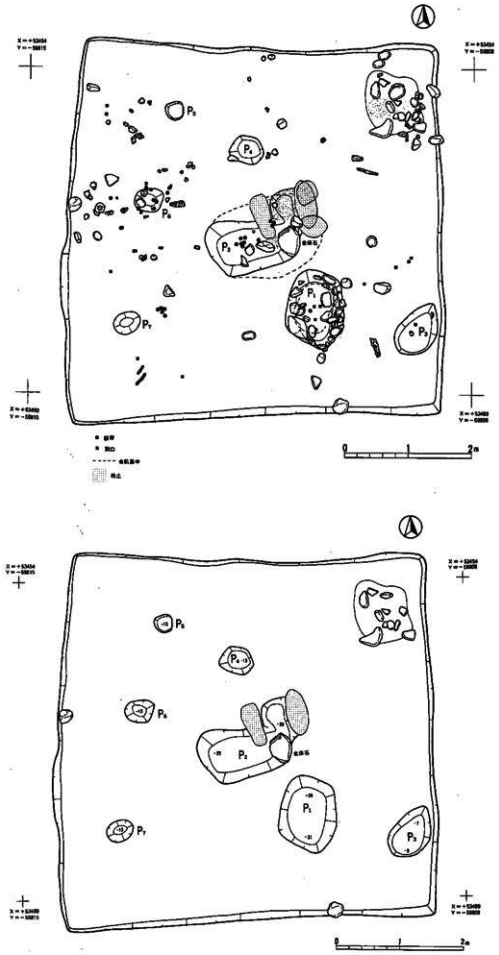


図17　5号住居跡（1:60・上は遺物出土状況。）＜鍛冶を行った住居で、金床石、鉄滓・金肌・羽口等の遺物が見られた。カマドは北東隅にある。＞

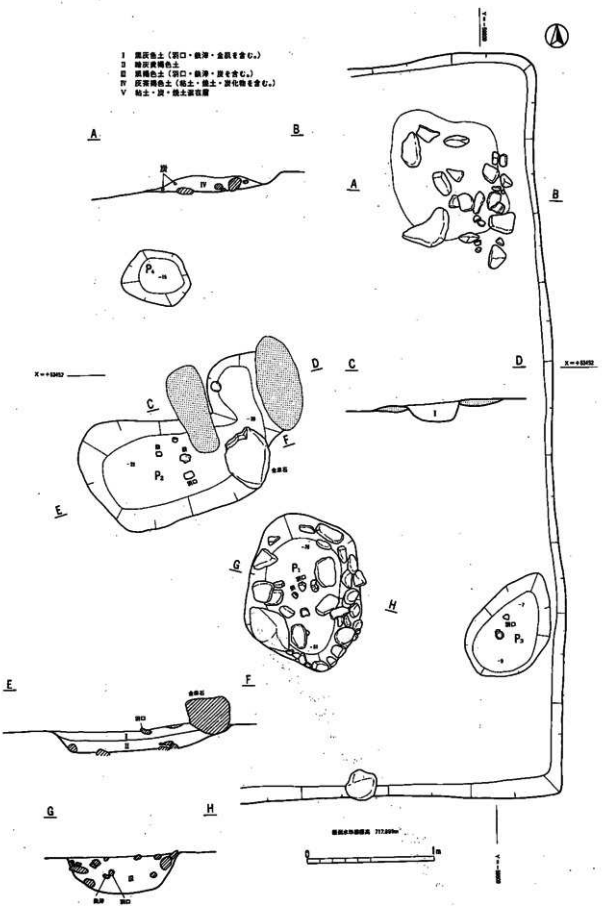


図18　5号住居跡詳細図（1:30）

長畑遺跡遺構平面図

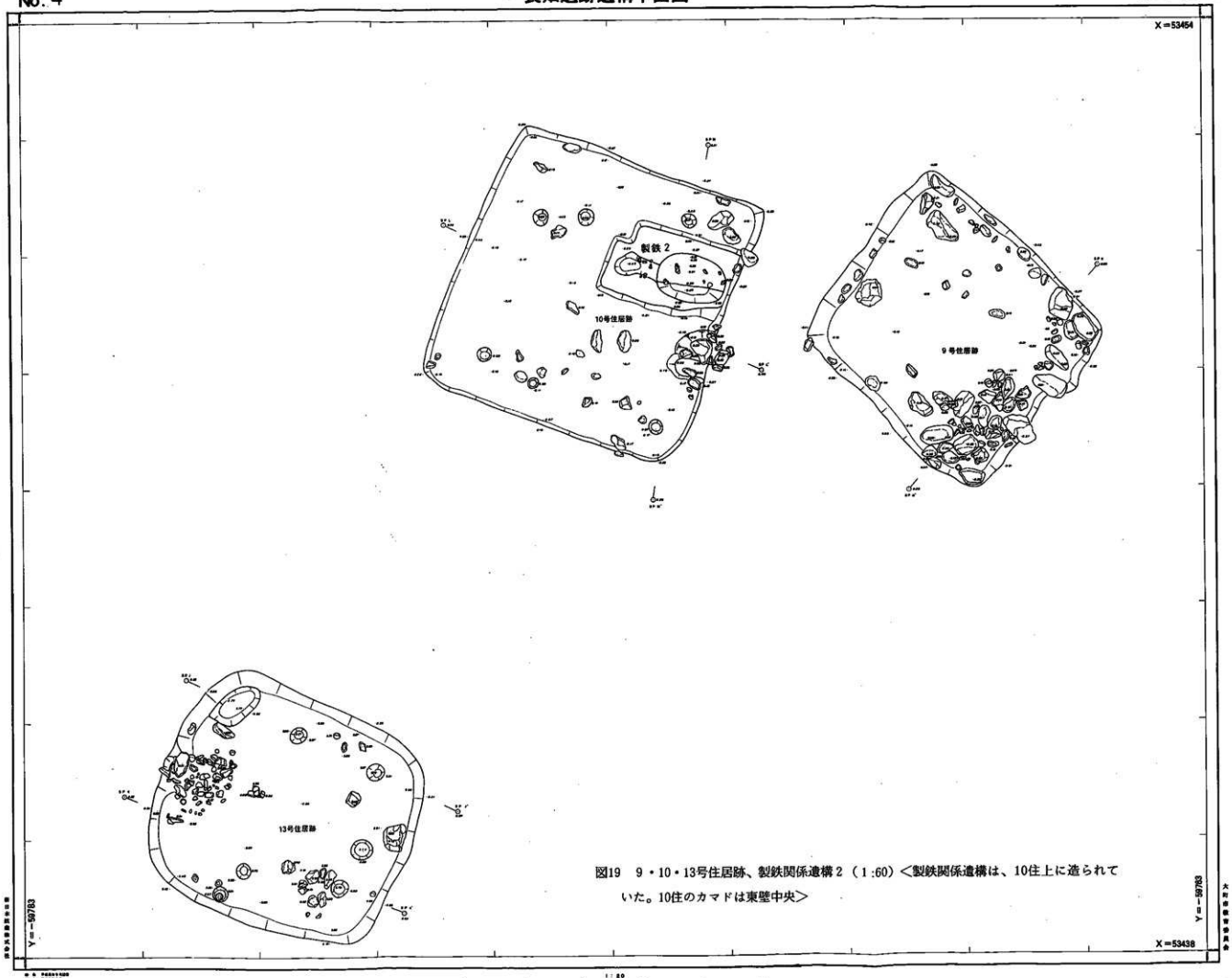
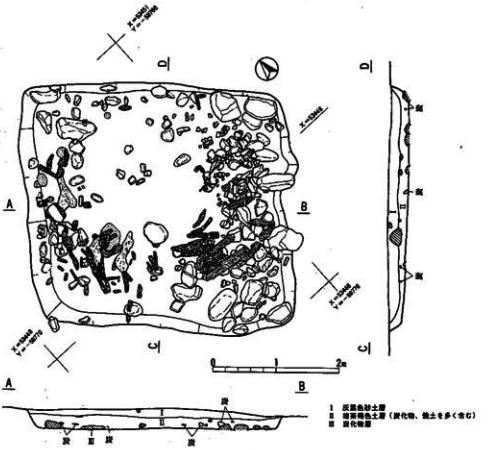


図19　9・10・13号住居跡、製鉄関係遺構２（１:60）<製鉄関係遺構は、10住上に造られていた。10住のカマドは東壁中央>



炭化材・遺物出土状況

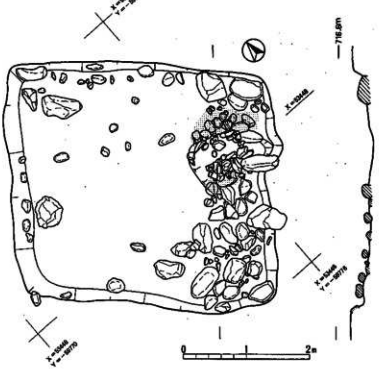


図20　9号住居跡（1:60、上は炭化物等出土状況）＜焼失家屋で、カマドは東壁北側にある。カマド南側に自然礫を利用した配石遺構が見られる。＞

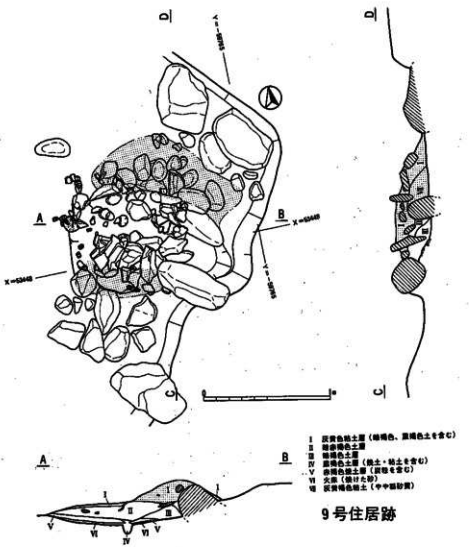


図21　上: 9 号住居跡（1 :30）、下:13号住居跡（1 :60）＜13住のカマドは西壁中央＞

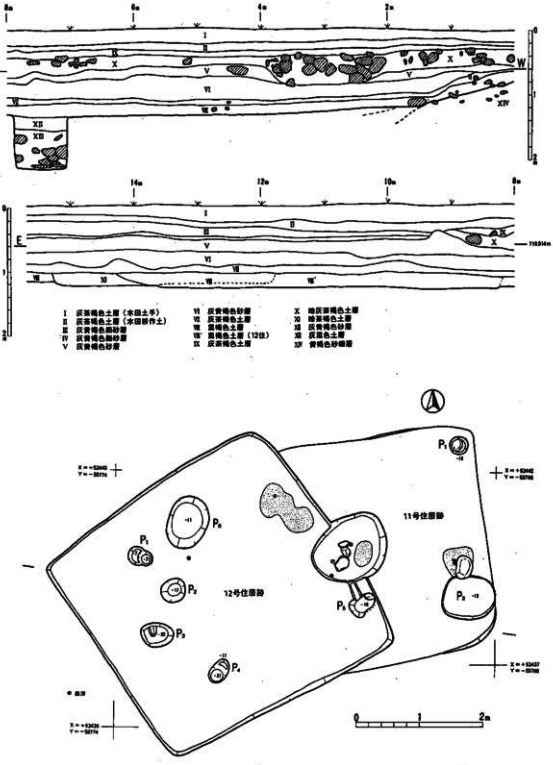


図22　11・12号住居跡（1:60）＜11住は12住を切る。11住のカマドは東壁南側、12住のカマドは東壁中央やや南側にある。上の土層図のⅦ層及びⅧ層上面が平安時代面と思われる。Ⅷ層は縄文晩期末～平安時代初期頃、Ⅻ層は縄文時代晩期頃、Ⅻ層は縄文晩期以前である。Ⅻ・Ⅻ層は河川跡の堆積である。＞

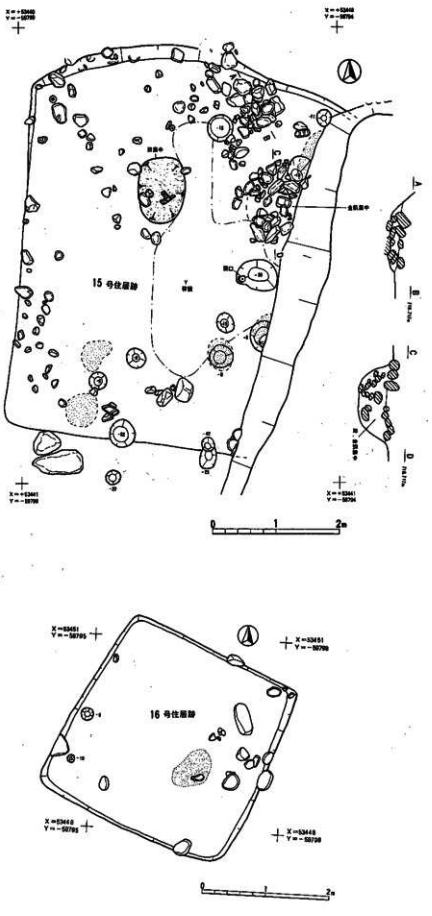
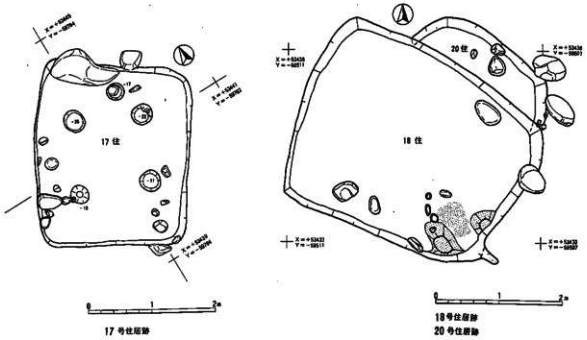


図23　15・16号住居跡（1:60）＜15住は鍛冶関係住居らしく羽口・鉄滓等が出土したほかに集石内において炭・金肌の集中が見られたり、住居中央やや北西に炭の集中が見られたりした。15住のカマドははっきりとせず、16住は東壁中央付近である。＞



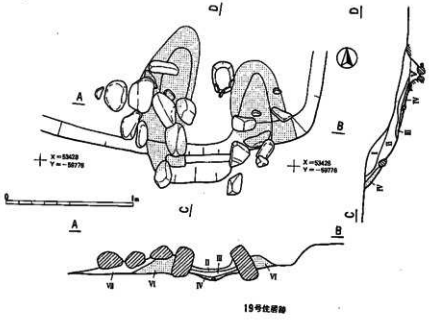


図24　17・18・19・20号住居跡（19号住居跡カマド1:30以外は、1:60）＜17住にはカマドは検出できなかった。18住は20住を切る。18住のカマドは南東隅にある。19住のカマドは南壁東端にある。＞

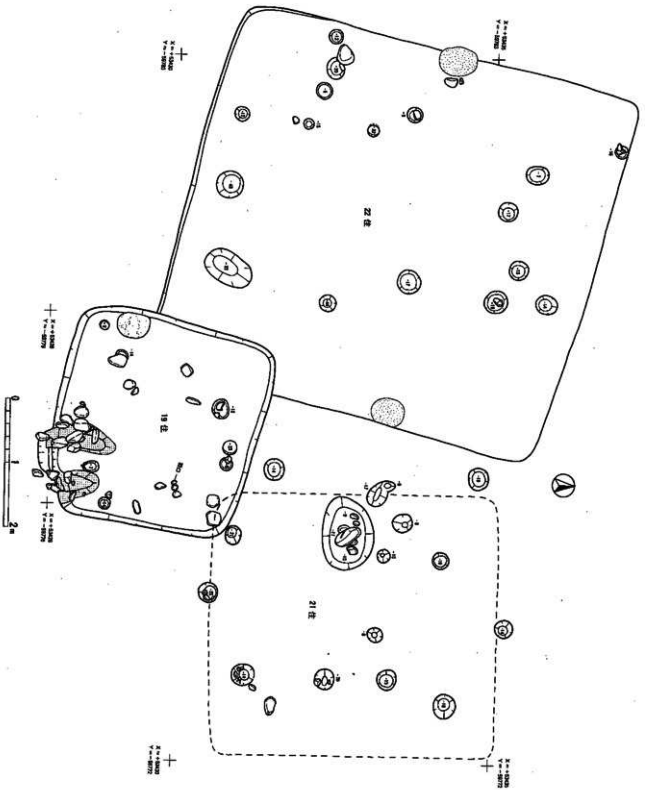


図25　19・21・22号住居跡（1:60）＜21住は19住を切り、19住は22住を切る。21住のカマドは西壁中央、22住は東西両壁中央に焼土があり2ケ所（新旧不明）にあったと思われる。19住西壁中央や南側のトーンではドングリと思われる炭化物が出土した。＞

長畑遺跡遺構平面図

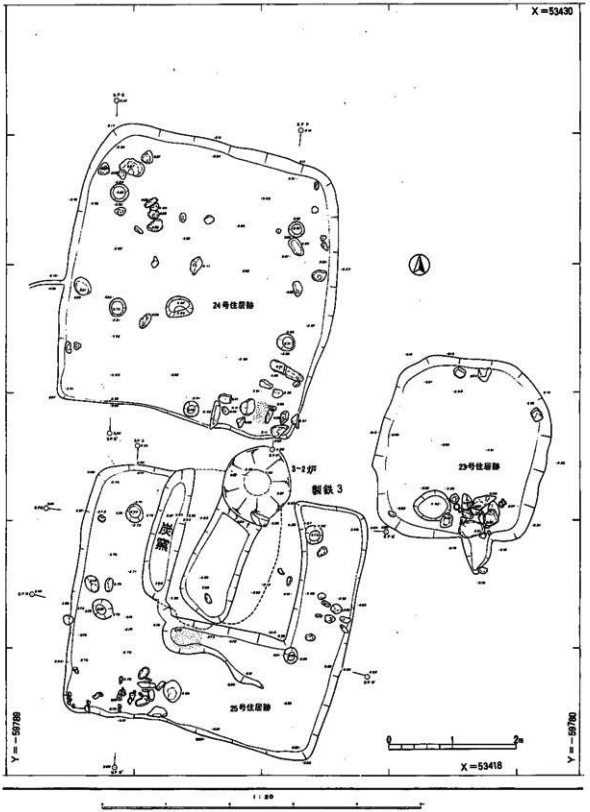


図26　23・24・25号住居跡、製鉄関係遺構3（3－2号炉）、炭焼き窯（1:60）＜製鉄3は、23・24・25住、炭窯の上にのる。炭窯は25住を掘り込んで造られている。23住のカマドは南壁東側、24住は南壁東端、25住は南壁西端にある。＞

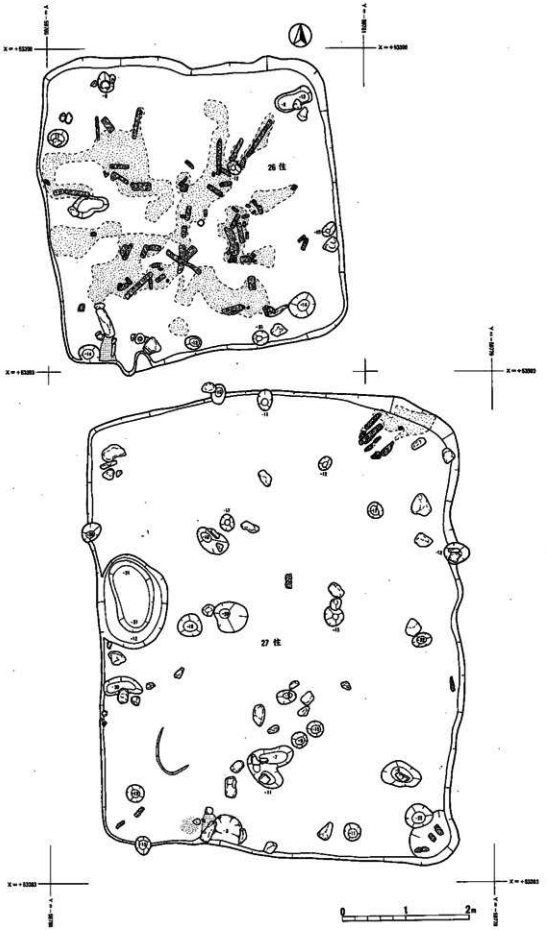


図28　26・27号住居跡炭化材等出土状況（1:60）＜両者ともに焼失家屋である。26住には多量な炭が見られたが、27住はさほどに多くはなかった。＞

長畑遺跡遺構平面図

縮尺 1/20

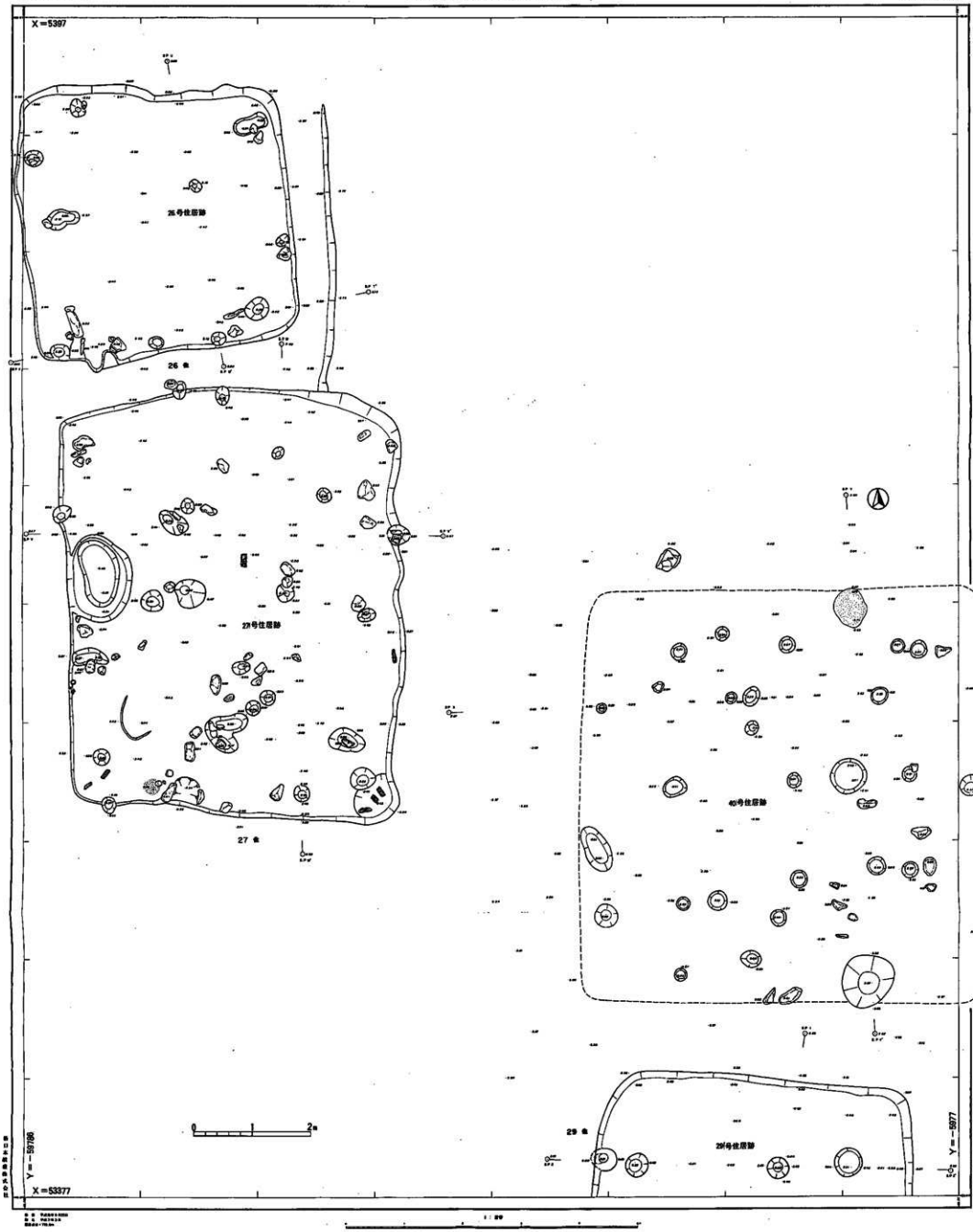


図27　26・27・29・40号住居跡、（1:60）＜40号住居跡は建物跡1に切られ、重複して検出された。26・27住のカマドは南壁西側、40号住居跡は北壁東側にある。＞

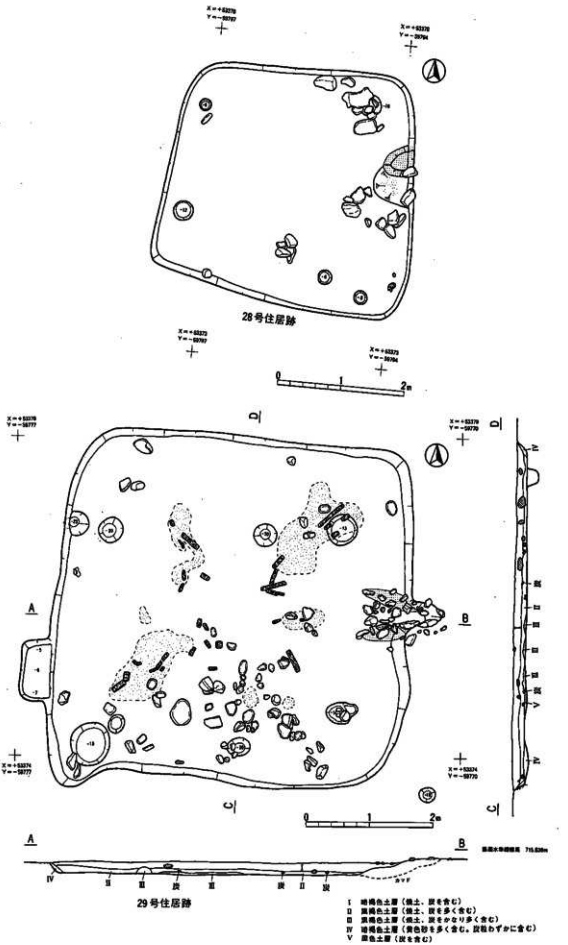


図29　28・29号住居跡（1:60）＜29号住居跡は炭化材、焼土等多く焼失家屋である。カマドは、28・29住ともに東壁中央にある。29住西壁中央やや南側の張り出しは、出入口にあたると思われる。＞

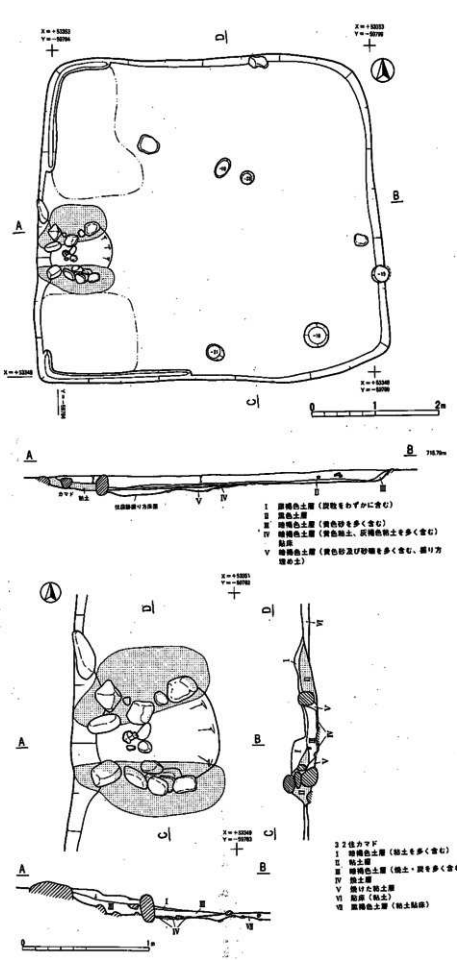


図31　32号住居跡（上1:60、下1:30）＜カマドは西壁中央やや南側にあり、カマドの両側は粘土が堅くたたきしめられた床となり、それに沿って壁際に周溝がある。＞

長畑遺跡遺構平面図

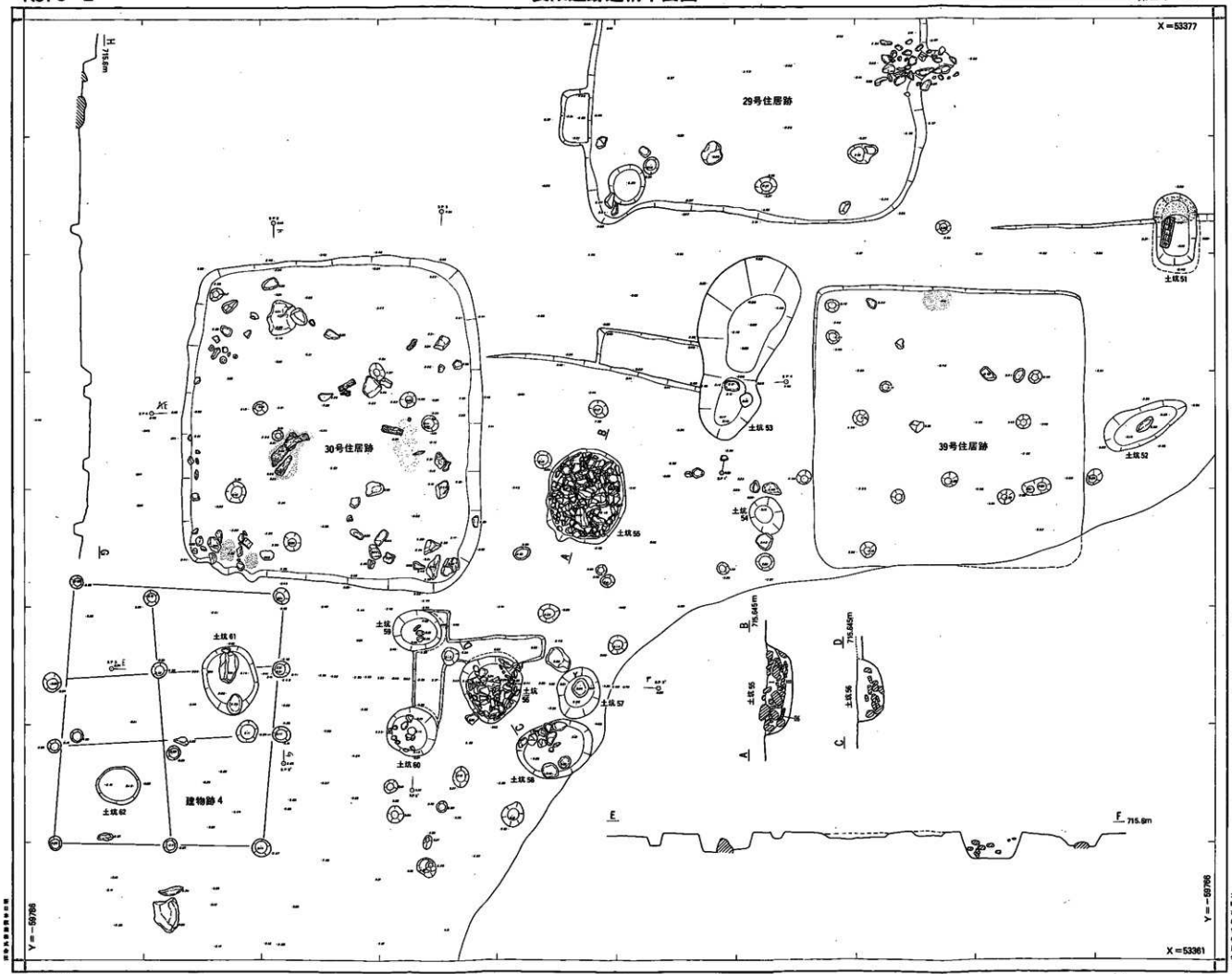


図30 29・30・39号住居跡、建物跡4、土坑51～62、柱穴群5（1：60）〈住居跡、土坑52を除くすべて中世である。30住には炭化材、焼土等が見られ焼失家屋に含まれるものであろう。カマドは、30住が南壁西側、39住が北壁中央にある。土坑51は火葬墓で炭化物、焼人骨等が検出された。土坑55・56には多量の礫が入っていた。〉

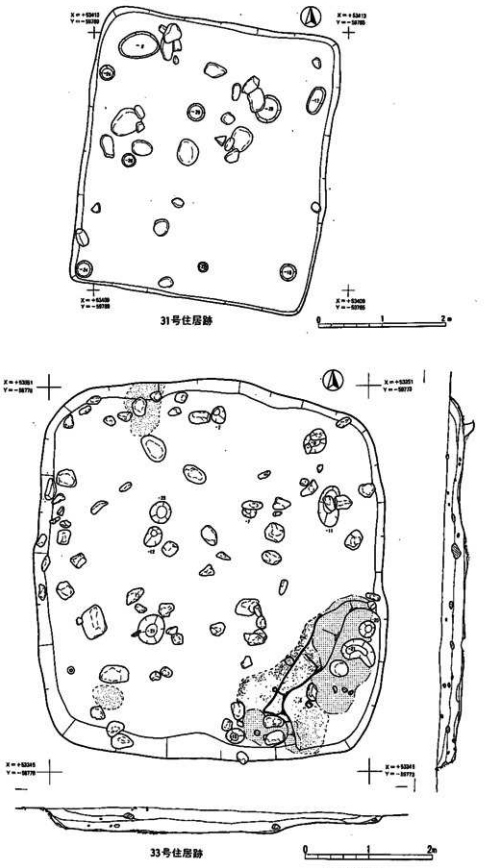


図32　31・33号住居跡（1:60）＜31住は、建物跡3の柱穴の一部に掘り込まれていた。33住は、東壁～北壁に沿って一段高い床面となっている。また、南北隅に粘土で固めた一段高い部分が見られる。この部分には炭が集中する部分があり、焼土も見られた。カマドは、南壁東側の粘土で固められた部分の南端にある。床面南西部分には焼土が見られた。＞

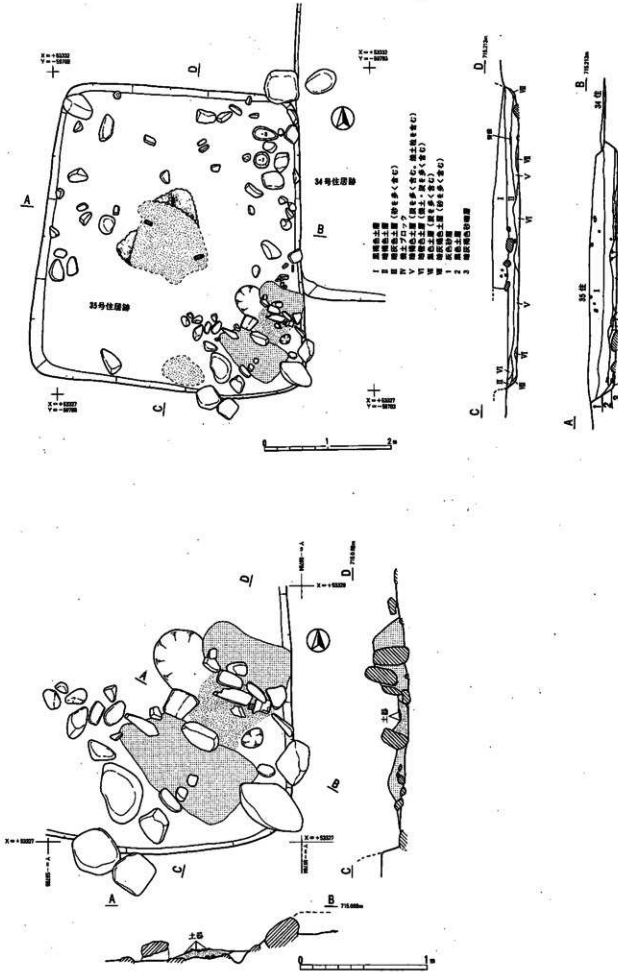


図33　35号住居跡（上1:60、下1:30）＜34住に切られる。カマドは南東隅にある。床面中央には炭・焼土の集中が見られた。＞

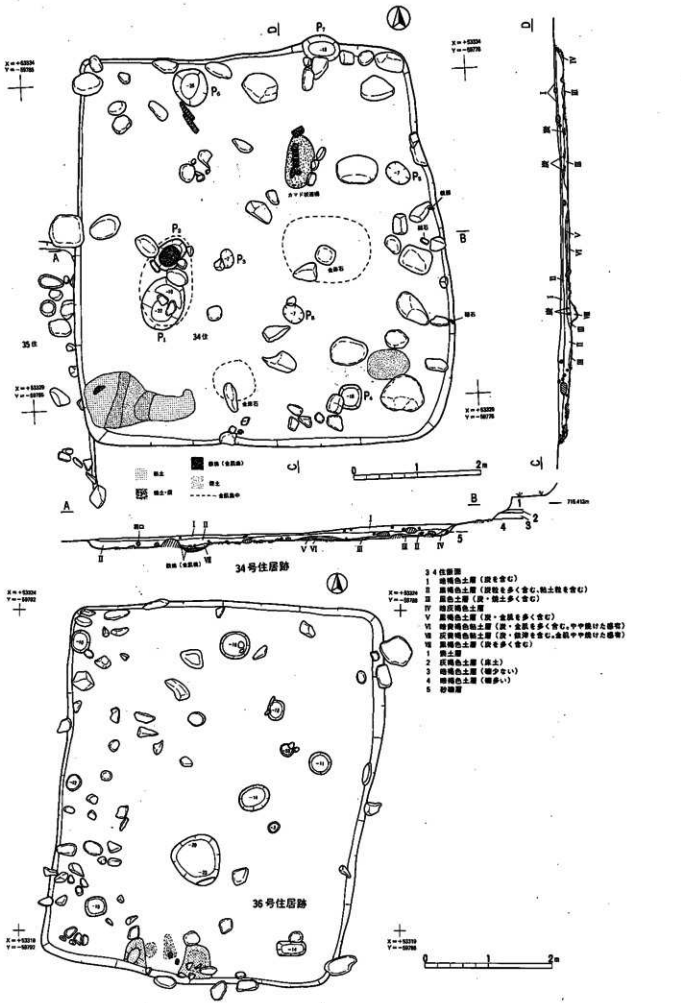
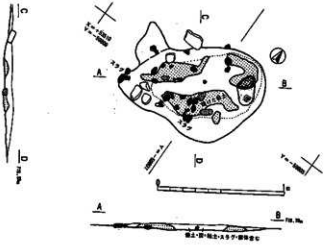
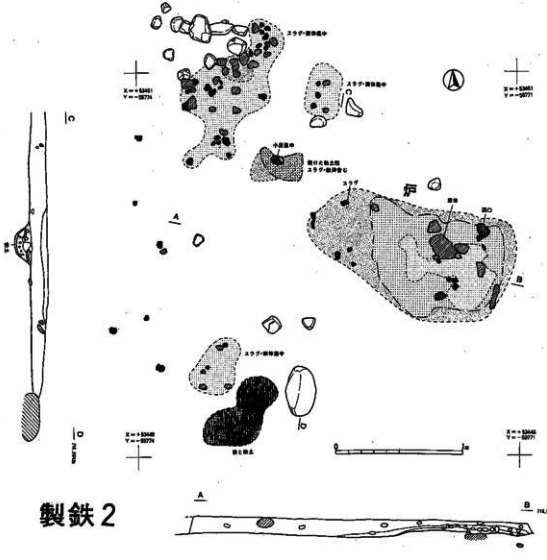


図34　34・36号住居跡（1:60）<35住は、金床石、金肌等が見られる鍛冶的住居で、カマド状遺構・焼土やP2内には金肌の固まった金塊がある。カマドは、35住南西隅、36住南壁西側にある。>

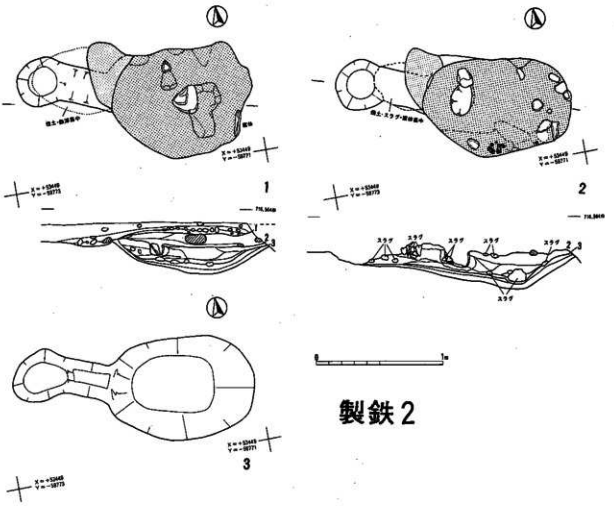


製鉄1



製鉄2

図35　製鉄関係遺構1（上）・製鉄関係遺構2検出状況（下）（1:60）＜1は炉で、周囲にはスラグ塊体等の散布が見られた。2は、10住上層にあり、灰原を炉の西側に伴って検出された。＞



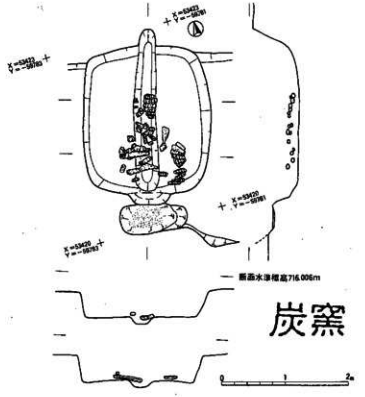


図36　製鉄関係遺構２炉（１:30）、炭焼き窯（１：60）＜製鉄関係遺構の炉は使用面が３面確認された（番号１～３）。２面の中央西側にはるつぼ状の落ち込み遺構が見られた。炭窯は製鉄関係遺構の下層から検出され、煙道にあたる溝に倒れ込むように炭が残っていた。＞

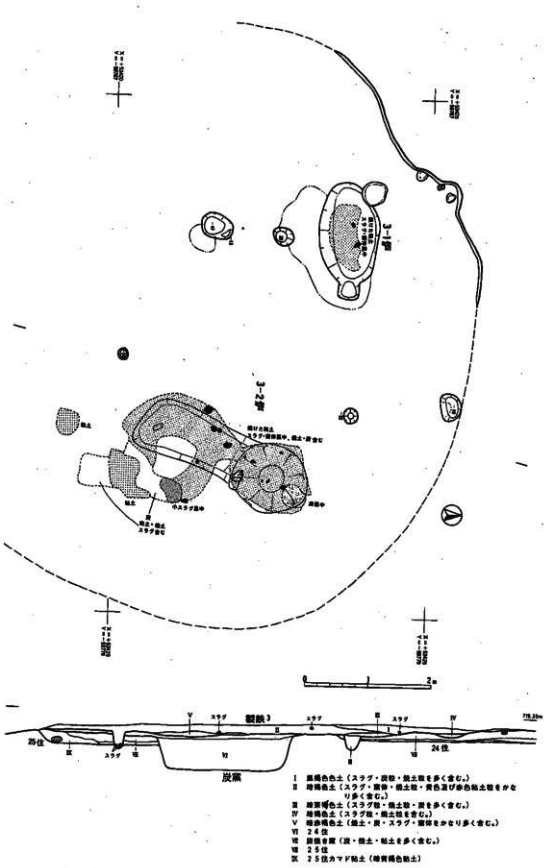


図37　製鉄関係遺構3（1:60）＜3－1号炉・2号炉の2基の炉があり周囲は壁状の落ち込みが一部に見られ、柱穴も検出され、床面が堅く固められた面も見られ、上屋があった可能性もある。23～25住・炭窯上に造られ、中世頃のものと考えられる。スラグ、窯体は南側にある建物跡3まで散ってあり、建物跡3もこれに伴う可能性がある。＞

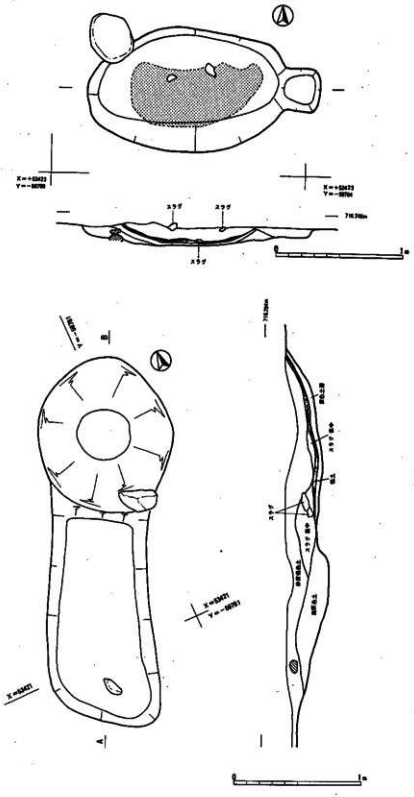


図38　製鉄関係遺構３の炉（上は３－１号炉、下は３－２号炉）＜1:30＞＜両者とも底面は炭を含む黒色土で堅く固められ、その上部に黄色粘土を敷き固め炉床としている。炉床は皿状となっている。３－２は比較的大型で、炉の南側には長い廃滓溝と思われる部分がある。＞

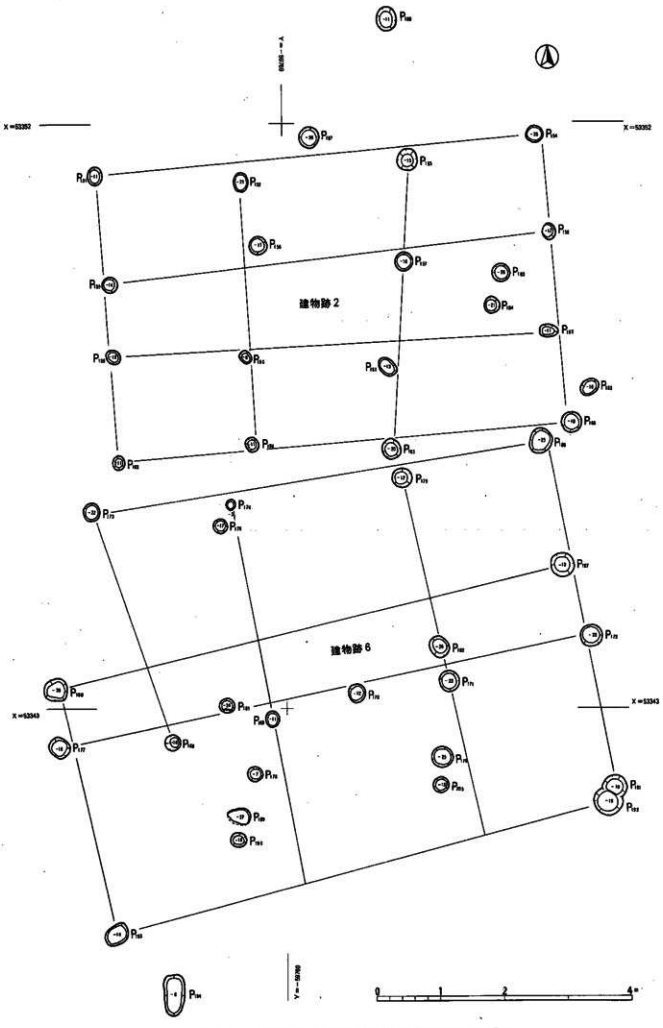
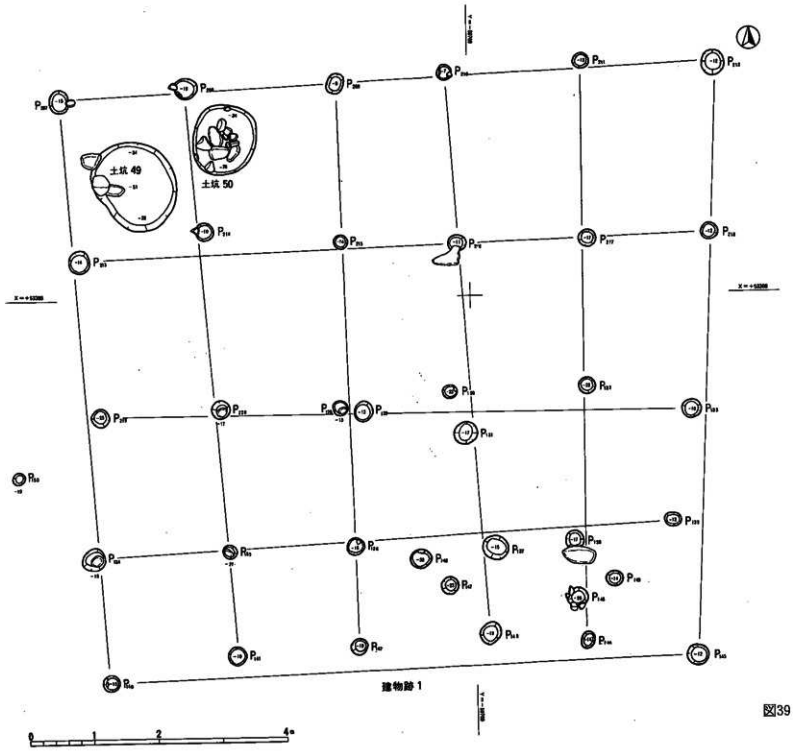


図40　建物跡2・6（柱穴群7）（1:60）＜両者とも中世の遺構である。＞



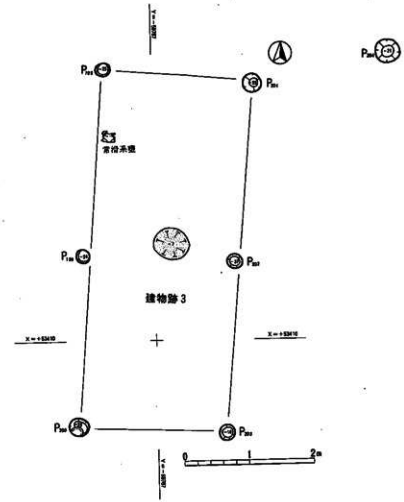


図39　建物跡1、建物跡3（1:60）＜両者とも中世の遺構である。建物跡3には中央に焼土がある。1の西外側では龍泉窯系の青磁碗片が、3では常滑系の甕が出土している。＞

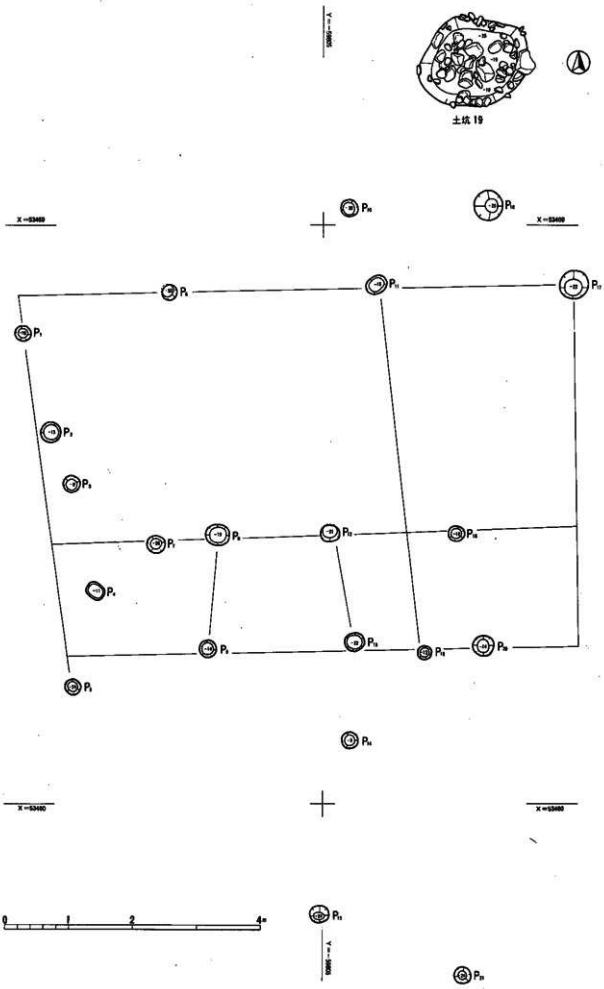


図41　建物跡5（柱穴群6）・土坑19（1:60）＜すべて中世のものである。検出面より輸入銭が1枚出土している。＞

図42　列石1（1:60）＜中世～近世頃のもので、1住内にほとんど重複している。長短4列の列石郡で焼土も同一レベルに見られ、これに伴うと思われる。＞

土坑１

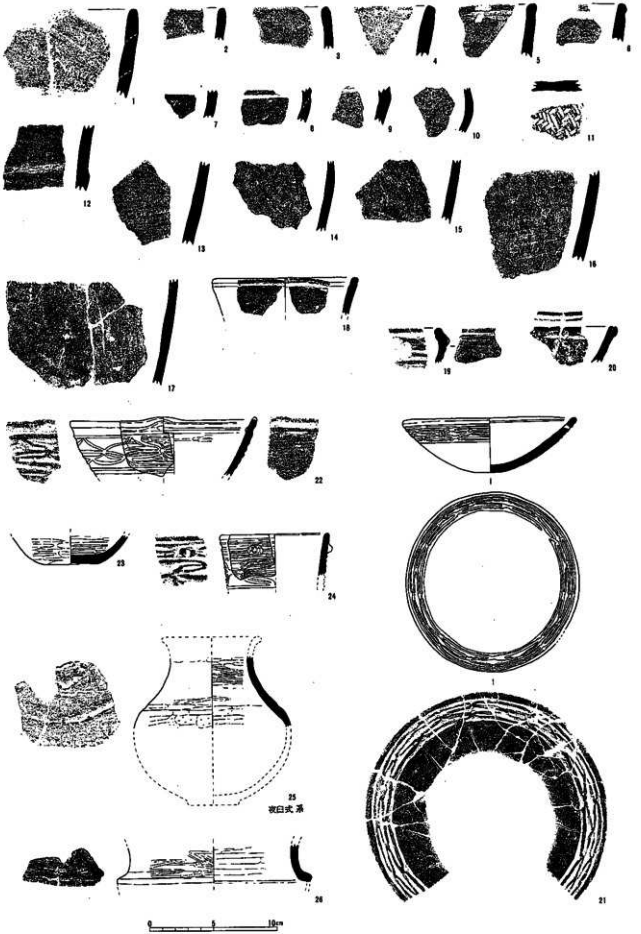


図43　縄文時代晩期末の土器（１）・土坑１出土土器（１）（１:３）

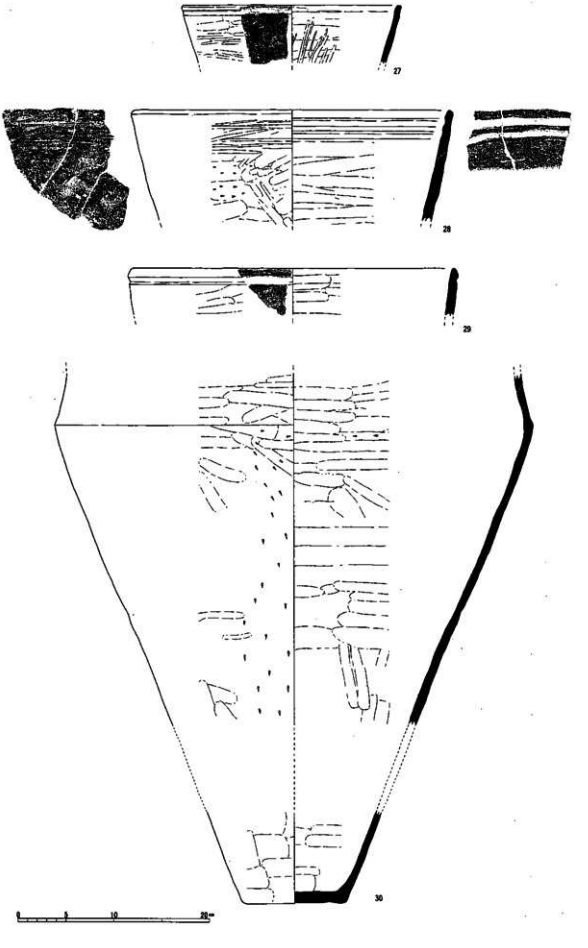


図44　縄文時代晩期末の土器（2）・土坑1出土土器（2）（1:4）

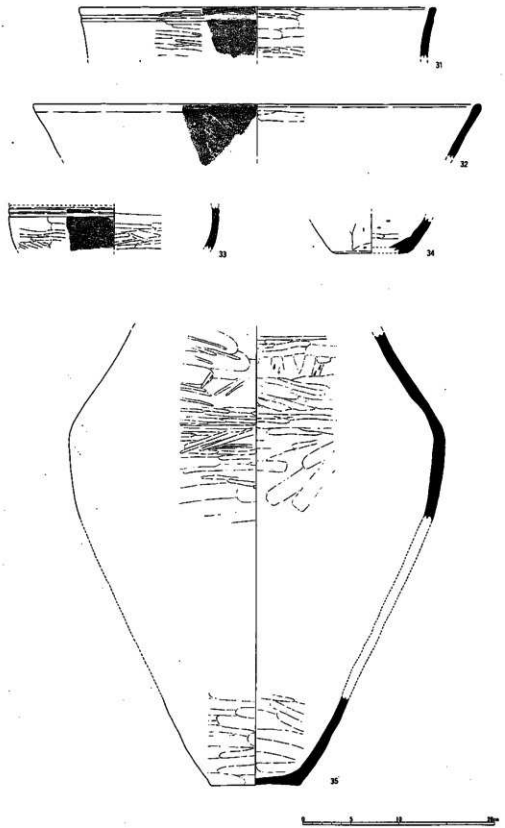


図45　縄文時代晩期末の土器（3）・土坑1出土土器（3）（1:4）

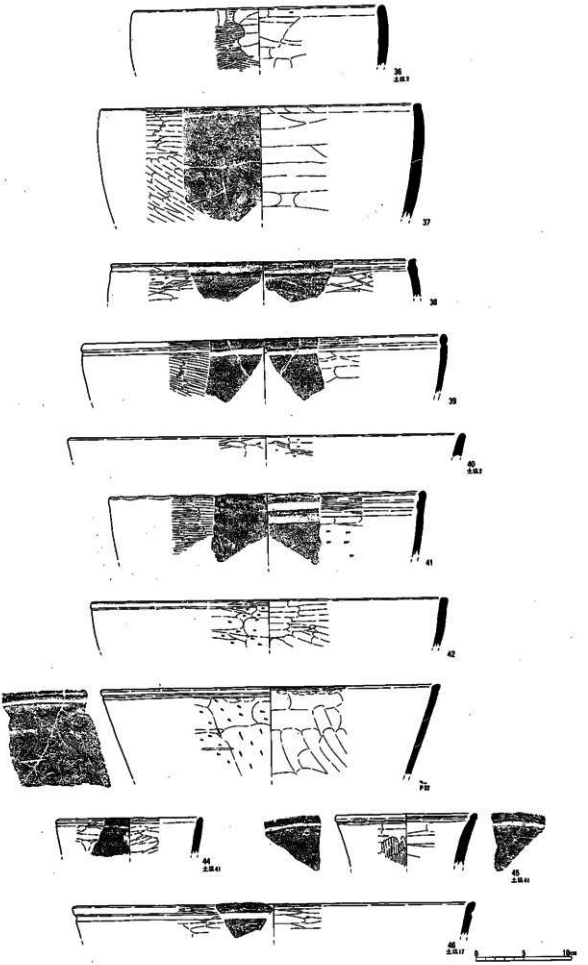


図46　縄文時代晩期末の土器（4）（1:4）

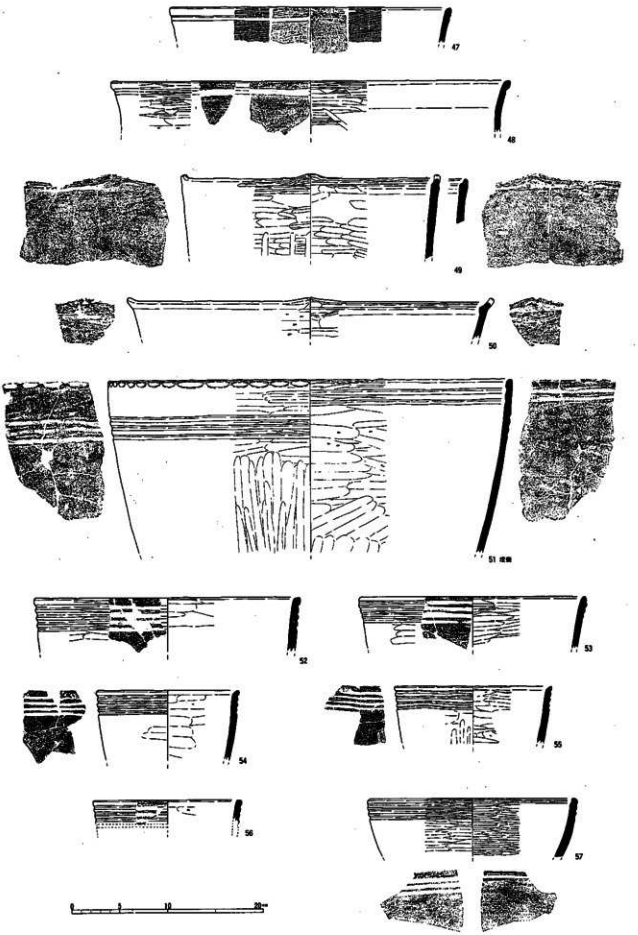


図47　縄文時代晩期末の土器（5）（1:4）

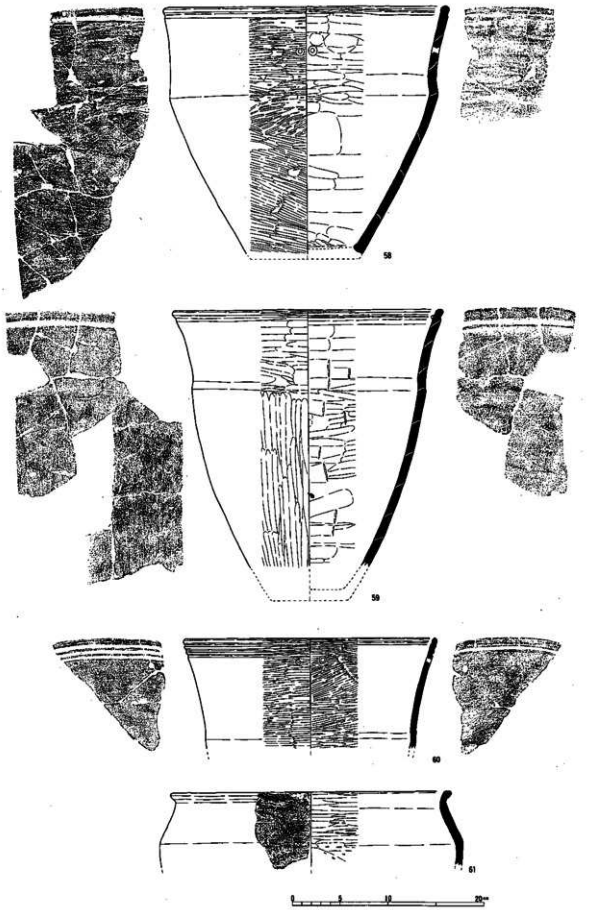


図48　縄文時代晩期末の土器（6）（1:4）

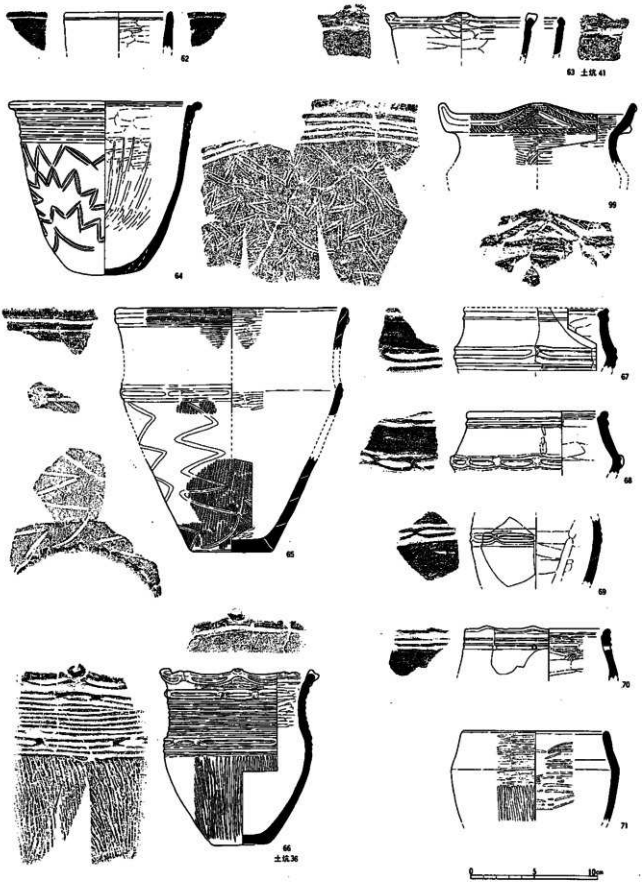


図49　縄文時代晩期末の土器（7）（1:3）

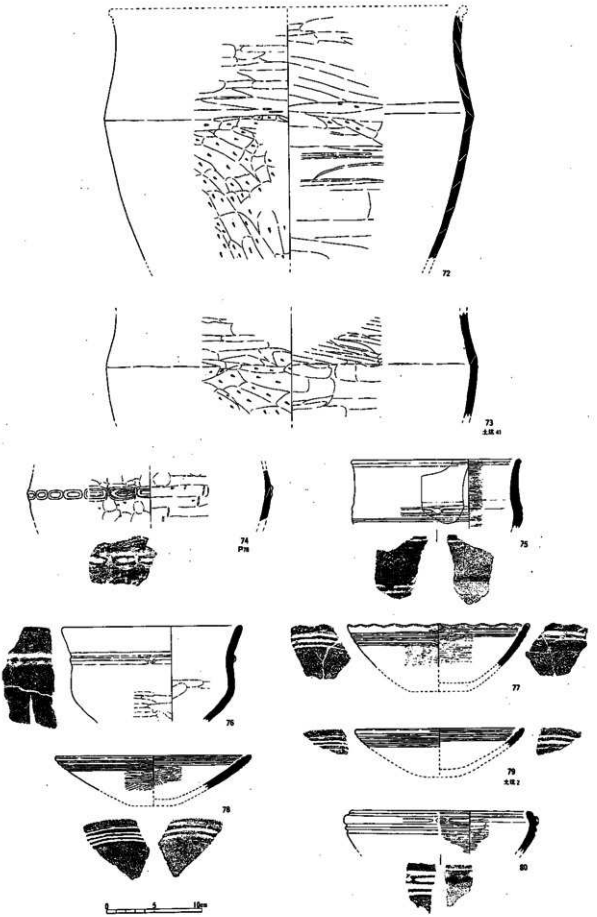


図50　縄文時代晩期末の土器（8）（1:4）

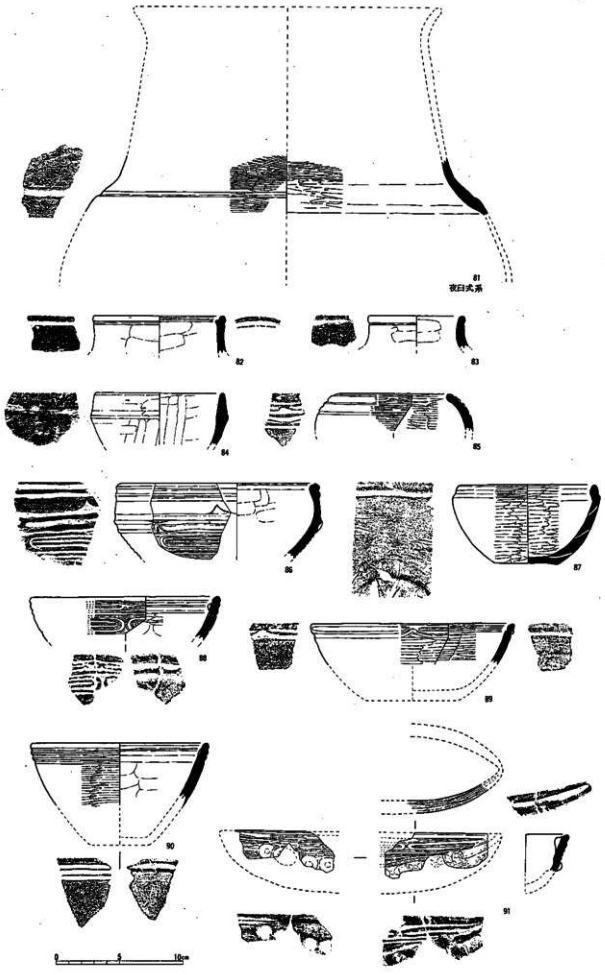


図51　縄文時代晩期末の土器（1：3）

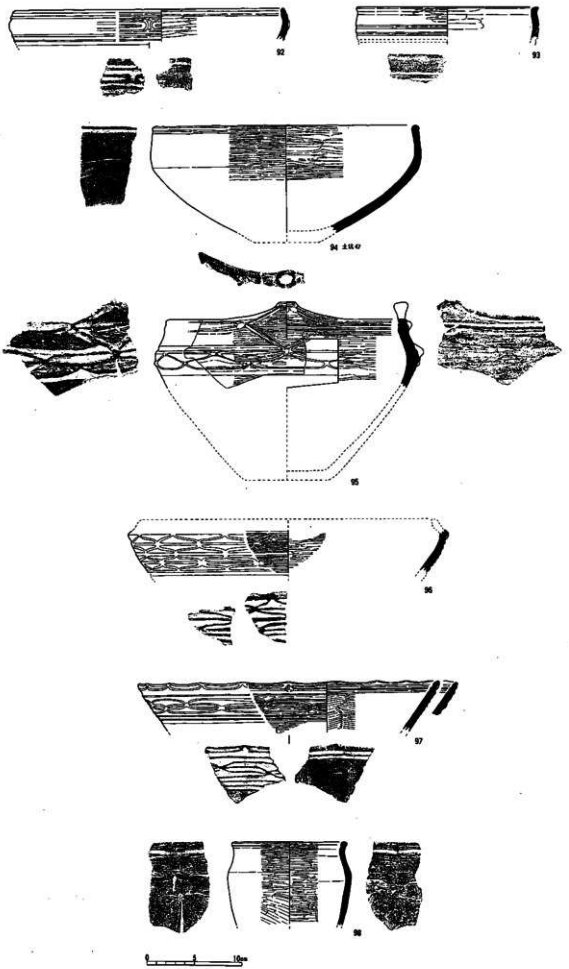


図52　縄文時代晩期末の土器（1：4）

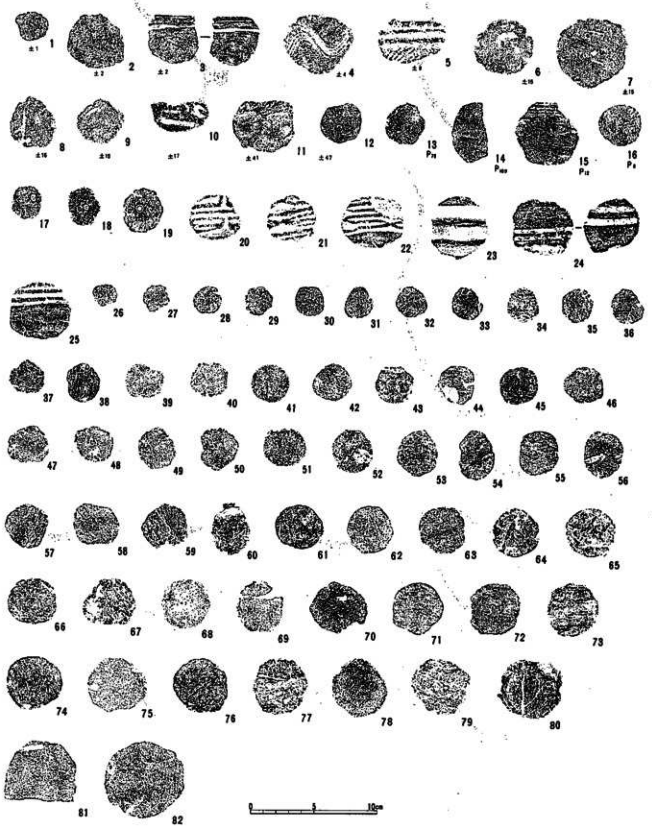


図53　縄文時代土製円板（1：3）

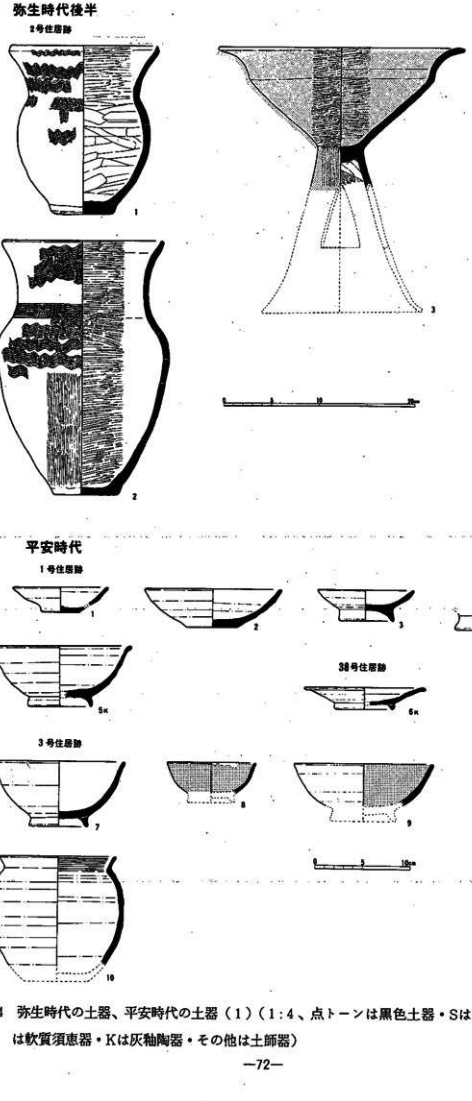


図54　弥生時代の土器、平安時代の土器（1）（1：4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

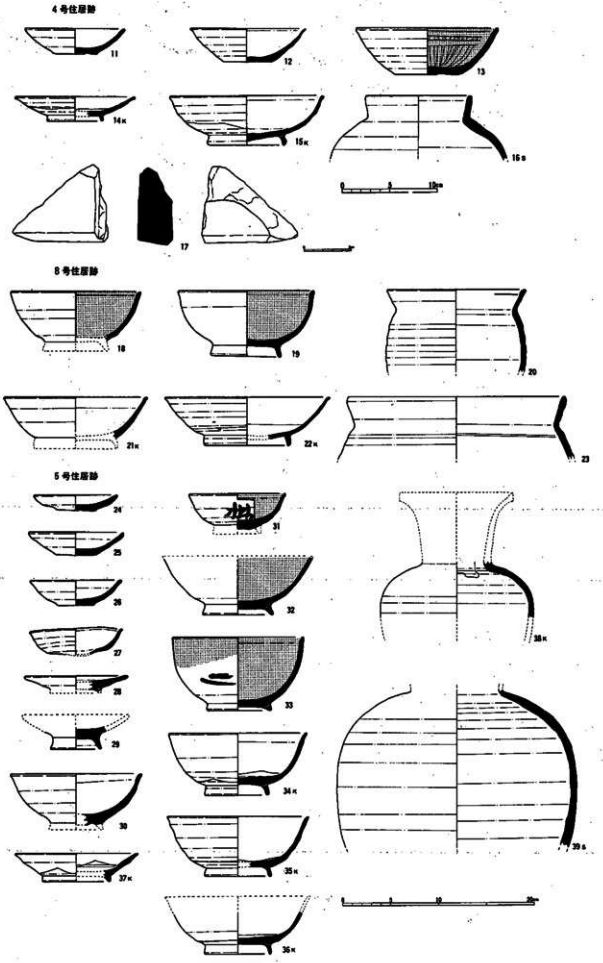


図55　平安時代の土器（2）（1:4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器。17は板状土製品）

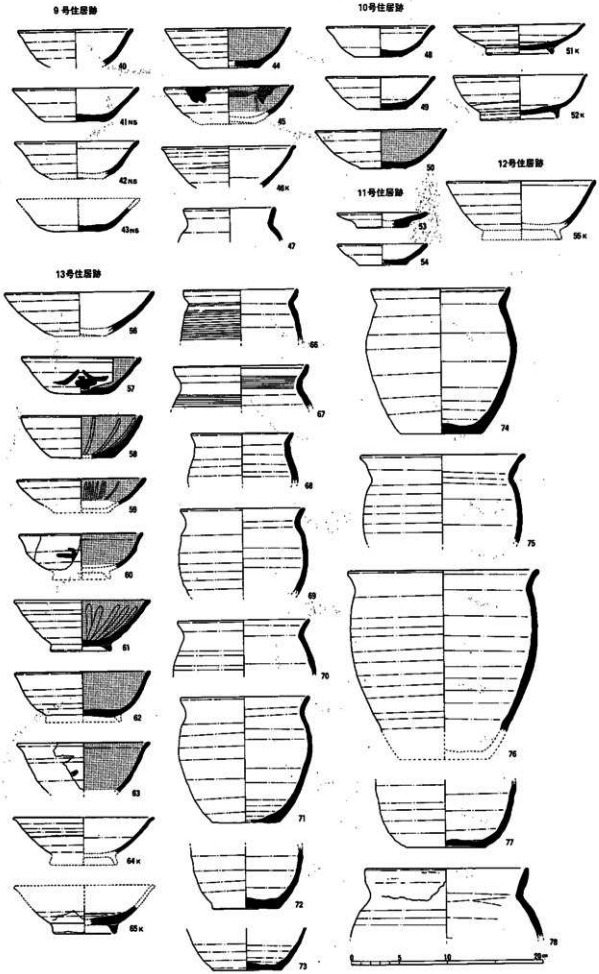


図56　平安時代の土器（3）（1：4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

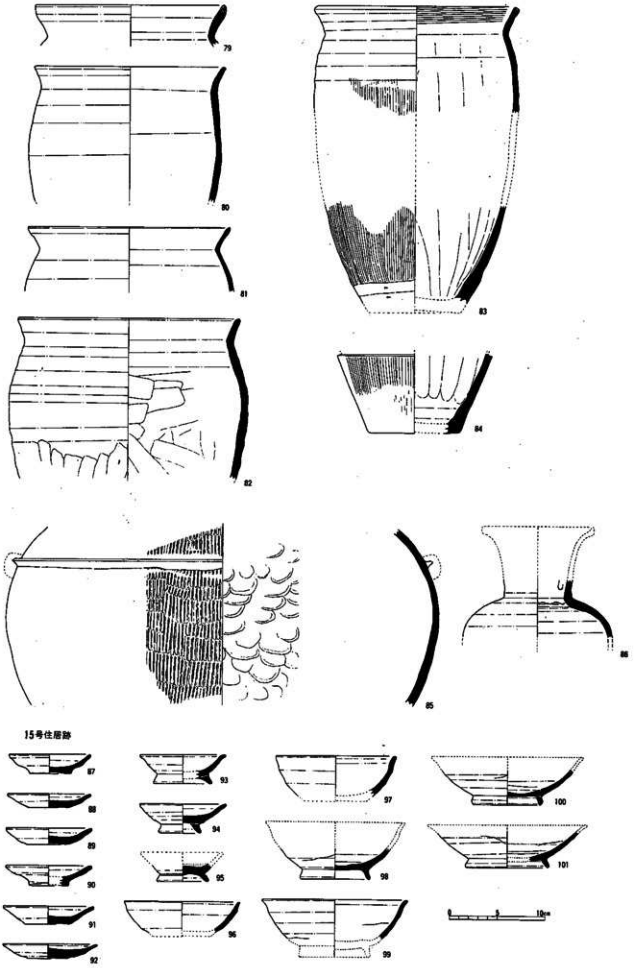


図57　平安時代の土器（4）（1：4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

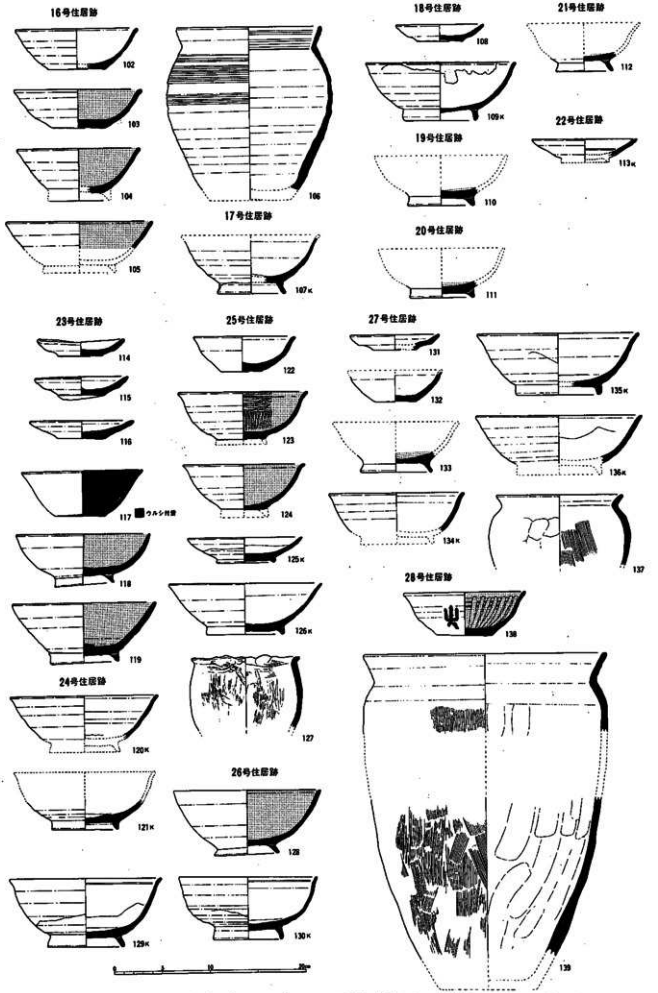


図58　平安時代の土器（5）（1:4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

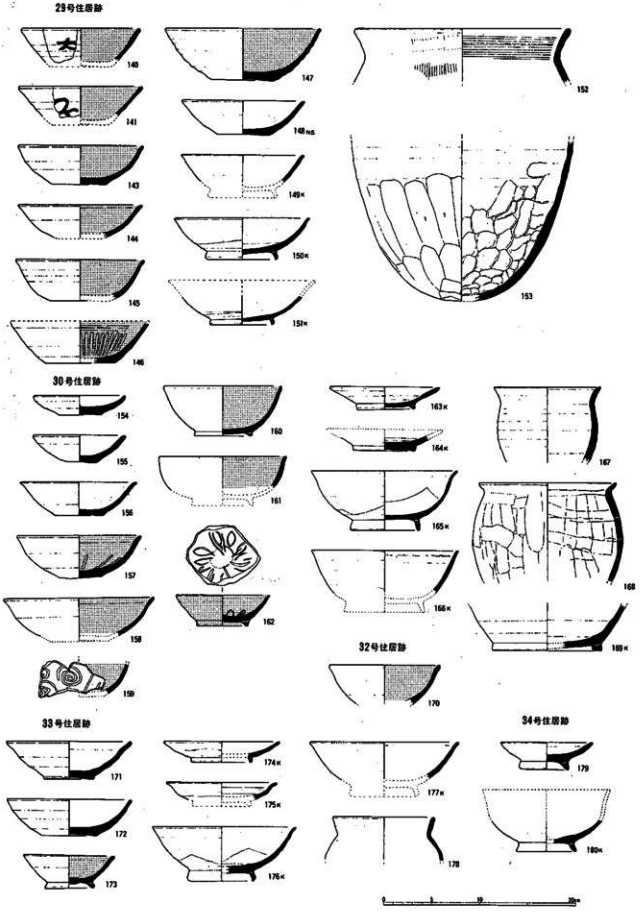


図59　平安時代の土器（6）（1:4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

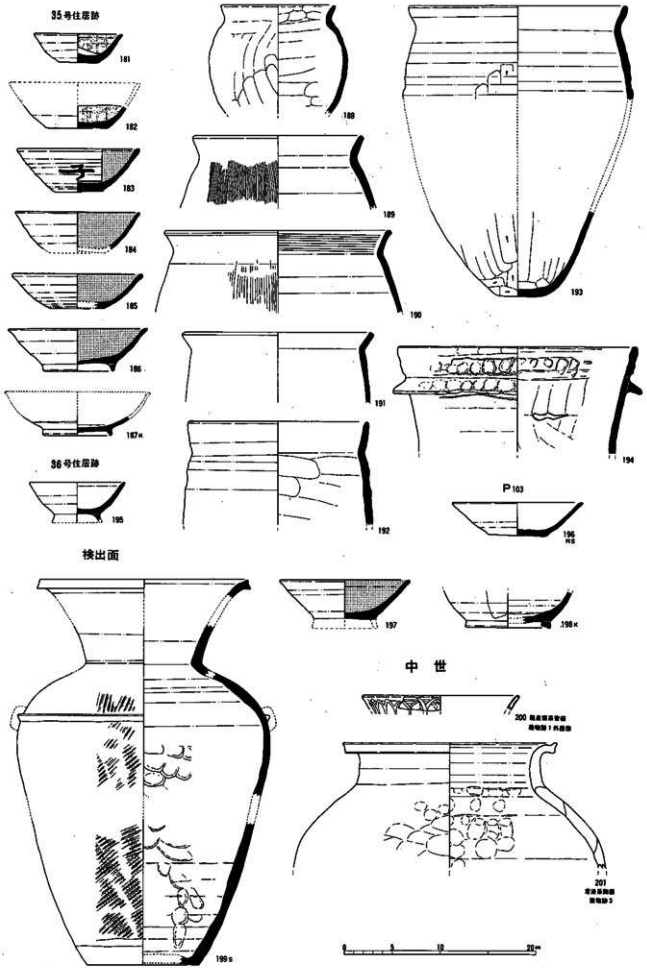


図60　平安時代の土器（7）中世の陶磁器（1：4、点トーンは黒色土器・Sは須恵器・NSは軟質須恵器・Kは灰釉陶器・その他は土師器）

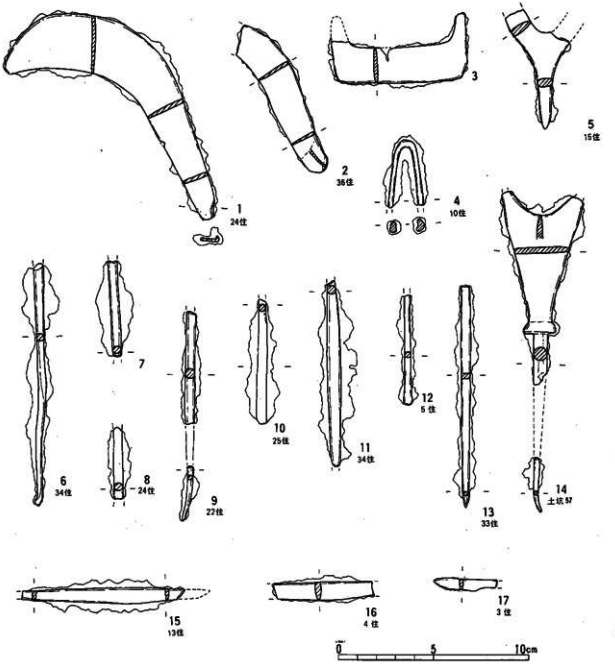


図61　鉄製品（1：2）＜14は中世、それ以外は平安時代＞

第Ⅳ章　清水氏居館跡

本居館跡においては、中世15世紀を中心に、13世紀後半～16世紀、近世17～19世紀の遺物が検出された（遺物については別に機会を見て公表したい）。また下層の黒褐色土層内からは縄文時代中～後期の土器・石器が出土している。

本居館は、外堀、内堀がありそれをつなぐ堀があり、一見すると四郭あるように思えるが、これらがすべて同時存在したとはいいがたい。外堀の外にも建物跡・竪穴・焼土が検出され、本居館を中心にその周囲も外郭として存在していたと思われる。本居館は、乳川扇状地に和田川が形成した段丘面にあり、東側は砥沢用水で一段下がり、西側は県道のある場所で一段上がりその面は東西150mの幅で、その面いっぱいを使用して居館を造成している。外堀の全長は東西124m×南北104m（堀内部で116m×96m）、内堀は東西58m×南北46m（堀内部で50m×38m）である。堀の断面、建物跡の配置からして最低でも２回以上は造り直されたと推定去れる。また、北側外堀沿い、西側の外堀と内堀をつなぐ堀の北側沿いでは土塁の痕跡が観察され、この堀に沿っては柱列も見られることから、何回かの造り直し時点で土塁が構築されたと推定される。

遺構としては、住居跡８軒（あえて住居跡としたが住居でないものを含む）あり、このうち、黄色ローム土を床に敷き貼床した平地式の住居跡３軒（１、８、９号住居跡）、竪穴式で方形の石組みを床面にもつもの２軒（４・５、７号住居跡）、竪穴式のもの１軒（３号住居跡）竪穴式で壁土と思われる崩落土塊を含むもの２軒（２、６号住居跡）。＜これは壁土の存在、２住では足踏石状列石上にしっかりとした基礎木組みをもち、炭化米が出土していること、６住では竪穴が深く、銭が74枚など出土していることから土壌的な性格が考えられる。特に２住は、竪穴を掘った後に壁との間に約30cmの間隔を離して平な礫を並べ、その上に木組をした後に板材を回らせたもので、床の一部には、潰れてしまっていたものの列石と列石間に渡すように材を置き、その上に板を敷き床としていたものと考えられる。埋土中には多量の壁土にしたと思われる粘土と砂を混合した土塊が多量に検出され、土壁をもっていたことを確実視させる＞。柱穴は750ケあまり検出され、主郭においては、礎石建物跡１棟を含む建物跡群が検出され、２～３回の建て直しを推定させる。この他に柱穴配置から建物跡17棟、柱穴列15列（うち１列は礎石列）が考えられ、竪穴28基、土坑32基（うち３基は近世）、列石３列（列石１は建物跡７に伴ない、列石２・３は西側外堀淵に並ぶ。）、焼土42ケ所が検出された。今後、遺構配置、堀区画等を検討し、それぞれの郭の性格等を検討し、別の機会を見て、本居館の構造等を後に発表したいと思う。

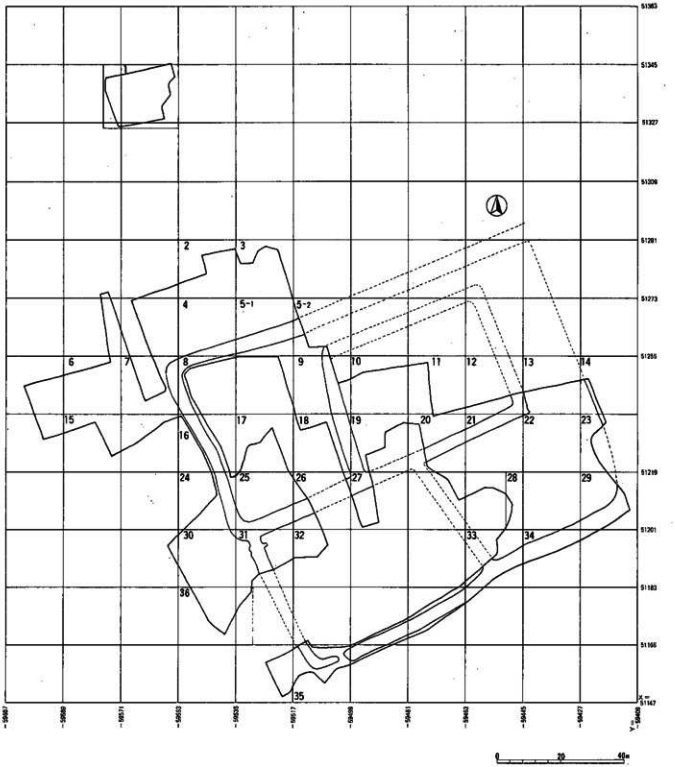


図62　清水氏居館跡遺構図割付図（1:1200）

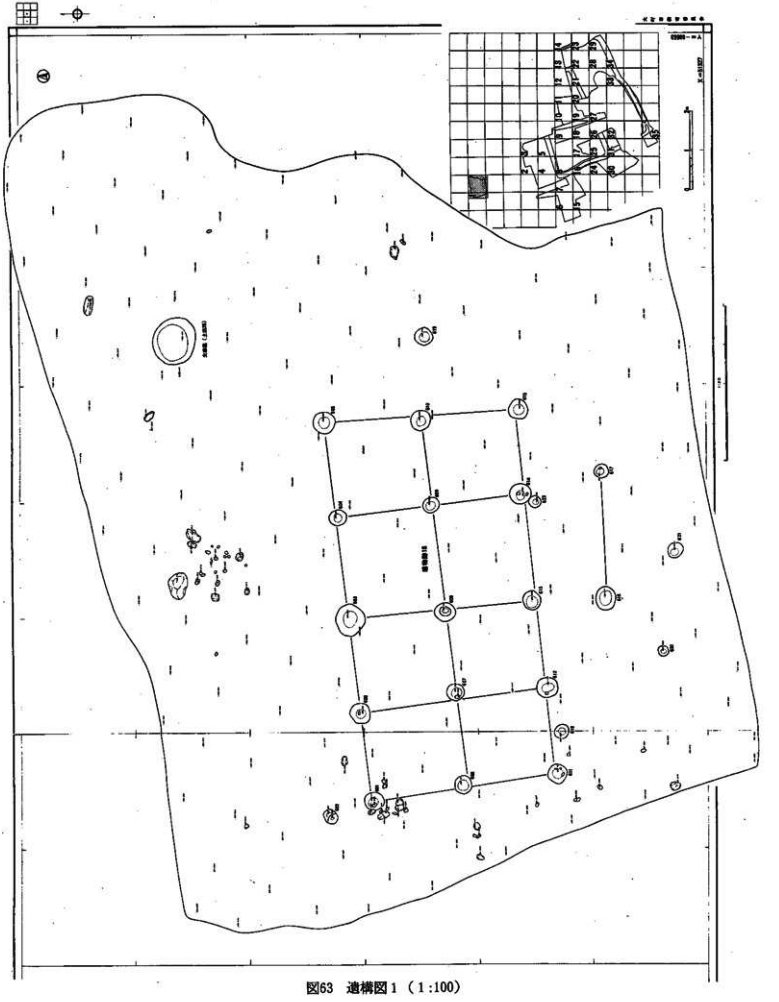


図63　遺構図１（１:100）

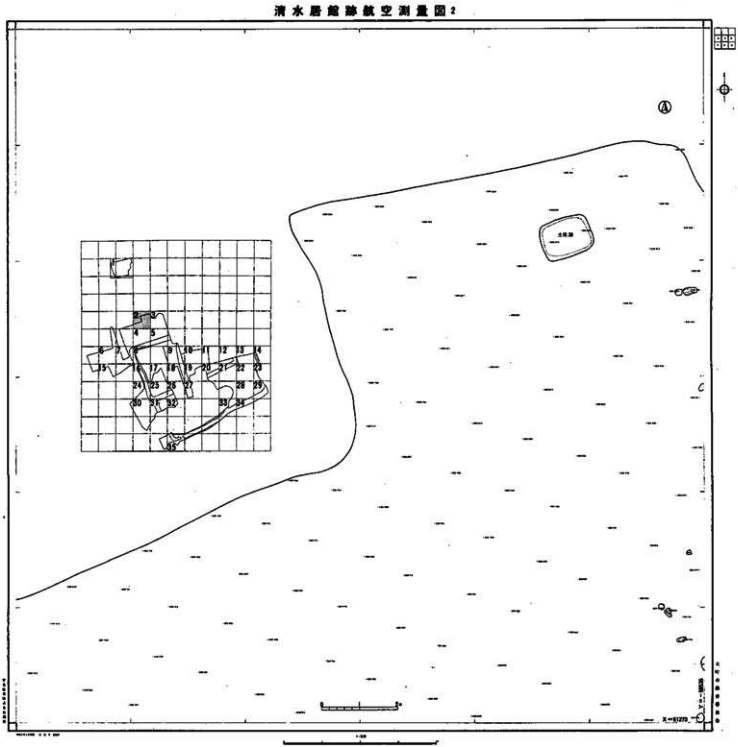


図64　遺構図2（1:100）

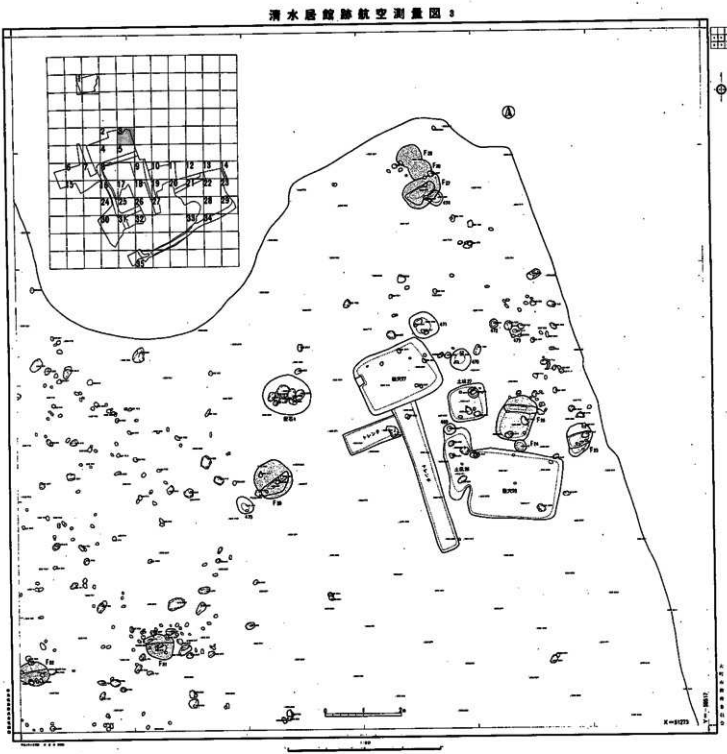


図65　遺構図3（1:100）

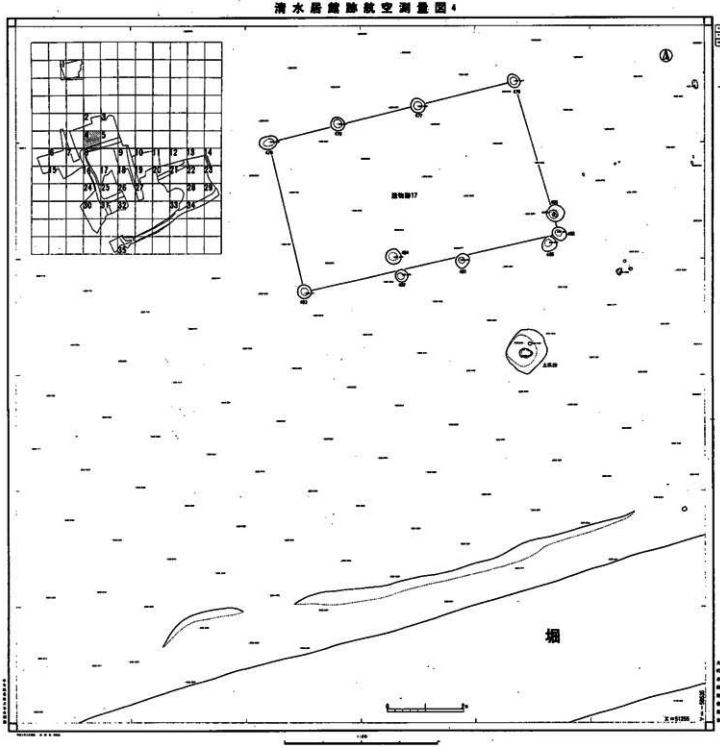


図66　遺構図4（1:100）

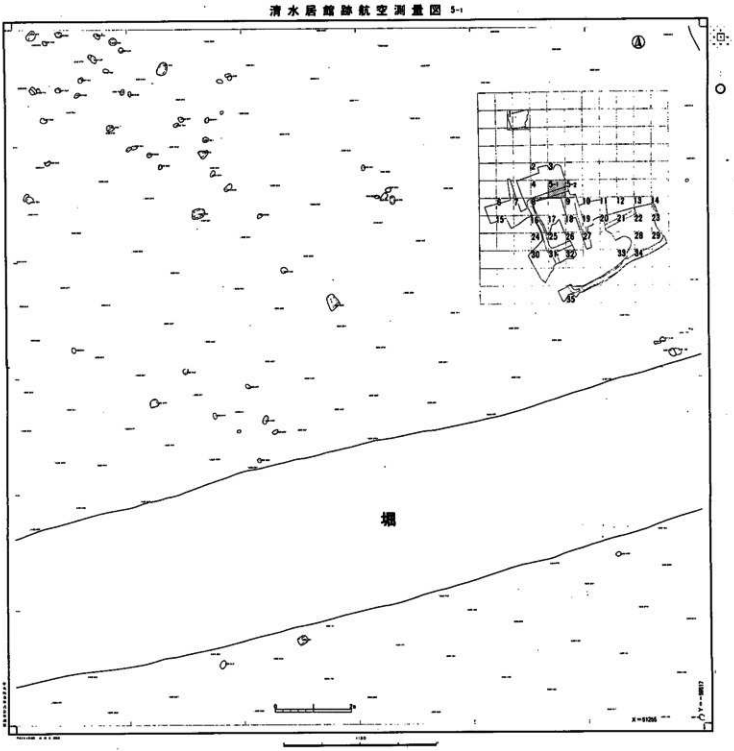


図67　遺構図５－１（１:100）

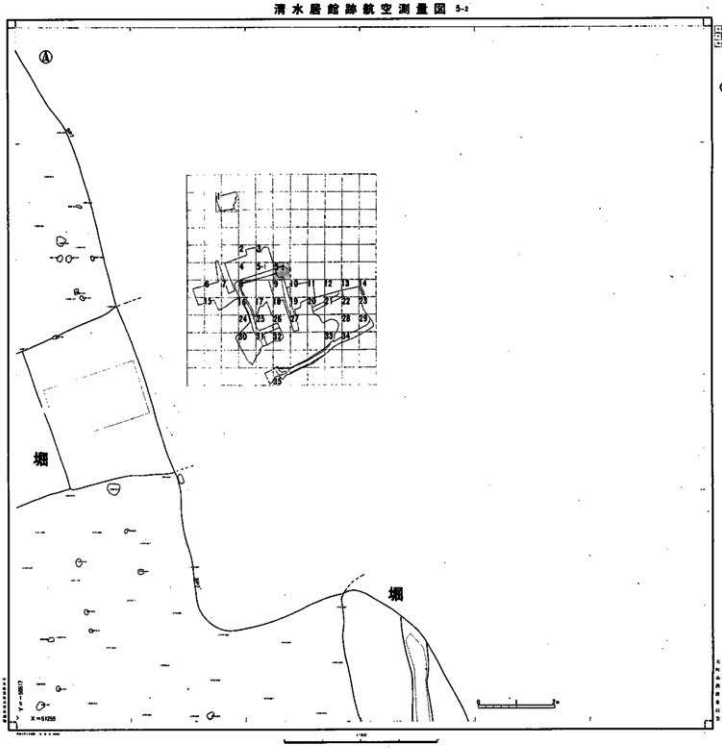


図68　遺構図5－2（1:100）

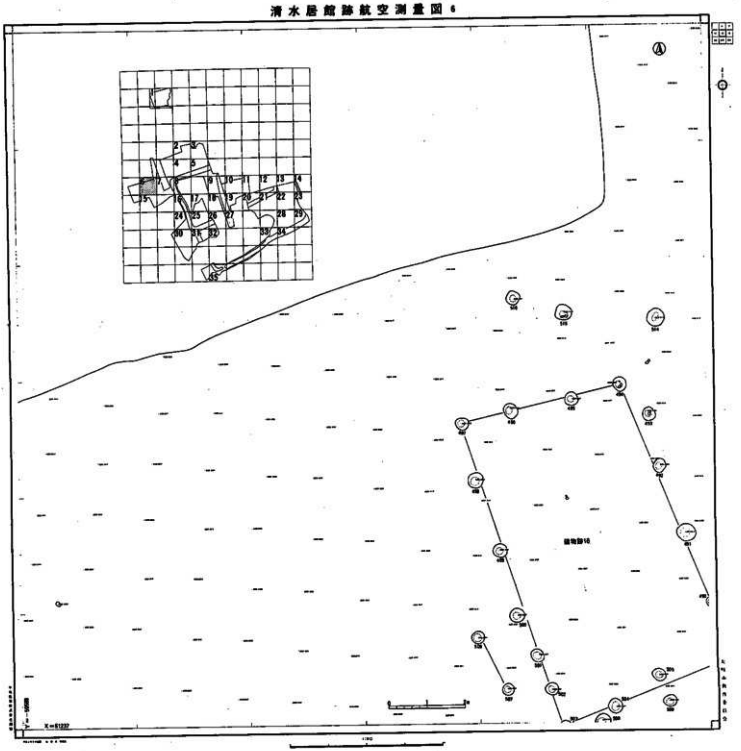


図69　遺構図6（1:100）

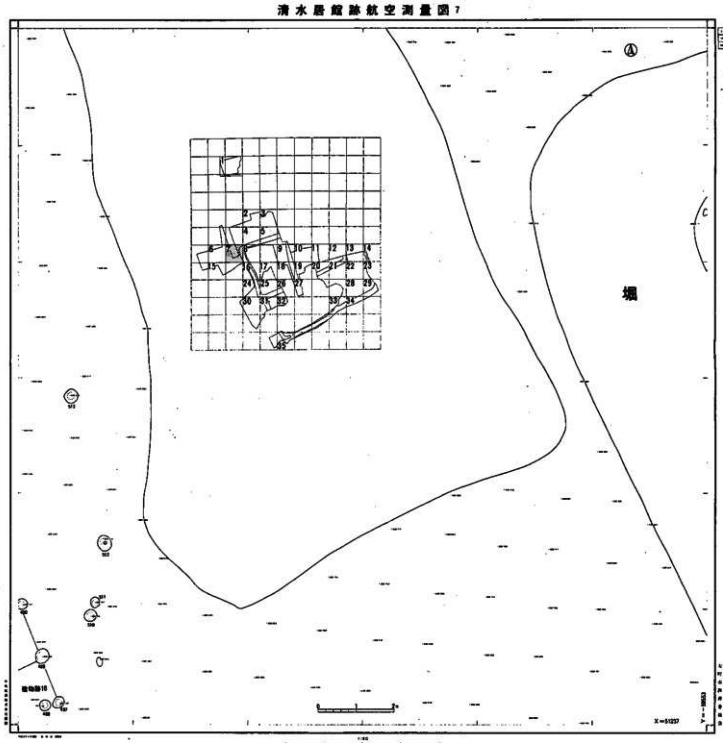


図70　遺構図7（1:100）

図71　遺構図8（1:100）

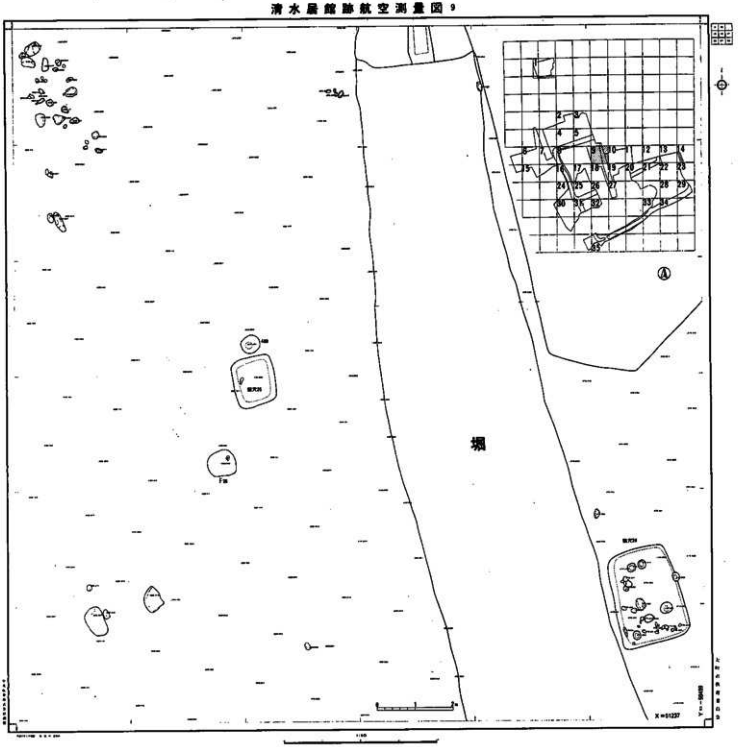


図72　遺構図9（1:100）

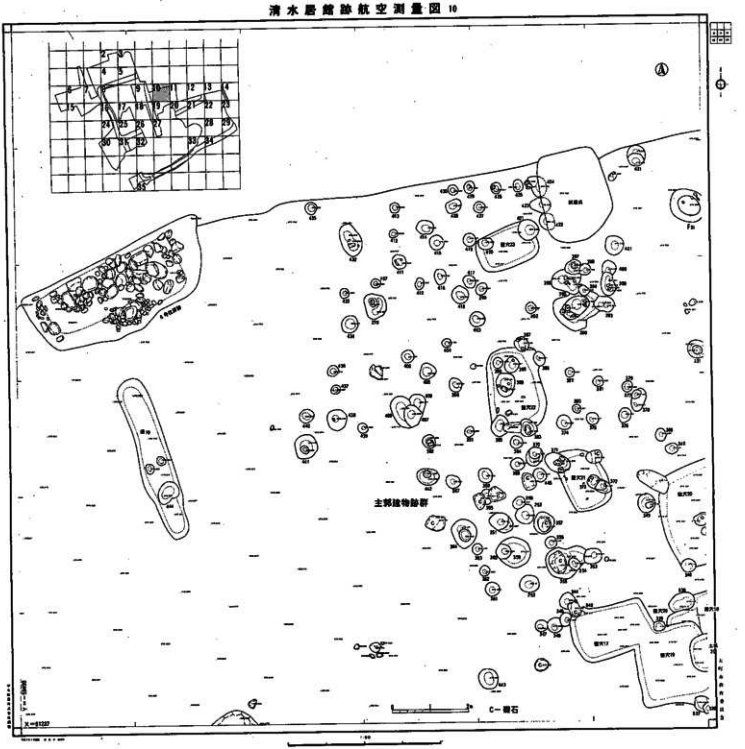


図73　遺構図10（1:100）

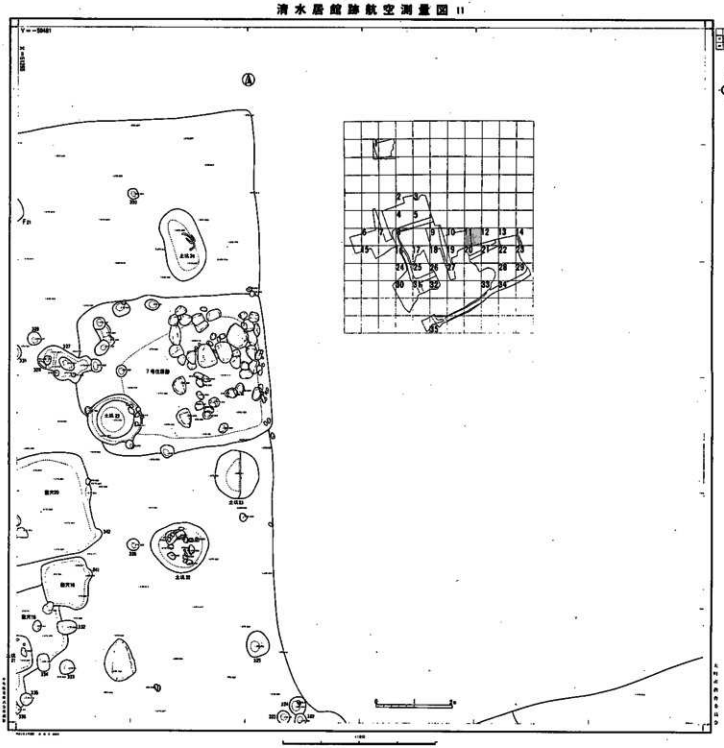


図74　遺構図11（1:100）

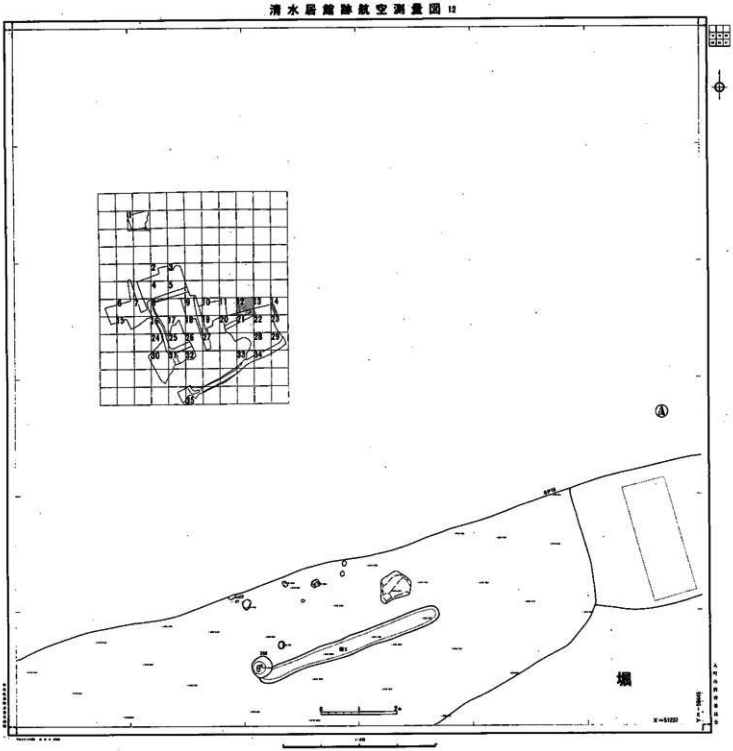


図75　遺構図12（1:100）

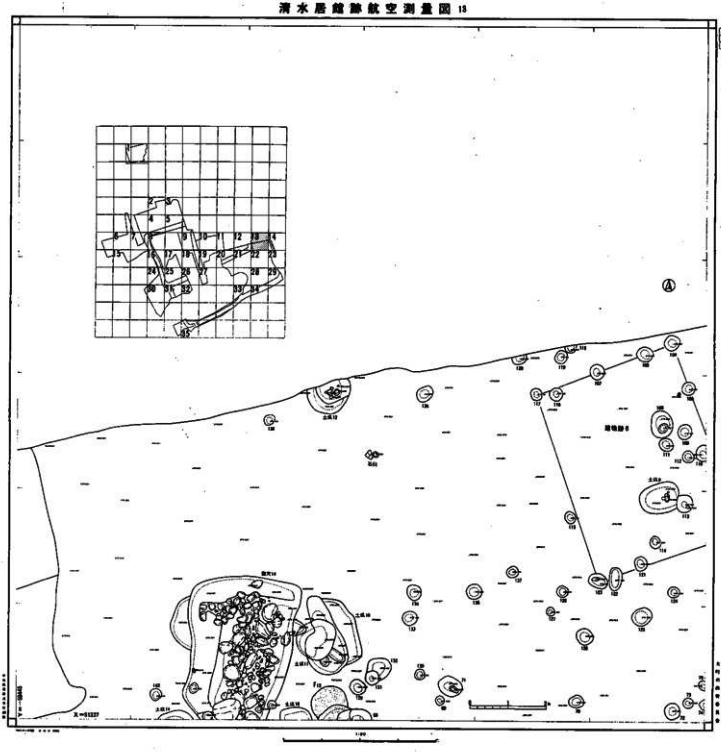


図76　遺構図13（1:100）

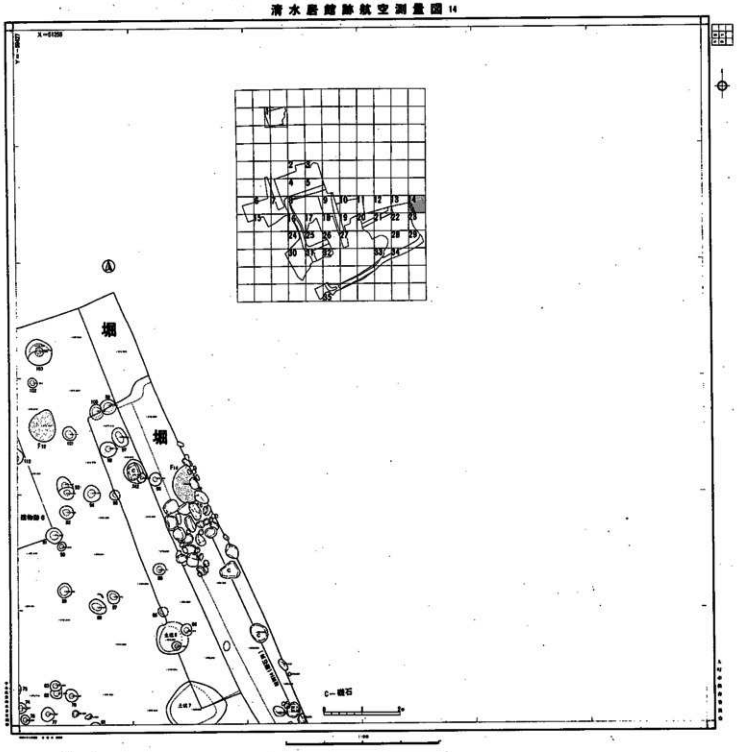


図77　遺構図14（1:100）

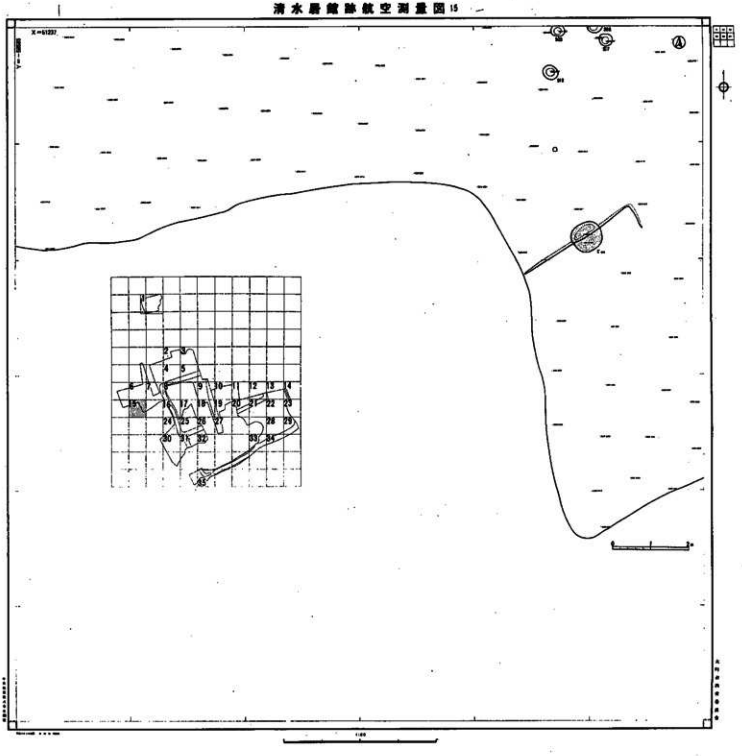


図78　遺構図15（1:100）

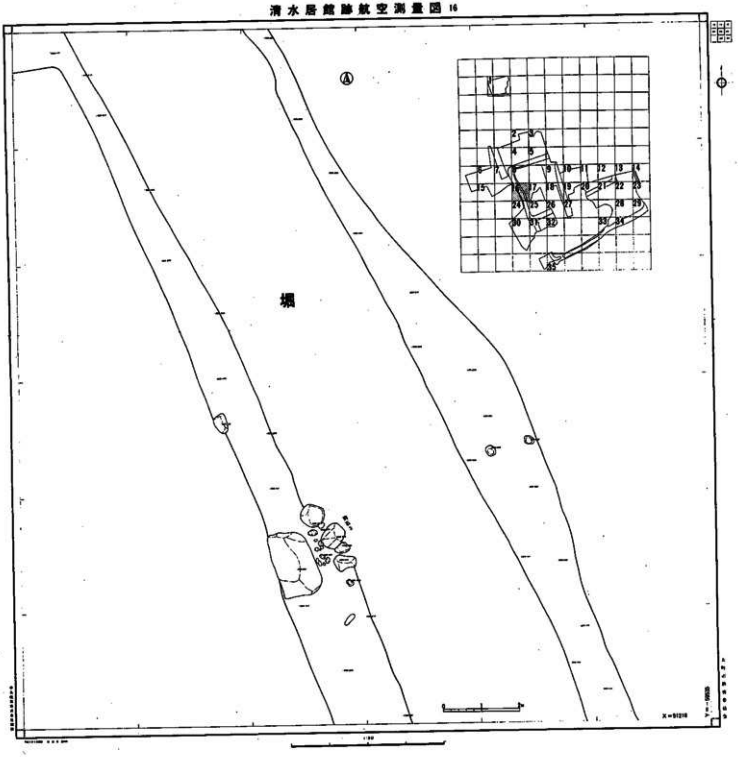


図79　遺構図16（1:100）

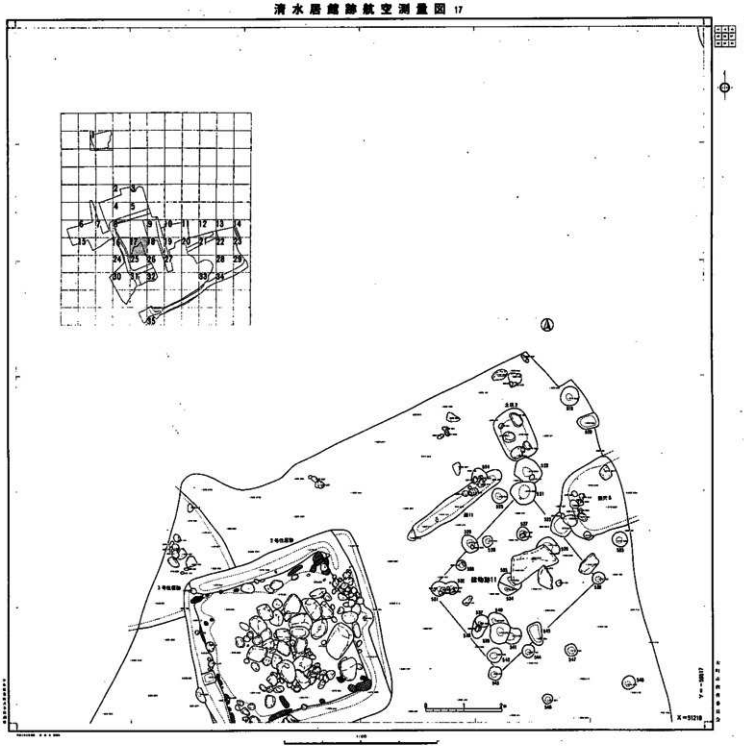


図80　遺構図17（1:100）

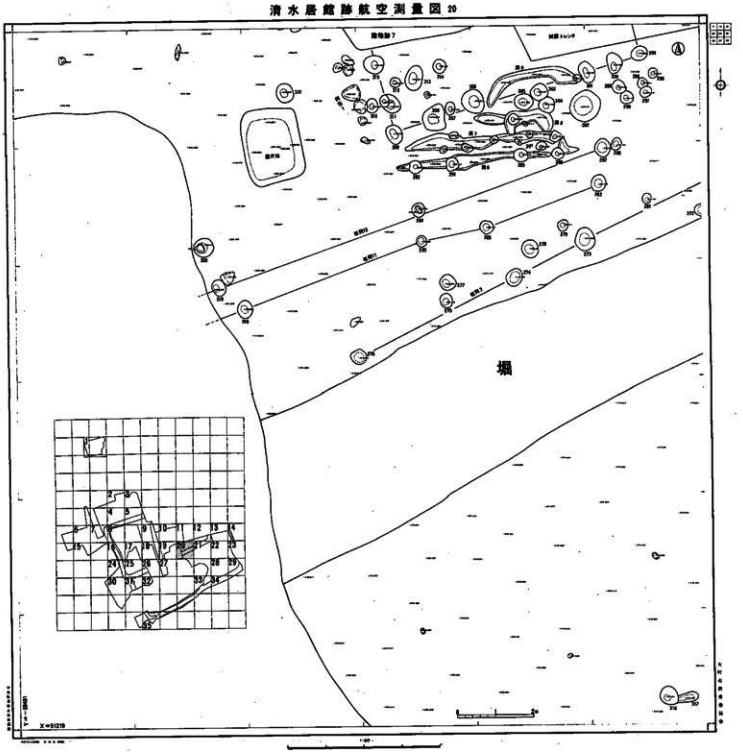


図81　遺構図18（1:100）

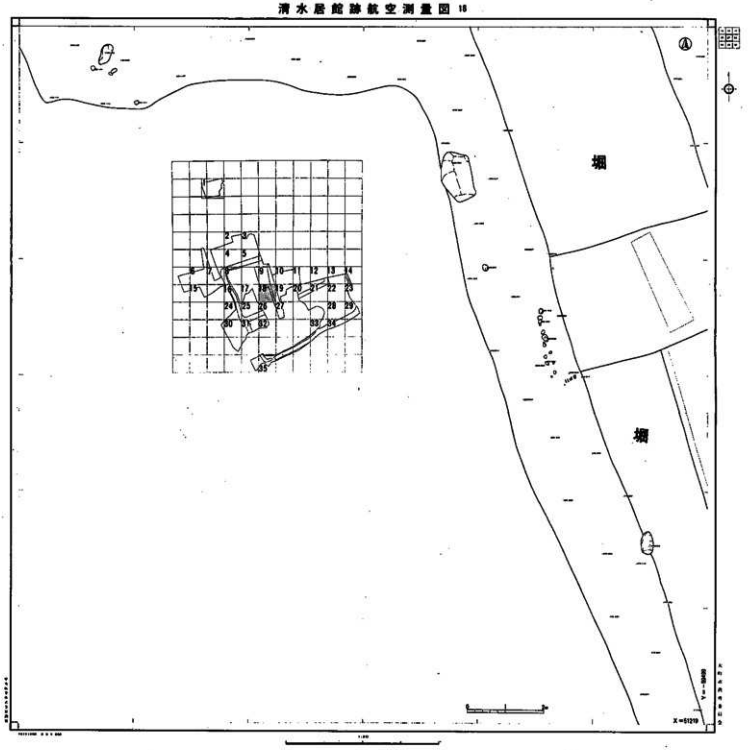


図82　遺構図19（1:100）

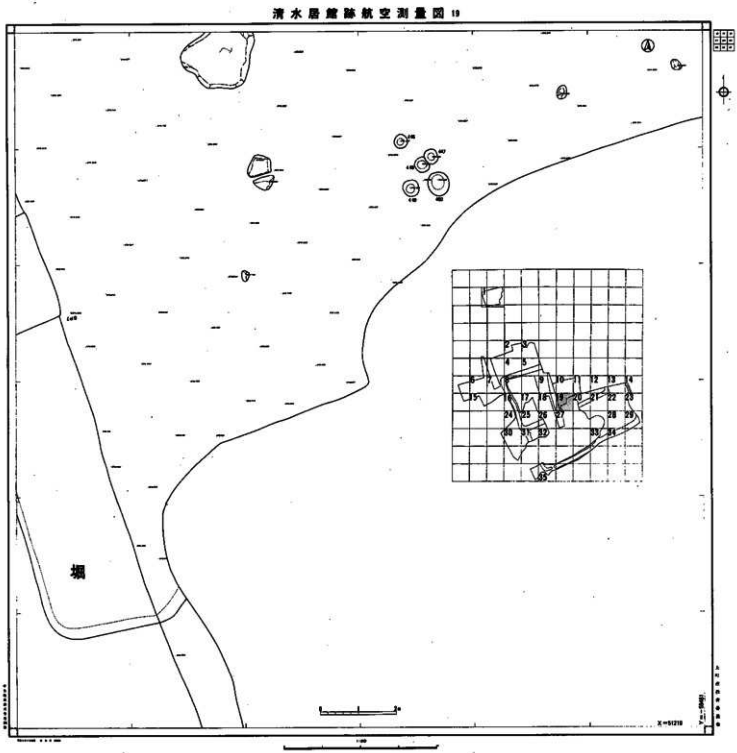
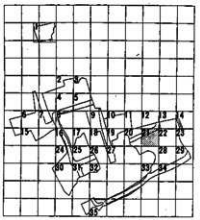


図83　遺構図20（1:100）



清水居館跡航空測量図 21.

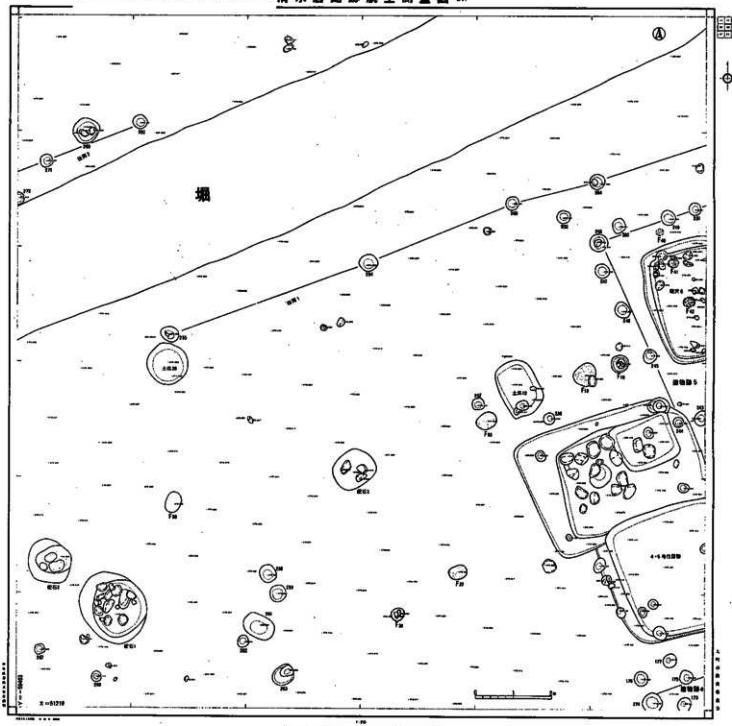
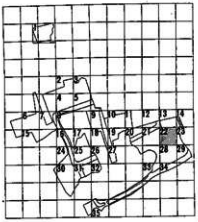


図84　遺構図21（1:100）



清水居館跡航空測量図22

図85　遺構図22（1:100）

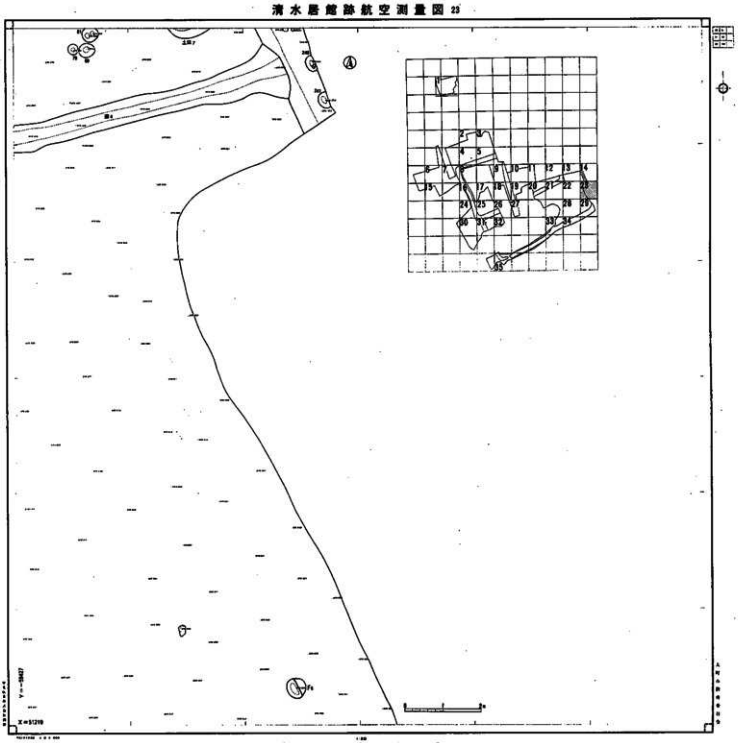


図86　遺構図23（1:100）

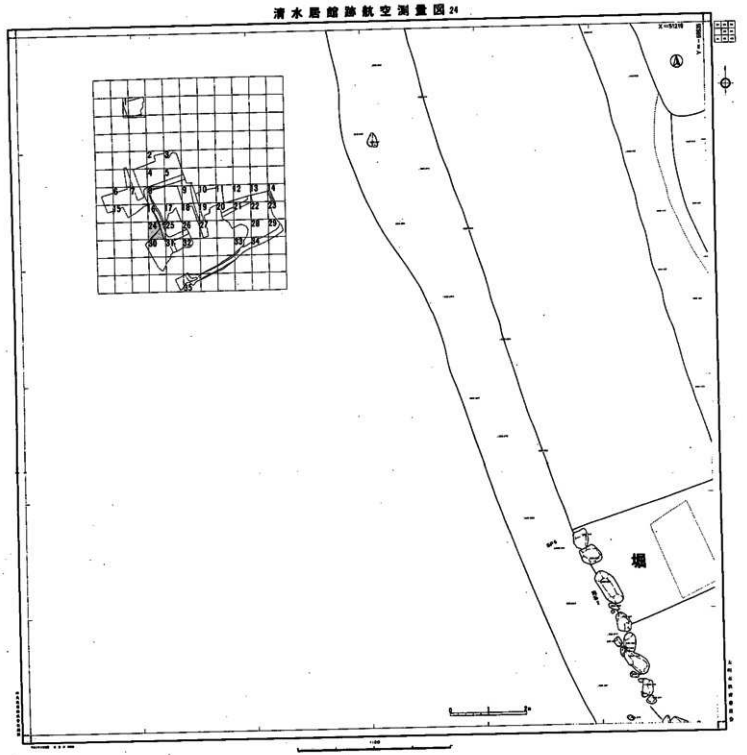
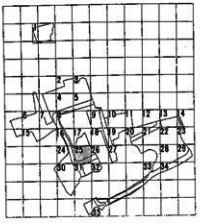


図87　遺構図24（1:100）



清水居館跡航空測量図25

堀

堀

図88　遺構図25（1:100）

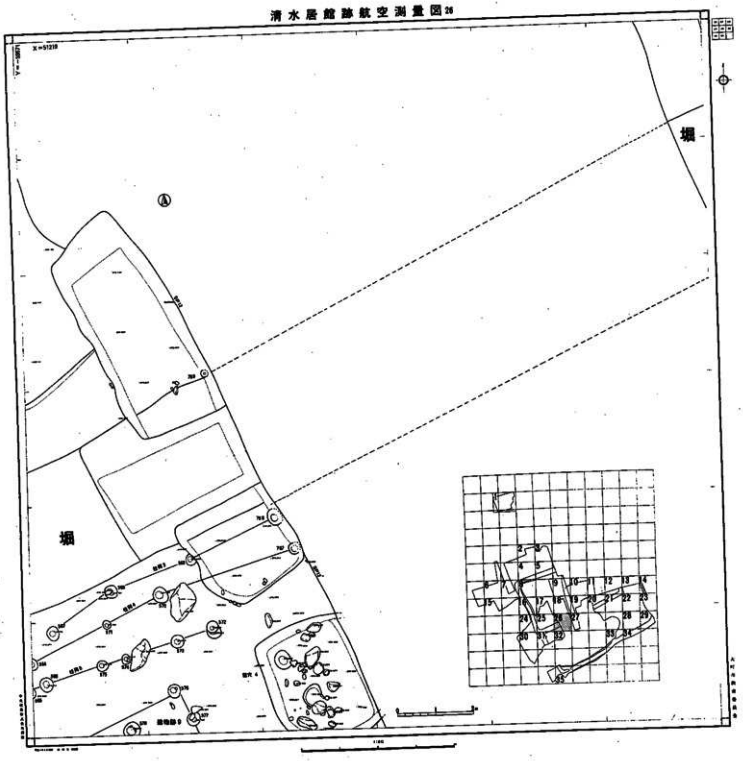


図89　遺構図26（1:100）

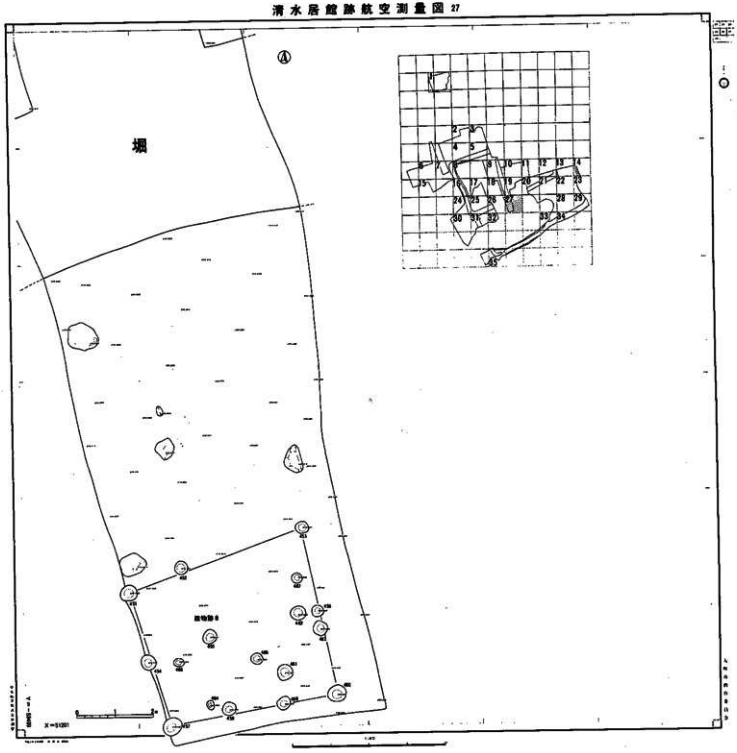


図90　遺構図27（1:100）

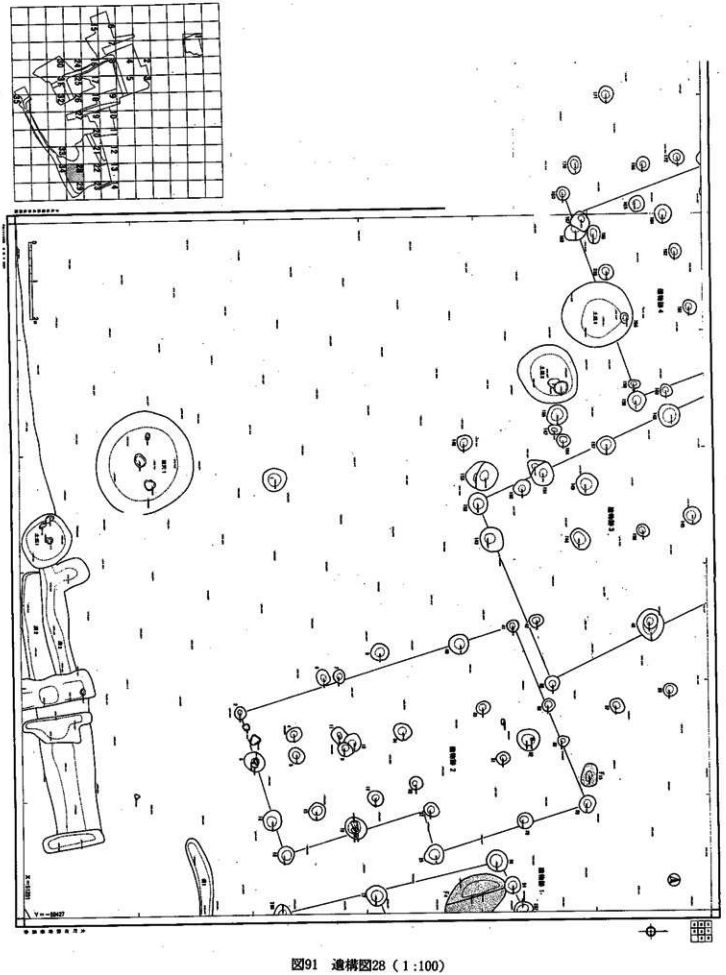


図91　遺構図28（1:100）

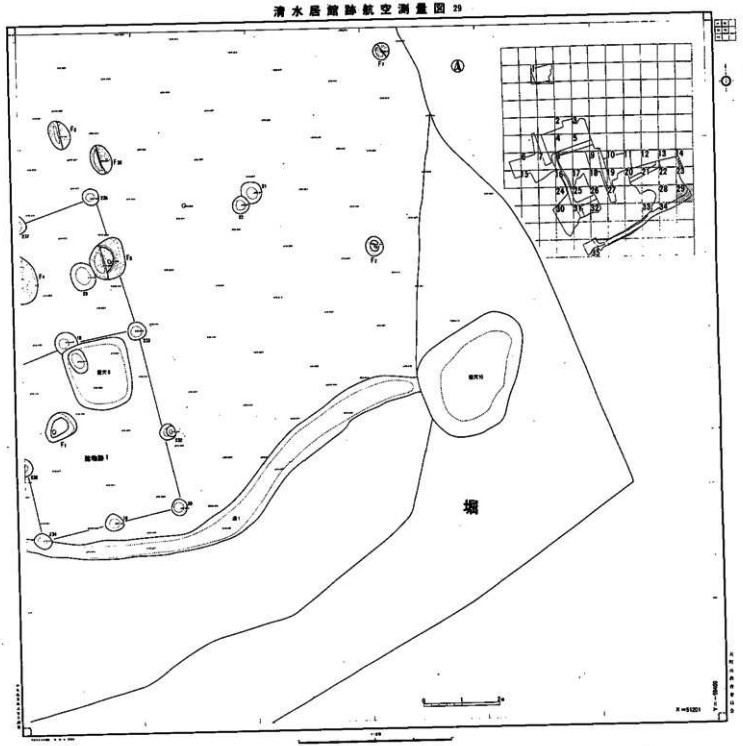
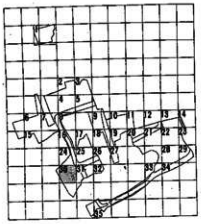


図92　遺構図29（1:100）



清水居館跡航空測量図30

図93　遺構図30（1:100）

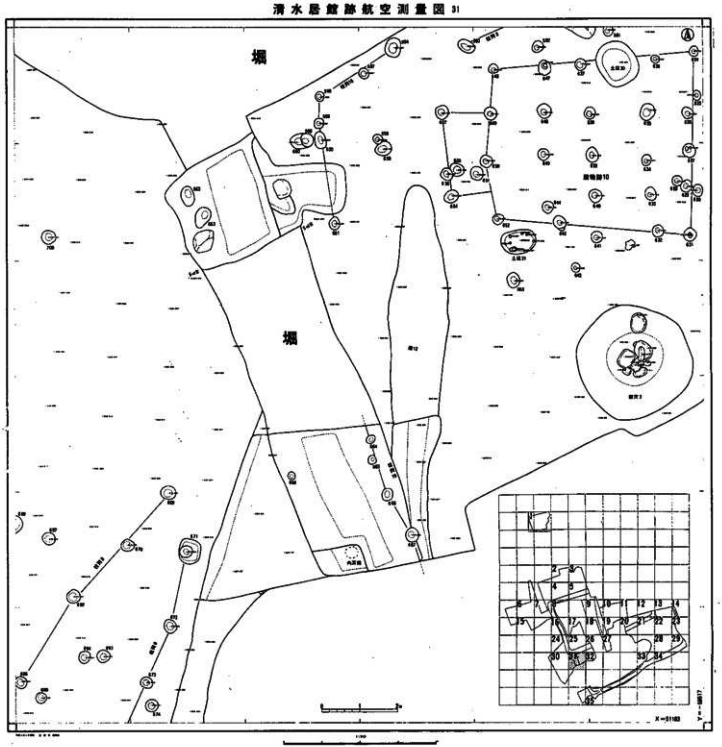


図94　遺構図31（1:100）

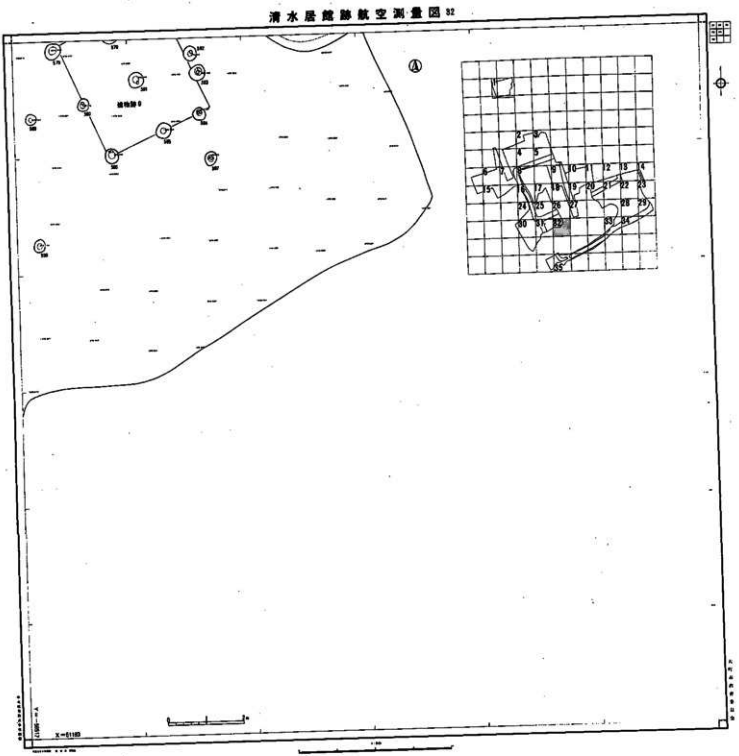


図95　遺構図32（1:100）

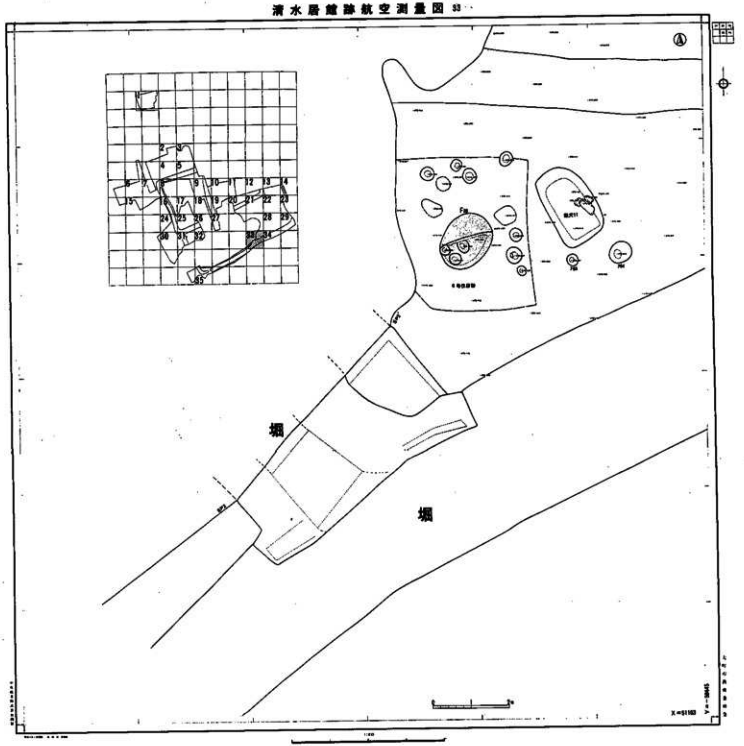


図96　遺構図33（1:100）

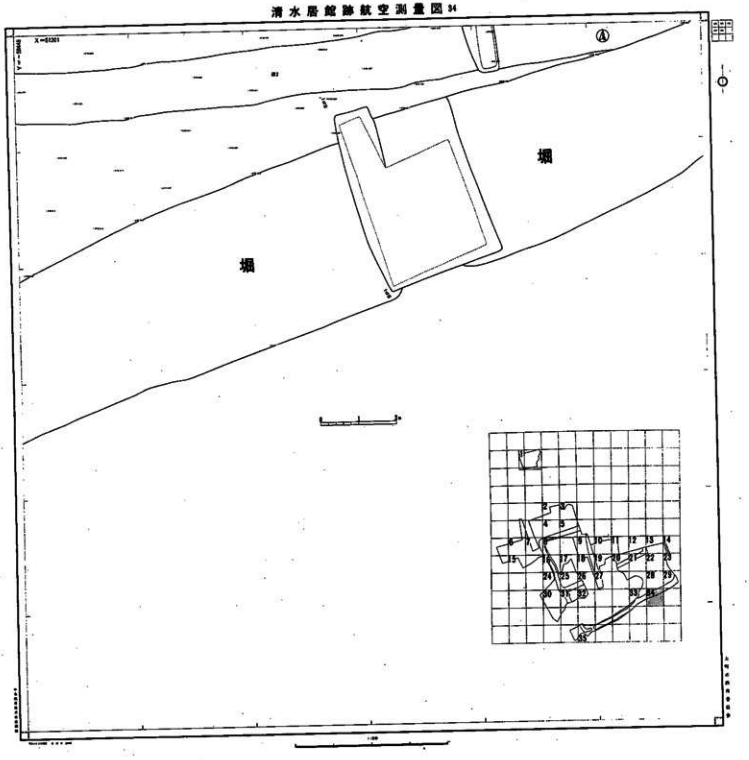


図97　遺構図34（1:100）

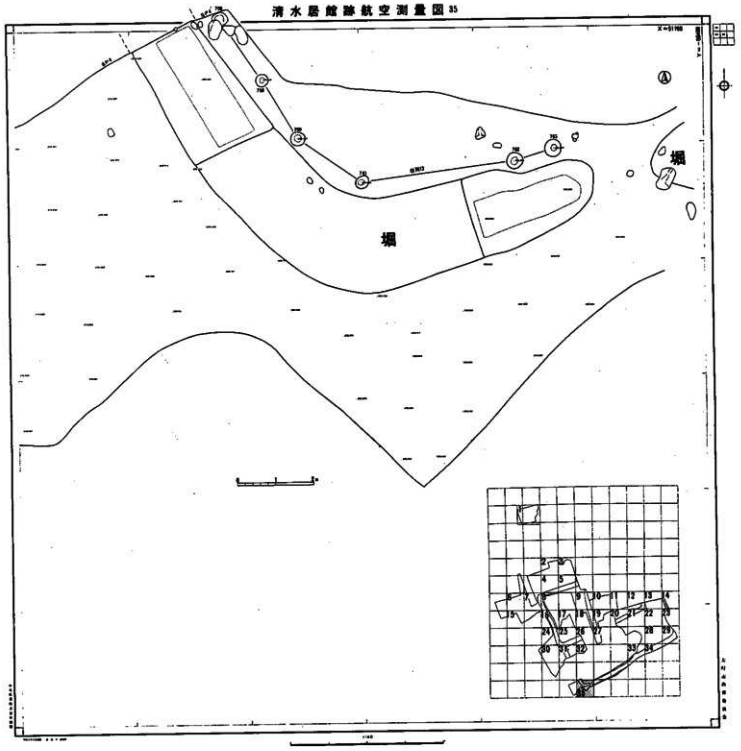


図98　遺構図35（1:100）

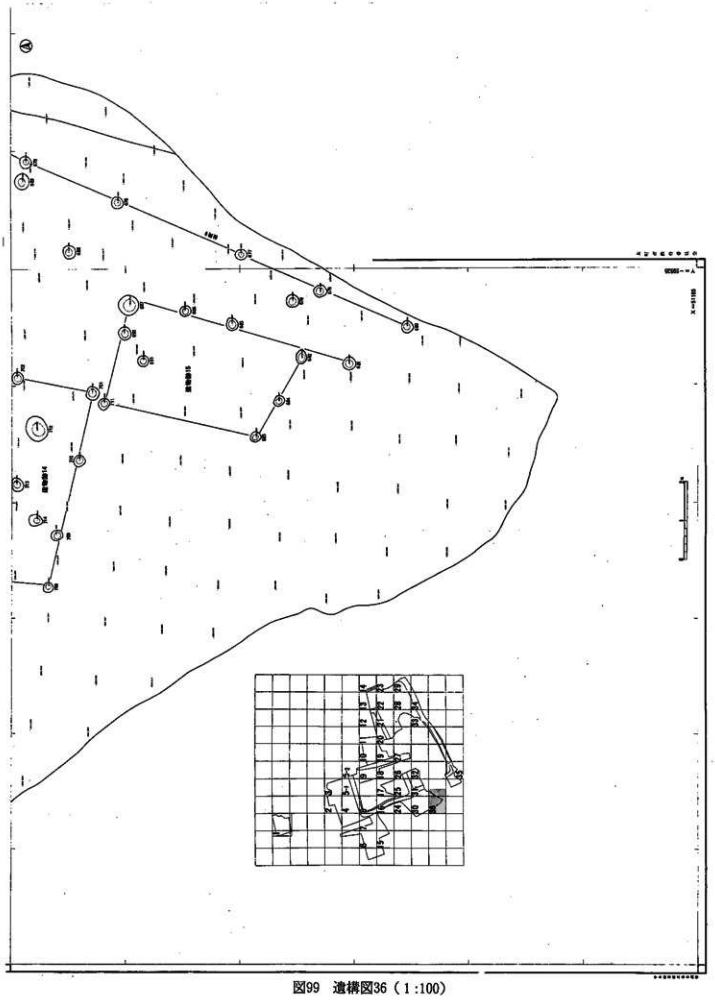


図99　遺構図36（1：100）

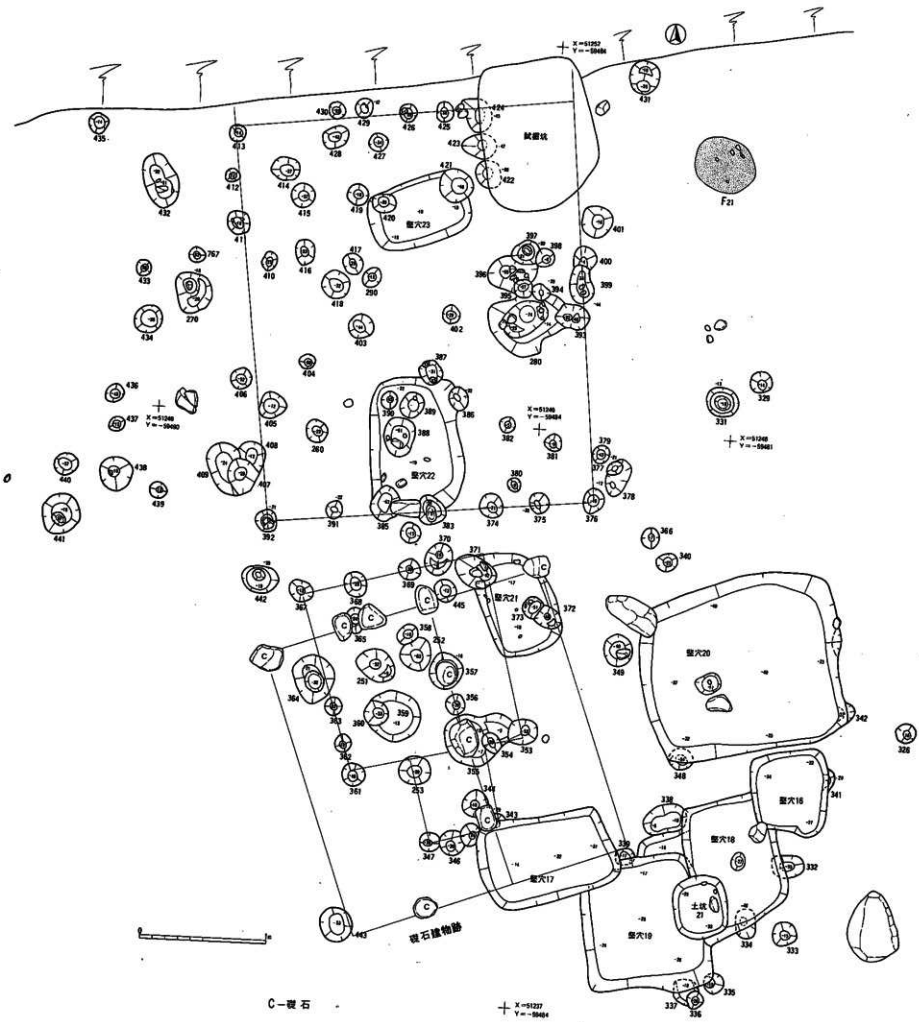


図100　主郭建物跡群、竪穴16～23、土坑等（1～60）＜主郭建物跡群は、礎石建物跡を含め、掘立柱建物跡が最低でも3～4回建て直されたり、増築されたりしていると推定される。＞

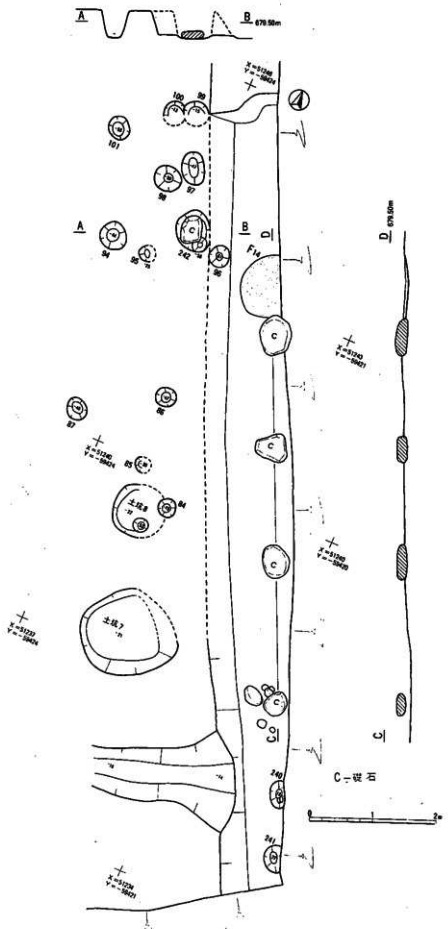


図101　東側外掘内礎石列（柱列15）（1：60）<掘の端平坦な浅い部分に礎石が4ケ並んでいた。>

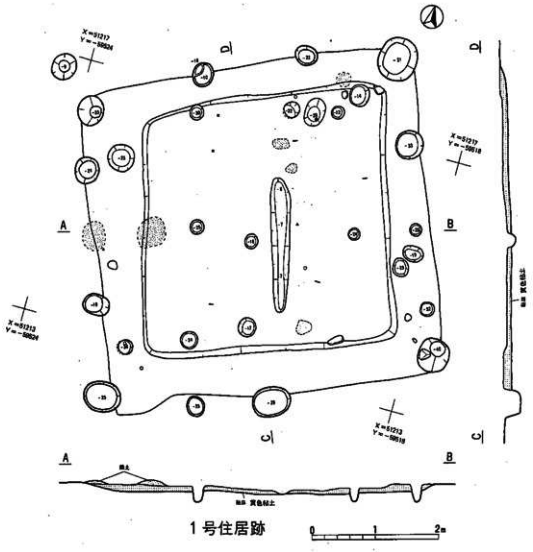


図102　1号住居跡（上）・9号住居跡（下）（1:60）＜黄色ローム土が貼床された平地式である＞

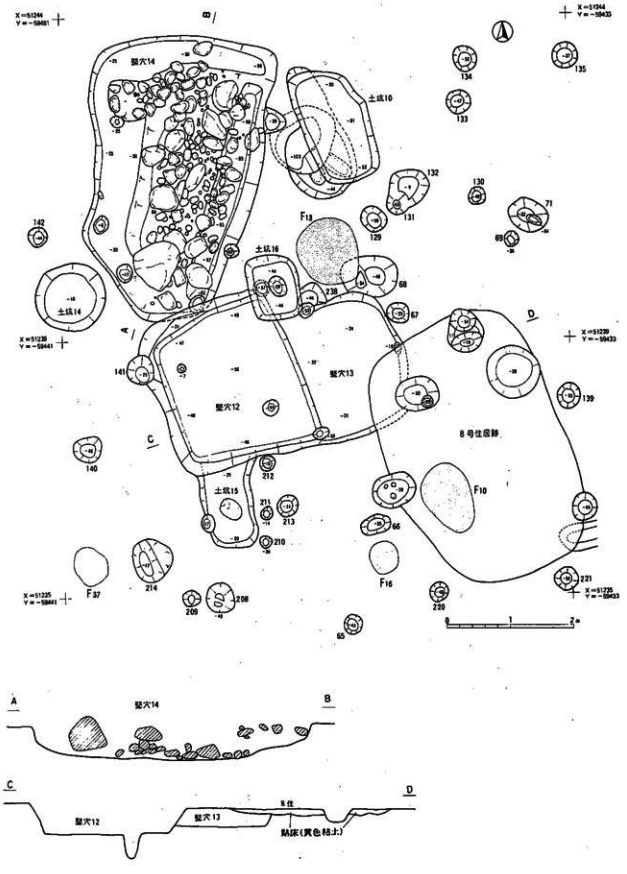


図103　8号住居跡、竪穴12～14周辺（1～60）＜8住も黄色ローム土の貼床である。＞

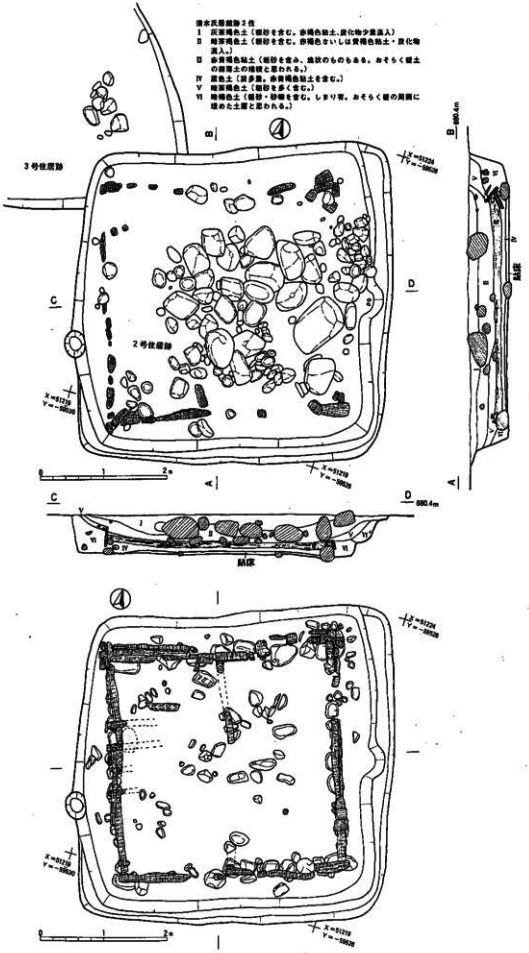
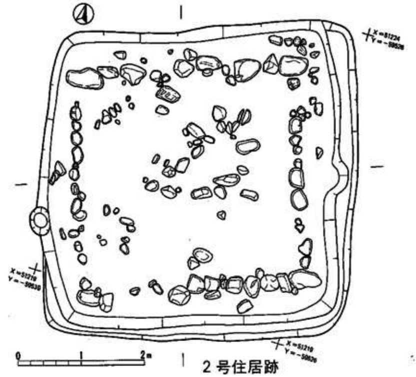
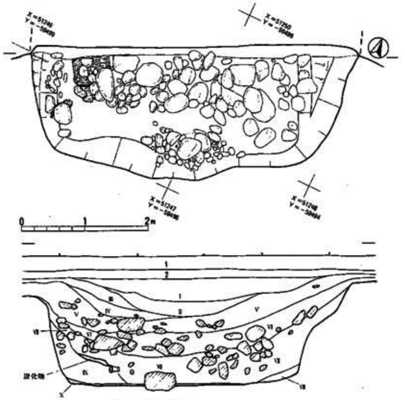


図104　2号住居跡炭化材・礫検出状況（上）炭化材検出状況（下）（1:60）（下図のトーンは炭化米出土地点）



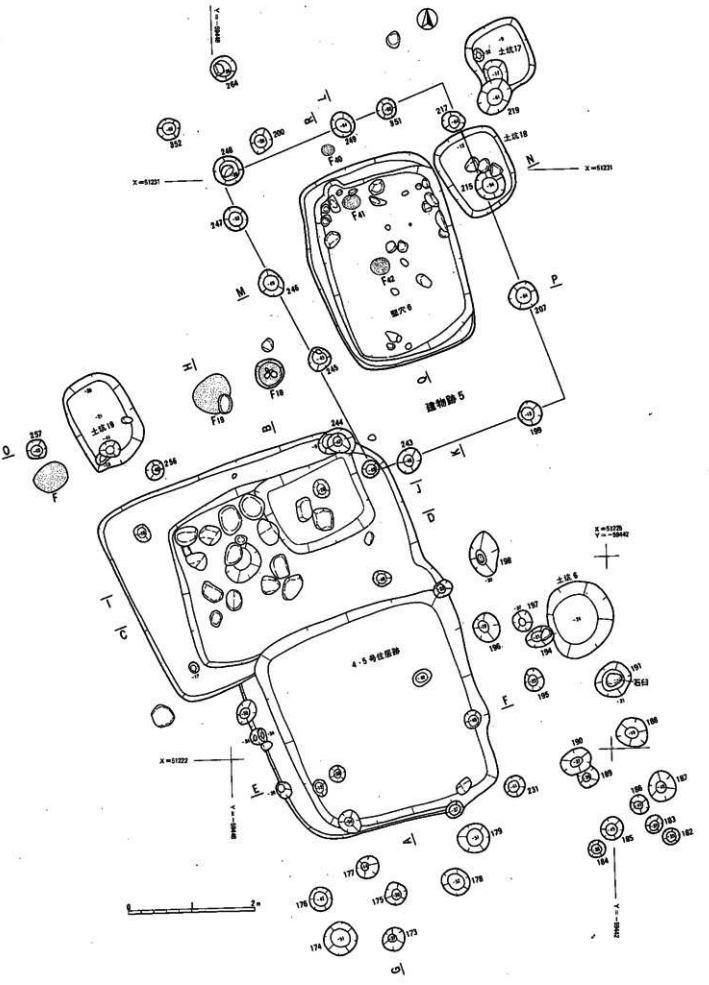
2号住居跡



6号住居跡

1　耕土（暗灰褐色土層）
2　青灰色土層
Ⅰ　青灰褐色土層（2～10㎜大の細砂を多く含む。）
Ⅱ　灰白色細砂層（土分の混入がわずかであり、上半にいくにつれて細砂になる。）
Ⅲ　暗灰緑褐色土層（2～8㎜大の細砂を多量に含む。）
Ⅳ　黄茶褐色土層（1～3㎜ほどの砂利を多量に混入する。）
Ⅴ　灰茶褐色土層（2～5㎜大の細砂を含む。炭化物も少量含む。）
Ⅵ　茶褐色土層（2～5㎜大の細砂が少量見られる。灰黄色ブロックが混入する。）
Ⅶ　灰茶褐色土層（焼土ブロック、炭化物・材を極多量に含む。焼土、焼けた粘土材を含む。古銭を多量に出土）
Ⅷ　暗青灰色粘土
Ⅸ　灰褐色土層（黄褐色ブロック、炭混入）
Ⅹ　黄褐色粘土層（粘床）

図105、2号住居礎石状石列（上）、6号住居跡（下）＜2・6住ともに住居というよりは、蔵という感じで、壁土と思われる粘土塊が出土した。特に2住においてはこの崩落土が厚く堆積し、炭化した基礎の木組みも残っていた。＞


建物跡5
4・5号住居跡
土坑6
土坑17
土坑18
土坑19
F40
F41
Fa
F18
F19
X=51231
X=51222
X=51228
Y=-39442
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z

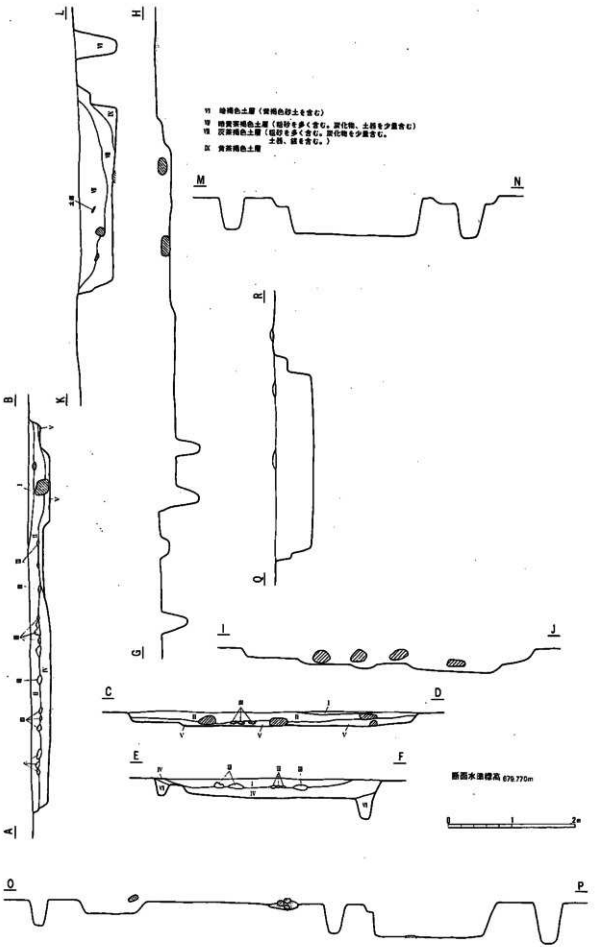
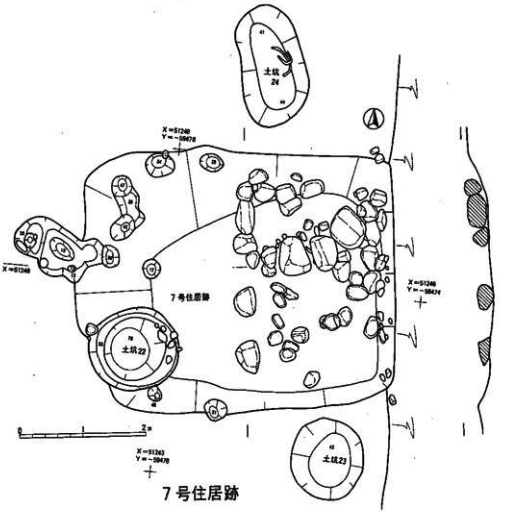


図106　4・5号住居跡・建物跡5・竪穴6（1:60）＜4・5住は当初2軒あるものと思われ二つの番号を付けたが、最終的には一軒となった。北側には方形の石組みが見られる。竪穴6は建物跡5に伴うものである。＞



7号住居跡

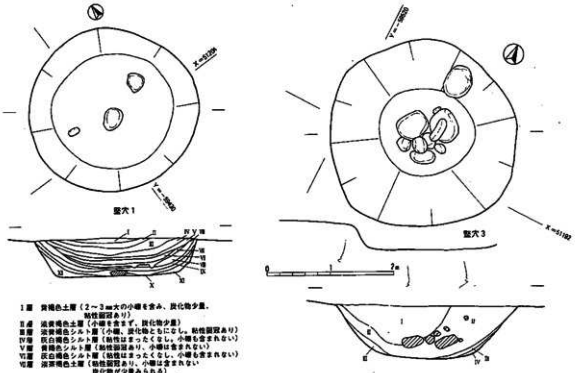


図107　7号住居跡、竪穴1・3（1:60）＜7住にも4・5住同様の方形配石が見られた。竪穴1・3は床面及び周囲が堅く水溜の穴とも思える。＞

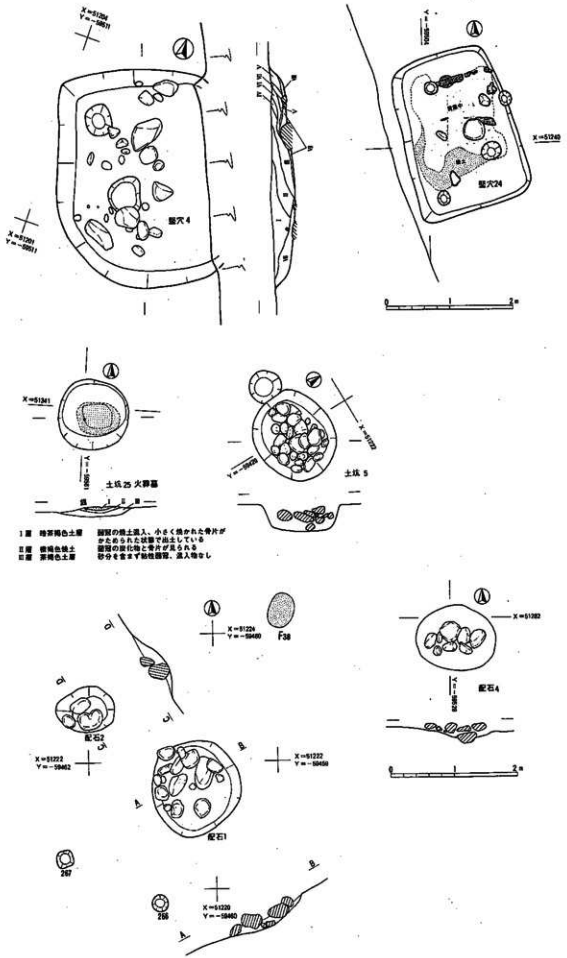
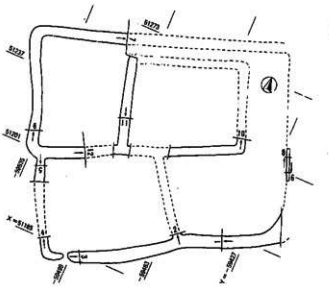
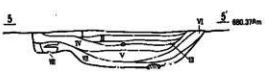


図108　竪穴4・24、土坑5・25（火葬墓）配石1・2・4（1:60）＜配石2の1ケの石は、女陰石的な形をした加工された石である。＞





畝 5

Ⅰ　淡褐色砂質層（表土耕層であり、炭化物が多量見出される。弱粘性）

Ⅱ　灰褐色砂質層（砂質層であり、層上半に粗砂が、下半に細砂が、見られる。Ⅵ層と逆の堆積となる）

Ⅲ　暗黄褐色土層（細砂をほとんどしめず、粘性あり）

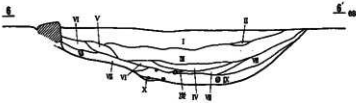
Ⅳ　黄褐色砂質層（層上半に1mほどの細砂が、下半には粗砂が混じめ、堆の周外面に向かうほど、土分が多くなる。）

Ⅴ　暗茶褐色土層（層下半に細砂が多少かたまりとして混入する弱粘性）

Ⅵ　黄茶褐色土層（粘性が強く、ほとんど砂分を含まない。）

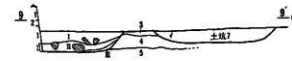
Ⅶ　灰褐色土層（層中に多少の細砂が、混入しているが、明瞭に砂層は、見られない、及び砂分の流動は見られない。）

Ⅷ　灰褐色粗砂層



畝 6

Ⅰ　暗褐色土（粗砂粒を含む、炭化を含む）
Ⅱ　暗褐色土（細砂をやじ混じに含む）
Ⅲ　暗褐色土（粗砂粒を多量に含む、炭を含む）
Ⅳ　褐色土（粗砂粒を含む、やや粘質、炭を多く含む）
Ⅴ　暗茶褐色土（粗砂粒を含む、炭化を含む）
Ⅵ　暗褐色土（Ⅱ層より黒い）（粗砂粒を含む、炭化を含む）
Ⅶ　暗褐色土（Ⅵ層より明るい）（粘性、粗砂粒わずか。混多量に含む）
Ⅷ　褐色土（粗砂粒を多く含む、炭化を含む、やや粘性）
Ⅸ　暗褐色土（粗砂粒、砂粒をわずかに含む。粘性、炭をわずかに含む）
Ⅹ　灰褐色土（粘性）



畝 8・9

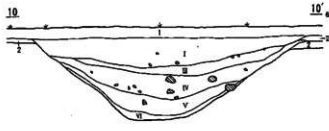
Ⅰ　黄褐色土層（1～7㎝大の細砂が一面に混入。炭化物あり。粘性はとんどなし。）

Ⅱ　白黄褐色シルト層（炭化物混入。）

Ⅲ　暗茶褐色土層（粘性弱質）

Ⅳ　暗褐色土層（土坑7埋土、炭化物少量、粗砂が少量混入。）

1　表土（暗灰褐色土）
2　灰褐色土
3　暗茶褐色土
4　灰黒色土層（全面にわたって5㎝～2㎝大の粗砂混入。）
5　黄褐色土層（全面にわたり1～6㎝大の砂礫混入。）

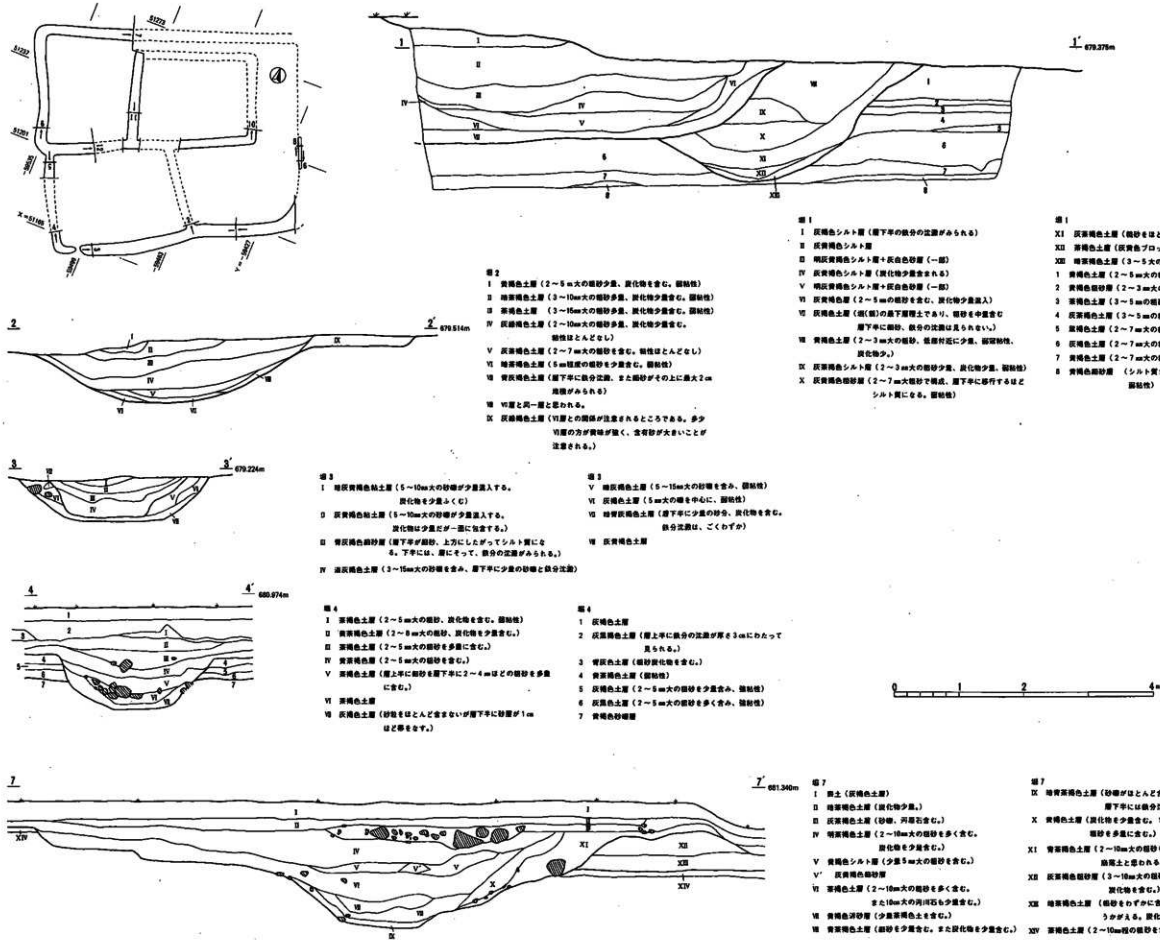


畝 10

1　耕作土層（層下半に砂分）
2　暗灰茶褐色土層
Ⅰ　茶褐色土層（2～5㎝大の粗砂、炭化物を含む。弱粘性）
Ⅱ　灰褐色土層
Ⅲ　灰褐色土層（2～5㎝大の粗砂多量炭化物を少量含む。弱粘性）
Ⅳ　青灰褐色土層（層一面に厚く砂分の流動が見られる。また、炭化物、土器が出土している。強粘性）
Ⅴ　灰褐色土層（1～2㎝大の粗砂を部分混入する。弱粘性）
Ⅵ　暗青褐色土層（上部に1mほどの細砂層が見られる。）

0　1　2　4m

図110　堀土層断面図（2）（1:60）



層1
Ⅰ　灰褐色シルト層（層下半の鉄分の沈澱がみられる）
Ⅱ　灰黄褐色シルト層
Ⅲ　明灰黄褐色シルト層＋灰色砂層（一部）
Ⅳ　灰黄褐色シルト層（炭化物少量含まれる）
Ⅴ　明灰黄褐色シルト層＋灰色砂層（一部）
Ⅵ　灰黄褐色層（２～５mの細砂を含む。炭化物少量混入）
Ⅶ　灰褐色土層（細(極細)の層下層理土であり、細砂を中量ないし層下半に細砂、鉄分の沈澱は見られない。）
Ⅷ　黄褐色土層（２～３mの細砂、低部付近に少量、細礫物性、炭化物少。）
Ⅸ　灰茶褐色シルト層（２～３mの細砂少量、炭化物少量、弱粘性）
Ⅹ　灰黄褐色細砂層（２～７m大粒砂で構成、層下半に移行するほどシルト質になる。弱粘性）

層1
ⅩⅠ　灰茶褐色土層（細砂をほとんど含まず、弱粘性）
ⅩⅡ　茶褐色土層（灰黄色ブロックを混入する。弱粘性）
ⅩⅢ　暗茶褐色土層（３～５大の細砂を含む。弱粘性）
1　黄褐色土層（２～５m大の細砂を含む。弱粘性）
2　黄褐色細砂層（２～３m大の細砂を中心に構成される。）
3　茶褐色土層（３～５mの細砂を少量含む。弱粘性）
4　灰茶褐色土層（３～５mの細砂を少量、炭化物を含む。弱粘性）
5　灰褐色土層（２～７m大の細砂を少量含む。やや弱粘性）
6　灰褐色土層（２～７m大の細砂を多量に含む。弱粘性）
7　黄褐色土層（２～７m大の細砂を多量に含む。弱粘性）
8　黄褐色細砂層　（シルト質まじりであり、細砂は含まれない。弱粘性）

層2
Ⅰ　黄褐色土層（２～５m大の細砂少量、炭化物を含む。弱粘性）
Ⅱ　暗茶褐色土層（３～10m大の細砂多量、炭化物少量含む。弱粘性）
Ⅲ　茶褐色土層　（３～15m大の細砂多量、炭化物少量含む。弱粘性）
Ⅳ　灰褐色土層（２～10m大の細砂多量、炭化物少量含む。
弱性はとんどない）
Ⅴ　灰茶褐色土層（２～７m大の細砂を含む。弱性はとんどない）
Ⅵ　暗茶褐色土層（５m程度の細砂を少量含む。弱粘性）
Ⅶ　青灰褐色土層（層下半に鉄分沈澱、また細砂がその上に最大２cm堆積がみられる）
Ⅷ　Ⅵ層と同一層と思われる。
Ⅸ　灰褐褐色土層（Ⅵ層との関係が注意されるところである。多少Ⅵ層の方が青味が強く、生育砂が大きいことが注意される。）

層3
Ⅰ　暗灰青褐色粘土層（５～10m大の砂礫が少量混入する。
炭化物を少量ふくむ）
Ⅱ　灰黄褐色粘土層（５～10m大の砂礫が少量混入する。
炭化物は少量ながら一面に包含する。）
Ⅲ　青灰褐色細砂層（層下半が細砂、上方にしたがってシルト質になる。下半には、層にそって、鉄分の沈澱がみられる。）
Ⅳ　淡灰褐色土層（３～15m大の砂礫を含み、層下半に少量の砂礫と鉄分沈澱）

層3
Ⅴ　暗灰褐色土層（５～15m大の砂礫を含み、弱粘性）
Ⅵ　灰褐色土層（５m大の礫を中心に、弱粘性）
Ⅶ　暗青灰褐色土層（層下半に少量の砂分、炭化物を含む。
鉄分沈澱は、ごくわずか）
Ⅷ　灰黄褐色土層

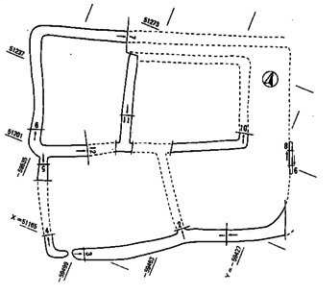
層4
Ⅰ　茶褐色土層（２～５m大の細砂、炭化物を含む。弱粘性）
Ⅱ　青茶褐色土層（２～８m大の細砂、炭化物を少量含む。）
Ⅲ　茶褐色土層（２～５m大の細砂を多量に含む。）
Ⅳ　青茶褐色層（２～５m大の細砂を含む。）
Ⅴ　茶褐色土層（層上半に細砂を層下半に２～４mほどの細砂を多量に含む。）
Ⅵ　茶褐色土層
Ⅶ　灰褐色土層（砂粒をほとんど含まないが層下半に砂層が１cmほど帯をなす。）

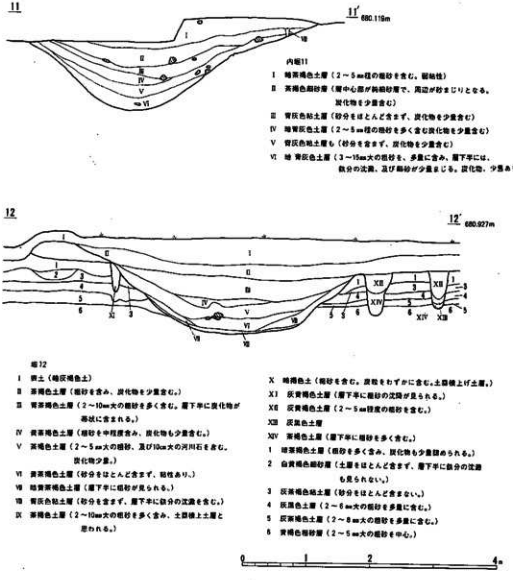
層4
1　灰褐色土層
2　灰黒褐色土層（層上半に鉄分の沈澱が厚さ３cmにわたって見られる。）
3　青灰色土層（細砂炭化物を含む。）
4　青茶褐色土層（細粘物）
5　灰褐色土層（２～５m大の細砂を少量含み、強粘性）
6　灰黒色土層（２～５m大の細砂を多く含み、強粘性）
7　青褐色砂礫層

層7
Ⅰ　表土（灰褐色土層）
Ⅱ　暗茶褐色土層（炭化物少量。）
Ⅲ　灰茶褐色土層（砂礫、河原石含む。）
Ⅳ　明茶褐色土層（２～10m大の細砂を多く含む。
炭化物を少量含む。）
Ⅴ　青褐色シルト層（少量５m大の細砂を含む。）
Ⅴ'　灰青褐色細砂層
Ⅵ　茶褐色土層（２～10m大の細砂を多く含む。
また10m大の河川石も少量含む。）
Ⅶ　青褐色泥砂層（少量茶褐色土を含む。）
Ⅷ　青茶褐色土層（細砂を少量含む。また炭化物を少量含む。）

層7
Ⅸ　暗青茶褐色土層（砂礫がほとんど含まない。同土層である。
層下半には鉄分沈澱、及び粘粒は存在しない。）
Ⅹ　青褐色土層（炭化物を少量含む。１～10m大の
細砂を多量に含む。）
ⅩⅠ　青茶褐色土層（２～10m大の細砂を多量に含む。土器上部の
包蔵土と言われる。）
ⅩⅡ　灰茶褐色細砂層（３～10m大の細砂に、茶褐色土が含まれ、
炭化物を含む。）
ⅩⅢ　暗茶褐色土層　（細砂をわずかに含み、広範の層土混が
うかがえる。炭化物を含む。）
ⅩⅣ　茶褐色土層（２～10m程の細砂を含む。）

図109　堀土層断面図（１）（1:60）＜7の右側には土塁と思われる痕跡が残り、水田の土手となっていた。＞





内堀11

I　暗黒褐色土層（２～５㎝程の粗砂を含む。凝結性）

II　黄褐色細砂層（層中心部が褐細砂層で、周辺が砂まじりとなる。炭化物を少量含む）

III　青灰色粘土層（砂分をほとんど含まず、炭化物を少量含む）

IV　暗青灰色土層（２～５㎝程の粗砂を多く含む炭化物を少量含む）

V　青灰色粘土層も（砂分を含まず、炭化物を少量含む）

VI　暗 青灰色土層（３～15㎝大の粗砂を、多量に含み、層下半には、砂分の沈着、及び細砂が少量まじる。炭化物、少量あり。）

堀12

I　表土（暗灰褐色土）

II　茶褐色土層（粗砂を含み、炭化物を少量含む。）

III　茶褐色土層（２～10㎝大の粗砂を多く含む。層下半に炭化物が局部に含まれる。）

IV　青茶褐色土層（細砂を中程度含み、炭化物も少量含む。）

V　茶褐色土層（２～５㎝大の礫砂、及び10㎝大の河川石をまむ。炭化物少量。）

VI　茶茶褐色土層（砂分をほとんど含まず、粘性あり。）

VII　暗青茶褐色土層（層下半に粗砂が見られる。）

VIII　青灰色粘土層（砂分を含まず、層下半に砂分の沈着を含む。）

IX　茶褐色土層（２～10㎝大の粗砂を多く含み、土器焼土と思われる。）

X　暗褐色土（粗砂を含む。炭粒をわずかに含む。土器焼土が土層。）

XI　灰青褐色土層（層下半に粗砂の沈積が見られる。）

XII　灰青褐色土層（２～５㎜程度の粗砂を含む。）

XIII　灰黒色土層

XIV　茶褐色土層（層下半に粗砂を多く含む。）

1　暗茶褐色土層（粗砂を多く含み、炭化物も少量混められる。）

2　白黄褐色細砂層（土層をほとんど含まず、層下半に砂分の沈着も見られない。）

3　灰茶褐色粘土層（砂分をほとんど含まない。）

4　灰黒色土層（２～６㎝大の粗砂を多量に含む。）

5　灰茶褐色土層（２～８㎝大の粗砂を多量に含む。）

6　青褐色粗砂層（２～５㎝大の粗砂を中心。）

図111　堀土層断面図（３）（1:60）＜12の左側に土塁と思われる痕跡が残り、水田の土手となっていた。＞

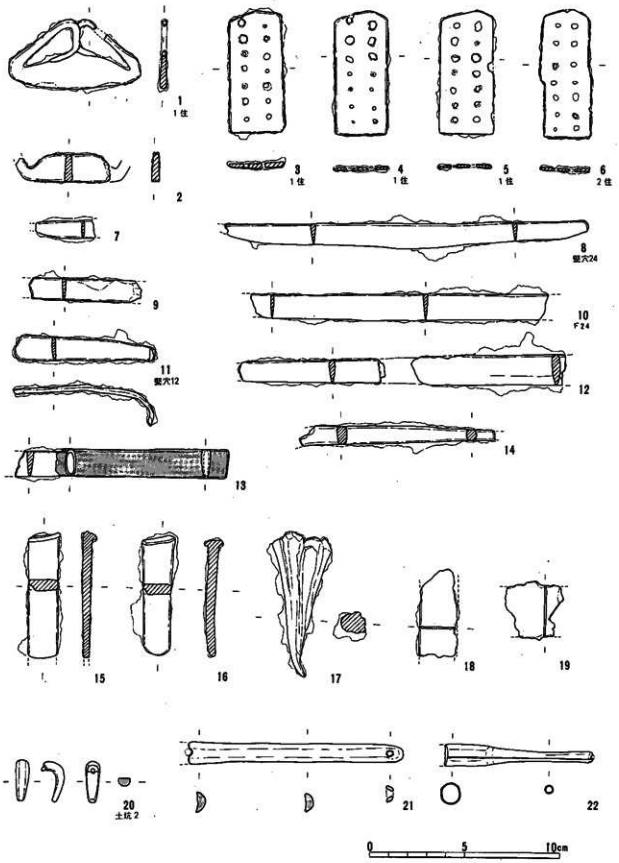


図112　金属製品（1：2）＜1～19は鉄製品。20～22は青銅製品。13には青銅が巻かれている（トーン部分。）金属製品で最も多数であったのは鉄釘であったが今回は割愛した。＞

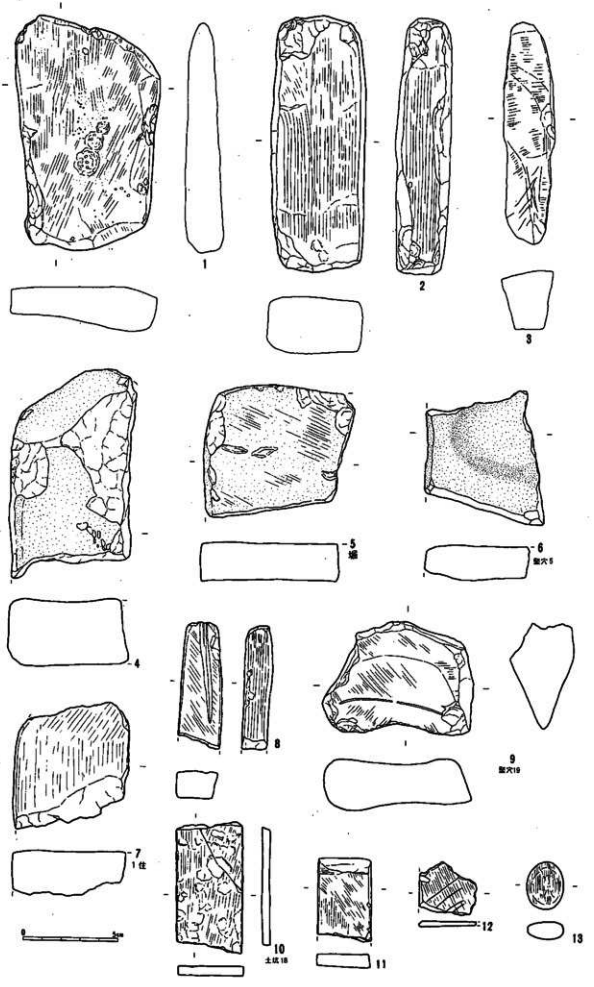


図113　砥石（1；2）

清水氏居館跡出土銭（＜　＞の数字は図中の番号、（　）内は時代と初鋳年を示す。）

開元通宝（唐・武徳四年（621））8枚＜1～8＞、至道元宝（北宋・至道元年（995））1枚＜9＞、祥符元宝（北宋・大中祥符元年（1008）2枚＜10＞、祥符通宝（北宋・大中祥符元年（1008））2枚＜11・12＞、天禧通宝（北宋・天禧年間（1017～））1枚＜13＞天聖元宝（北宋・仁宋天聖元年（1023））4枚＜14・15＞、皇宋通宝（北宋・元宝二年（1039））8枚＜16～22＞、景徳元宝（北宋・景徳元年（1044））2枚＜23・24＞、至和元宝（北宋・至和元年（1054））1枚＜25＞、至和通宝（北宋・至和元年（1054））1枚＜26＞、嘉祐元宝（北宋・嘉祐元年（1056））2枚＜27・28＞、治平元宝（北宋・治平元年（1064））3枚＜29～31＞、熙寧元宝（北宋・神宋熙寧元年（1068））9枚＜32～36＞、元豊通宝（北宋・元豊元年（1078））10枚＜37～43＞、元祐通宝（北宋・哲宗元祐元年（1086））2枚＜44・45＞、紹聖元宝（北宋・紹聖元年（1094））3枚＜46・47＞元符通宝（北宋・元符元年（1098））2枚＜48＞、聖宋元宝（北宋・建中靖国元年（1101））1枚＜49＞、大観通宝（北宋・大観元年（1107））1枚、政和通宝（北宋・政和元年（1111））1枚＜50＞、重和通宝（北宋・重和元年（1118））1枚＜51＞、皇宋元宝（南宋・宝祐元年（1253））2枚＜52＞、洪武通宝（明・太祖洪武元年（1368））4枚＜53～55＞、永楽通宝（明・成祖永楽六年（1408））10枚＜56～65＞、不明33枚、寛永通宝（国産、江戸時代）4枚＜66～67＞、合計118枚が出土した。

遺構別に見ると、1号住居跡で至和通宝・嘉祐通宝・元豊通宝・永楽通宝各1枚＜25・28・42・62＞。2号住居跡で永楽通宝1枚＜63＞。4・5号住居跡で皇宋通宝1枚＜21＞。6号住居跡では、全体の半数以上の74枚が出土し、開元通宝5枚＜1～5＞、至道元宝1枚＜9＞。祥符元豊2枚＜10＞、祥符通宝1枚＜11＞、天聖元宝4枚＜14・15＞、皇宋通宝6枚＜16～20＞、景徳元宝1枚＜23＞、至和通宝1枚＜26＞、嘉祐元宝1枚＜27＞、治平元宝3枚＜29～31＞、熙寧元宝7枚＜32～35＞、元豊通宝8枚＜37～41＞、元祐通宝1枚＜44＞、紹聖元宝3枚＜46・47＞、元符通宝2枚＜48＞、聖宋元宝1枚＜49＞、大観通宝1枚、洪武通宝2枚＜53＞、永楽通宝5枚＜56～60＞、不明19枚であった。竪穴5では皇宋通宝1枚＜52＞、竪穴6では、開元通宝・祥符通宝・熙寧元宝・皇宋通宝・洪武通宝・永楽通宝が各1枚づつ計7枚＜6・12・36・43・54・61＞、竪穴12では洪武通宝1枚＜55＞、竪穴20では熙寧元宝1枚、竪穴22では不明1枚、土坑2では重和通宝1枚＜51＞、土坑16では永楽通宝1枚＜64＞、土坑25（火葬墓では天禧通宝、永楽通宝、不明各1枚＜13・65＞）、焼土2では開元通宝・景徳元宝各1枚・計2枚＜7・24＞、焼土24では皇宋通宝1枚＜22＞、焼土30では元祐通宝1枚＜45＞が出土している。

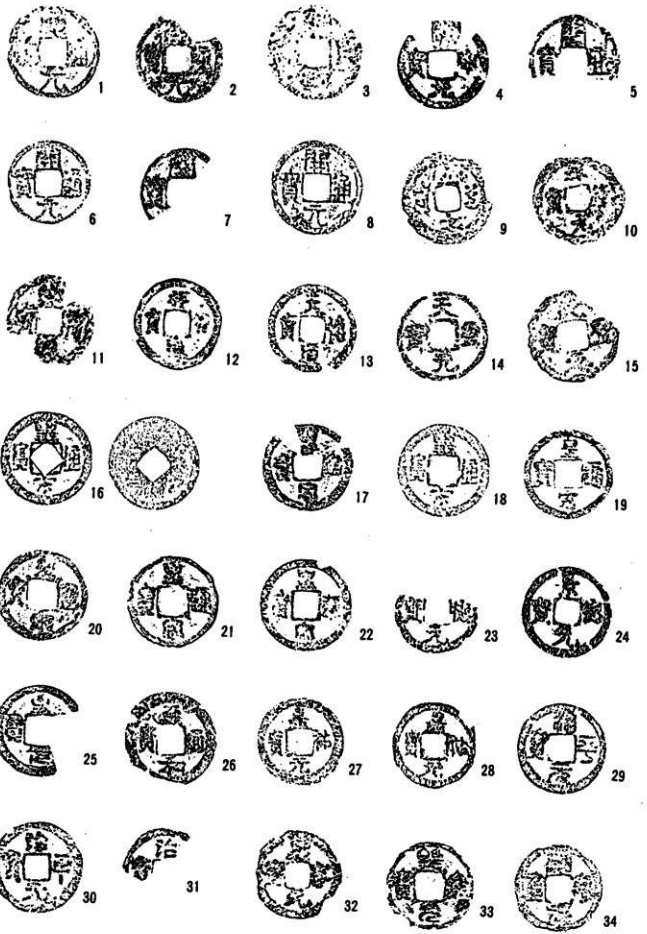

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34

図114　銭（1）（1：1）

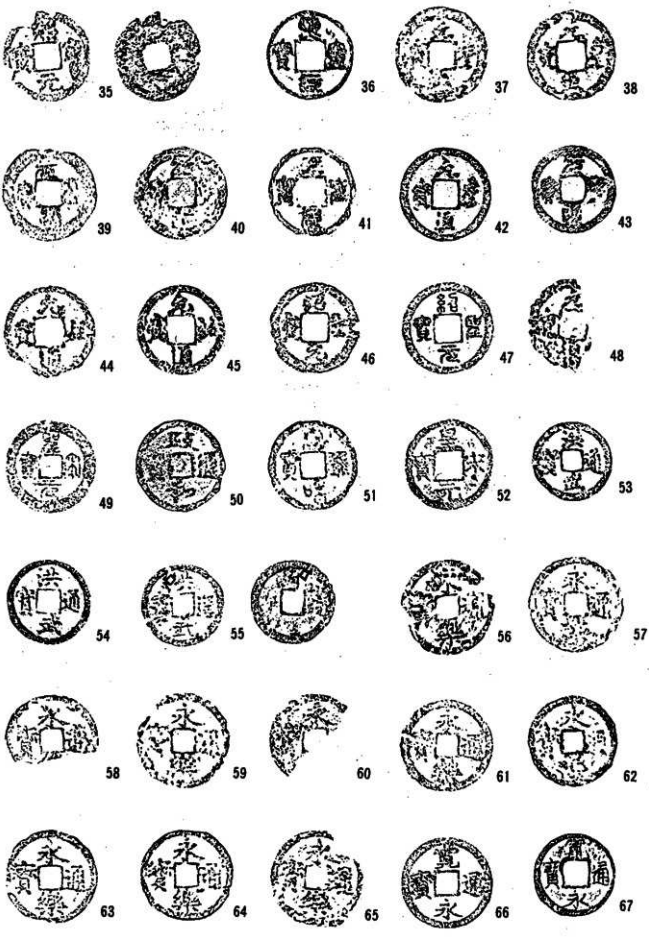

35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67

図115　銭（2）（1:1）

第Ⅴ章　結　　語

1．長畑遺跡について

長畑遺跡のあるところは、現代の目からすると、すぐに西に壁のように立ちはだかる山があって、午後の日が早く隠れてしまうという点で、あまり住み良い環境とは言い難いであろう。しかしここにこれだけの遺構が検出され、大昔からかなり多く住む暮す人々がいたということは、当時それなりに良いことがあったのであろう。そのことはこれからしっかりと考えてみなければならないことである。

縄文時代　弥生時代の遺構もさることながら、この遺構で注目されるのは製鉄遺構である。この地方の遺跡から製鉄品の出土する例は次第にふえており、その種類も武器や馬具から農具までさまざまである。それらは今までほすべてで他地方からの移入品と考えられていたのだが、本遺跡における所見で、少なくとも平安末から中世初頭にかけての一時期、ここで鉄材の生産が行われ、ある程度の供給があったと考えることができるようになったのは、歴史研究上の大きな収穫である。

ここで製鉄を行った集団が、全国的な視野からするとどのような立場の人たちであったのかは、今後の研究課題であろうが、かれらは高瀬川のまずは良質とされる砂鉄と、大量に必要な木炭の原材を容易に入手できるという条件をふまえて、ここに作業所を構えたわけであろう。さまざまな分野の技術者や職人の他にその家族もいて、ここで集団的な生活をしていたと考えたい。当時の40軒を超える住居跡の全部がそうだとは言いきれないにしても、かなりの部分が製鉄集団に属する家ではないだろうか。ここで作られた鉄の販売径路のようなことがわかってくれば、また面白いことになるにちがいない。

2．清水氏居館跡について

中世　安曇のほとんどの村（現在の大字）に居住していた、開拓地主ともいってよい土豪たちの居館跡は、江戸時代には田畑となり住宅となり、あるいは寺地となるなどして旧観は早くに失われたが、それでも伝承はあり地名や地割などにもそれらしいものが残っていて、早く信府統記などにも記録された。昭和になってからの故一志茂樹博士の仁科氏の山城や居館跡についての先駆的な研究も、こうした資料と実地踏査による確認作業の上に 築かれたものであり、跡地に埋もれた土を除いて、直接遺構を目にしたものではなかった。

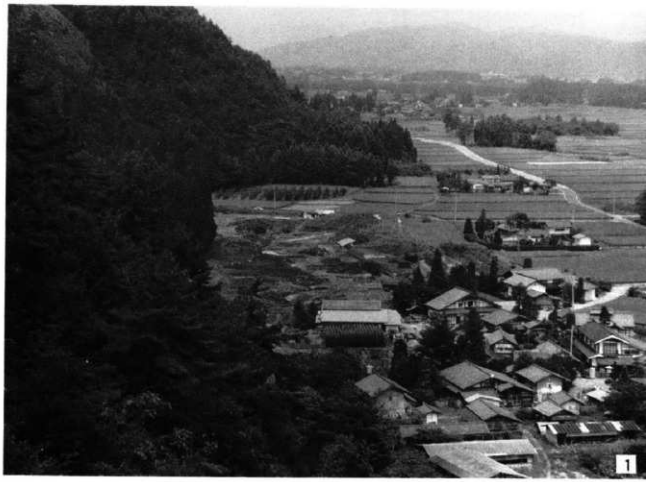
このたびの圃場整備事業の事前調査として行われた、清水氏居館跡の発掘調査は　前年度の小海戸遺跡のそれとともに、仁科氏配下の土豪の生活実態をまざまざとあらわしとた画期的なものであり、発掘調査例の少ないこの分野の研究に大きな寄与をするものと言ってよい。

清水氏という仁科氏の被官（おそらく一族かと思われる）の支配地域が、現在のどれほどの集落に及ぶのかはわからないが、仮に清水集落全域と考えるならば、仁科氏滅亡の時点から約10年後の時点でこの村は321石余の村高を持っており、これがおよそ清水氏の勢力というに近いと考えられる。江戸時代の武士にあてはめれば上士ではあるが決して大身ではない。それが在地の小土豪として東西130m、南北100mに及ぶ外濠と内濠にかこまれた広大な居館を構えていたとは驚きである。もっとも60m×45mほどの主郭内にあった母屋そのものは、さほど大規模なものではなかったようだ。いずれにしろ今後発掘成果を検討することにより、中世土豪の居館のさまざまな顔が明かになってくることであろう。

末尾ながら両遺跡の調査に当たられた大町市教育委員会埋蔵文化財係の職員ならびに調査に御協力下さった多くの市民の皆さんの労苦に対し深い敬意と感謝を捧げるものである。（団長・篠崎健一郎）

長畑遺跡

1．遠景（南側山頂より）

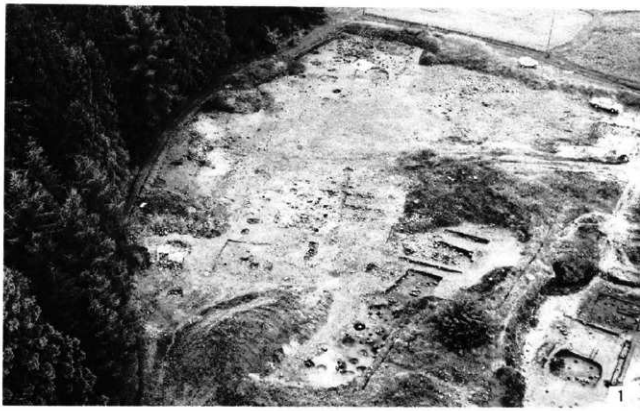


2．近景（北より）

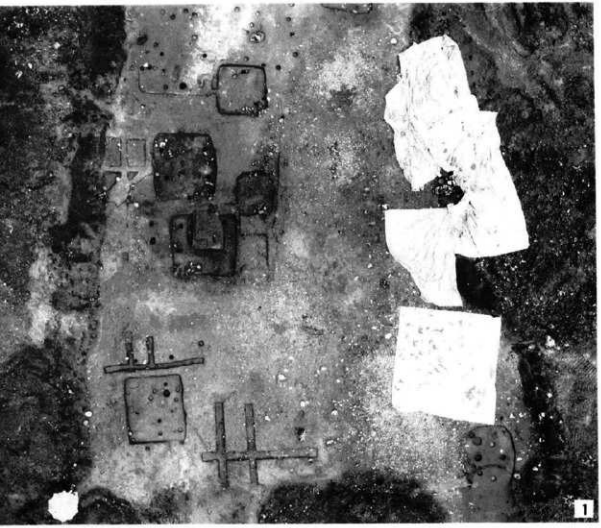
写真 2

南側調査区（Ⅱ区）
全景（上空より）

1．北調査区（Ⅰ区）
全景（南上空より）



2．南調査区（Ⅱ区）
北側全景
（9～13・17～22住、
鉄製関係遺構2等。
上空より）



1．南側調査区（Ⅱ区）
中央北側全景
（19～25・31・7住、
鉄製関係遺構3等。
上空より）

2．南調査区（Ⅱ区）
中央南側全景
（26～30・40住、
建物1等。上空より）

1．縄文時代前期末～
中期初頭土坑群
（土坑20～35・37号住居跡。上空より）

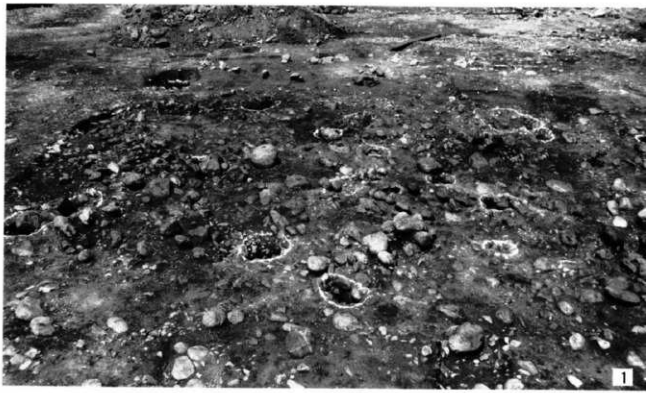
2．縄文時代前期末～
中期初頭土坑群
（土坑20～35・37号住居跡。北より）

縄文時代前期末～
中期初頭
1．土坑26
2．土坑46
（この土坑の土器
は接合した）

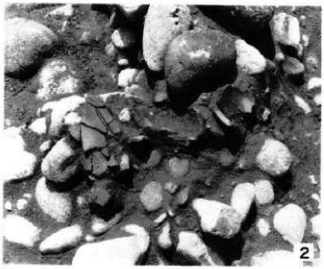
3．土坑31
4．土坑43

5．縄文時代中期
後半.37号住居跡
（東より）

1．柱穴群4
（縄文時代中期初頭）



2．柱穴群4内土器出土状況



3．土坑5
（縄文時代後期前半）

4．土坑15
（縄文時代晩期後半）

1．縄文時代晩期末集石群（土坑群）列石、柱穴群3全景

2．集石群（土坑群）全景（北東より）

3．列石2（縄文時代晩期末。東より）